

陽堂文庫

特 264

706

64

義時之最期

坪内逍遙



始



特 264
706

107

春陽堂文庫

— 64 —

義時之最期

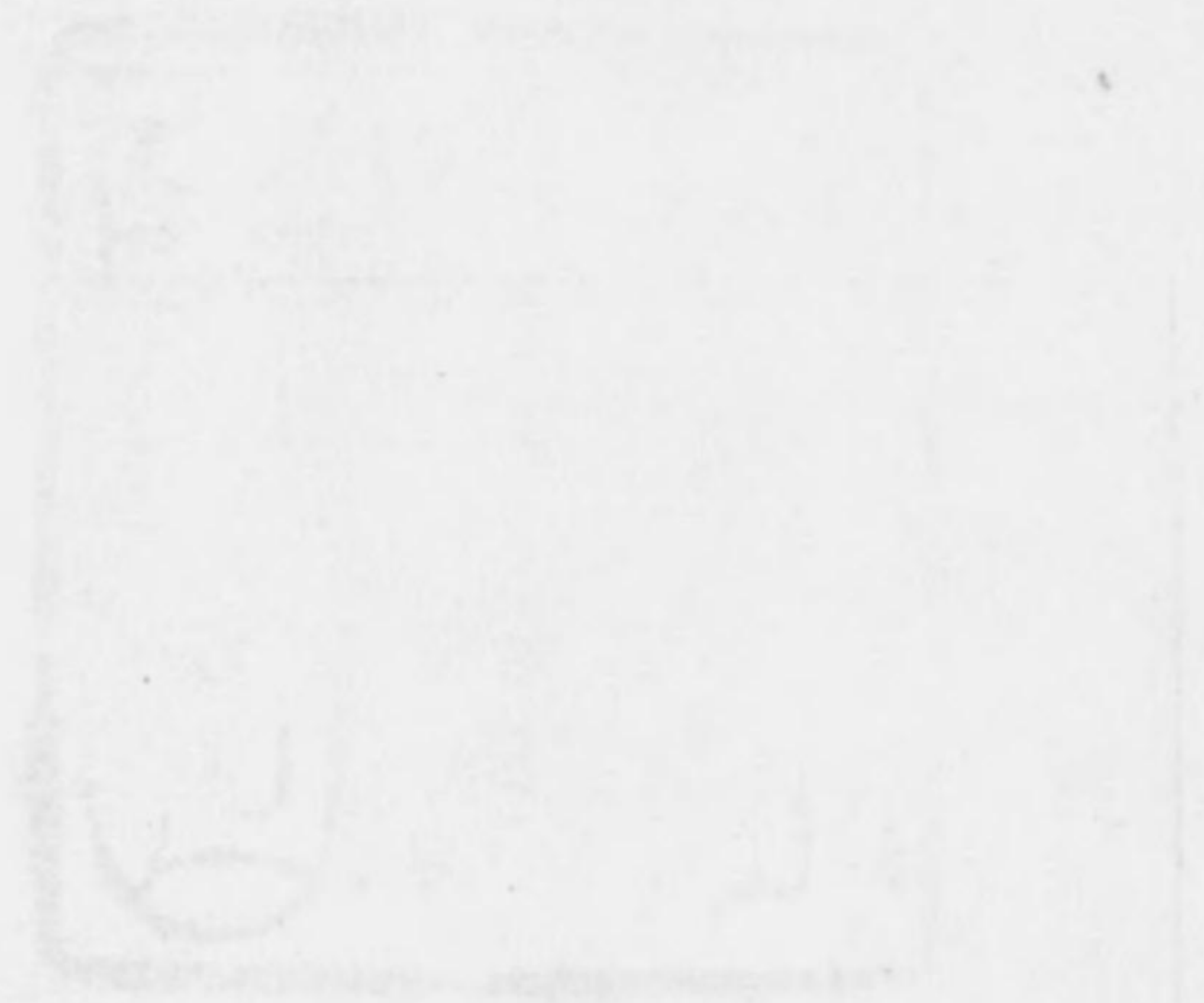
坪内逍遙



春陽堂



義時の最期



340-359

3

義時の最期

第一幕

第一場 葛西ヶ谷北條家別第中門前

第二場 同別第内奥の一室

第三場 伊賀の方の居間

第二幕

第一場 北條家別第の奥庭

第二場 奥庭谷間座禪堂

第三場 座禪堂の背後

第四場 以前の堂内

第三幕

第一場 義時の寢所

第二場 夢の裡の幻景

第三場 再び義時の寢所

第四場 伊賀の方の居間

第一幕

第一場 葛西ヶ谷北條別第中門前

時は貞應三年八月初旬、處は鎌倉葛西ヶ谷附近、屏風山の麓の、北條家の別第である。此第は貞應二年の秋——ちやうど彼の承久の大亂の鎮まつた翌年——の新築で、大倉卿の本第とは、滑川一筋を隔て、さしわたし僅かに一町餘り、奥庭つきで自由に往來が出来るやうになつてゐる。

此別第の奥庭には、ゆたかに小富士山や屏風山の裾が取入れてあるので、其一部はさながらの深山幽谷であつて、そこには主人公の好みに成つた和唐折衷の、質素な座禪堂などがある。

主人公の北條右京の權の太夫義時は、ことしはもう六十二歳である。彼れは、去る貞應二年の夏、重い傷寒を病んで以來、それはやがて治つたが、病後の衰弱が甚しく、とかく、健康が勝れないので、侍醫の行運法師の勧めによつて、修禪をはじめ、専ら此別第に住み、一時は大分恢復の體であつたが、昨年の秋以來、またわるくなり、とかく褥に親みがちなので、勿論出仕などはえせず、庭内の漫歩さへも極めてたまさかで、起きたり臥たりといふ日が多かつた。

先妻の「吳羽の方」と呼んだのは、十九年前に歿して、現在の夫人は、彼の承久の亂のはじめに京都の守護職を勤めてゐて、宮方の不意討に遭つて、勇ましい戦死を遂げた故伊賀の判官光季の妹で、名は榮子、「伊賀の方」と呼ばれてゐた。其腹に出來た長女は一條宰相の中將藤原の實雅に嫁し、次の男子は義時の第五男で、三浦駿河守義村を烏帽子親として、四郎政村と呼ばれ、ことしはまだ十六歳で、やつと元服したばかりであつた。

義時が、靜養の爲に、別第に移つてからも、伊賀の方は本邸に留まつてゐたから、義時が朝夕の看護は主として二老女と一少年の手に委ねられてゐた。老女の一人は義時が江間の小四郎時代からの附人、故亘理平六兵衛尉の後家で、ことしは七十五歳、「亘理の婆」といふのが其通り名であつた。又、一人は、先妻吳羽の方の姪で、齡は四十五六、故岳島右近の妻であつたが、これも、とうに——姉の在世中に——夫に死別れ、それ以來、「右近」といふ通り名で、北條家の侍女頭を勤めて、現在に及んでゐるので、二人とも一族間には——奥方の關係者以外に對しては——中々威權が有り、殊に別第一切の事は、此二人が切盛してゐた。

一少年といふのは、名を深見の小三郎といふまだ十八歳の侍童あがりの美少年で、十三四の時分から主人公の傍去らすである。これは、つい四年前に頓死したまでは、「執權職の執權」とさへ唱はれて、威を振つてゐた義時が無二の腹心、深見、三郎次郎致興の伴であ

る。父三郎次郎は、其頓死後に、種々の罪跡が俄に露見し、領地は悉く没收せられ、遺族までも嚴罰を蒙つたが、ひとり小三郎だけは、特別の沙汰で赦され、今も尙ほ仕へてゐたのである。十八歳ではあるが、まだ元服は済まさないであつた。

當時、義時の長男、武藏守泰時（四十一歳）は、京都守護の爲に、彼地に赴任してをり、義時の姉の、例の政子の尼御臺は、ことしはもう六十八歳であつたが、尙ほ嬰鑠たるもので、年少の將軍藤原の頼經の後見をして、隠然鎌倉幕府の政柄を握つてゐるとも見えてゐた。

そのころ、北條一家の外で、重きを置かれてゐた故老はといふと、第一に大江の廣元入道覺阿、次は三浦駿河守義村なぞであつたが、伊賀の方との關係上、一部の瞻望の的となつてゐたのは、其兄の伊賀の式部の丞光宗と其婿の宰相中將藤原の實雅であつた。

以上は、此序幕第一場當時の歴史的背景の概略である。

ところが、貞應三年八月七日の午後四時頃の事である。主人公義時は、此十日ばかりは、とかく病褥に親しんでゐたのであつたが、其日は聊か快いので、奥庭の座禪堂あたりまで漫歩するといひ出し、老女らの止めるのも聽かず、庭内へ出たところが、病ひが俄に發作して卒倒し、暫くは正氣に戻らなかつたので第内は上を下への騒ぎ。折から奥方伊賀の方も、此十餘日餘り、持病の爲に、床に就いてをり、長子の泰時は滯京中で不在なので、一

段の狼狽。が、幸ひにして侍醫の行運法師が程なく駆け付けて手當に及んだので、發作は難なく収まつた。けれども、一時は此珍事を傳へ聞いて、八方より馳せ付ける夥しい見舞客の爲に、別第の門前は市をなしたが、戌の刻（午後八時）も過ぎて、七日の月がもう既に傾く頃となつては、おひ／＼に引取り、今は、伊賀の方の實兄、式部の丞光宗、同實子四郎政村、同女婿、宰相中將藤原の實雅、侍醫の行運法師なぞが居残つてゐるのみである。中央よりはやゝ下手寄りに中門があつて、其上、下は築地、中門内の上手には第の一部の屋根が見え、それから下手へかけては庭續きの、間近の松杉の繁茂した山々が重疊して見えてゐる。上手の前寄りには、左右へ大きな根を張つた三抱へもあらうといふ樟の大きな幹だけが見えてをり、それから上手の奥へかけては大小の雑木の立木。それから、中門のすつと下手の奥には、袖塀を隔て、待ひ所の建物が見える。其前の方にも大小の立木。中門の少し上手に——築地ぎはに——椎か何かの立木の幹が二本。其二本の立木に馬が二頭繋いでゐる。一頭は實雅の乗馬で、一頭は光宗のである。それから樟の根がたには、二人の従者が凭れかゝつて熟睡してゐる。一人は實雅の従者の甲で、一人は光宗の従者、川西の小丹次（二十五六）である。

中央には、其他の侍の従者、乙、丙、丁の三人が下手へ向いて不規則に立並び、當別第の老僕、加持の藤内（六十五六）と小童の砂王（十二三）とが、ちやうど中門の前の處に、

彼等と向ひあつて立つてゐる。藤内は箒を、砂王は馬柄杓を容れた手桶を掲げてゐる。

藤内 はい／＼。いかにも、もはや戌の刻は過ぎましてござるが、御主人がたのお立ちまてには、まだ中々お手間が取れませうず程に、いづれもさぞ御空腹でござらう。あの侍ひ所に附いて右へお廻りなされると、お臺所の直すこなたに大溜りがござる。あれにて夕餐ゆふけをおしたゝめなされ。これはお老女がたのお心入れてござる。……さア／＼、ござりませ、ござりませ。

従者乙 それは千萬かたじけなうござる。……(丙、丁を見返り)では、いづれも、お振舞にあづかりませうか？

従者丙 いかにも、さやういたさう。……(丁、乙に)さ、ござれ／＼。

ト乙、丙、丁揃つて下手へ入る。

藤内 (三人を見送つて)まづ、これで人間の始末だけは附いた。さて、これからが(ト馬に向つて)おぬしたちだ。なんぼ畜生でも、明るいうちから食はず飲まずの立ちん坊ぢやア可哀さうだ。……砂王どん、こいつらをも早うお厭へ連れて行つて、何か振舞つてやらつしやい。

トこれにて砂王、繫いである一疋の馬の端綱はしなを解き、それを引立てつゝ、手桶を片手に掲げて、上手へ入る。其間に藤内は他の一疋のを解きながら、四下かたうを見廻して

どうだ！ この、汚けい物を取散らしたことは！ 何にしろ、俄かの騒ぎで、入りかはり立ちかはり、お大名衆が駆け付けさつしやつたので、御門前も、御門内も、まるで軍場いくさばのやうだつたが、やつと

是れでかたづいた。……ちよつくら此邊こゝだけでも掃いておかうか？

ト箒を取り直す。此内、上手の奥にて、砂王の聲にて

唄へ方かたも方にかたさふらふよ。

時ときも時ときにさふらふよ。

たんだ一字ちがうた！

まアさとまアさ、まアさとまアさ。

まざ／＼ツと物の怪もののけ！

たんだ一字ちがうた！

物の怪もののけや物の怪もののけツ！

たんだ一字ちがうた！

ト歌ふ聲が聞える。此唄の節は、さつと狂言小唄のそれに似てゐる。中にも囃子言葉の「たんだ一字ちがうた！」の拍子は、狂言の「でんでんむしむし！」のそれである。

藤内 (忌々しげに)えゝ、また始めやがつた！(ト上手の奥に向つて)これ／＼！ その唄は止めた、止めた！

トこのうち砂王、空手で上手から戻つて来て、ふつと樟の根がたに眠つてゐる二人を見附ける。

義時最期 砂王 ヤア！ まだ爰に二人だけ残つてゐらア、お家來衆が！……（ト傍へ往つて見て）あゝ、よく眠込んでゐらア！

トこれにて藤内も目を付け

藤内 お、いかさま！……起きつしやいよ。

ト砂王すつと近寄つて呼ぶ。

砂王 もしく！もしく！……（ト一寸ゆすぶつて見て）中々起きないや。

藤内 ちや、よしく……。ぬしは、此馬をば引張つてゆかつしやい。

ト馬を渡す。砂王それを牽いて、又上手へ入る。藤内は眠つてゐる二人の傍へ行き、ゆすぶつて

おいく！……これさく！

トこれにて小丹次と甲と一しよに目を覺まし、共に大欠伸をする。

小丹次 あゝ！ ついぐつすりつとやつたと見える。あゝ、ねぶたいく！

從者甲 （改めて欠伸をしながら）あゝく！ わしも同じくござります。何にせい、昨夜の今夜ちや程になア。

ト藤内二人の顔を見て

10 藤内 おゝ、だれかと思つたら、中將さまの御家來衆と甥の小丹次か？ 若いだけに宵まどひだな

11

う。あはゝゝゝ！

ト小丹次は目をこすりながら

小丹次 だつて、叔父貴、けふで三晩ぶつときの夜深しのお侶だ。ゆうべなんかは夜が明けつちまつた。

藤内 何？ 三晩ぶつときの夜深しだ？ それちやア眠たいのも道理だ。あはゝゝゝ！ おい！ もうとうに戌を過ぎたぞよ、嚙腹が空つたらう。さ、早うお溜りへ往つて、お振舞にありつかつしやい。

從者甲 それははや、かたじけなうござります……（ト正面を見て）はてなア！ お乗馬は何處へ往つたか？

藤内 なアに！ 畜生だつて可哀さうだからなう、今あつちへ引張つて往つて、飼ひ葉を振舞つてゐるところだ。

從者甲 いやも、それはかさねくかたじけなうござります……（ト小丹次を見返り）それでは一しよにお振舞にあづかりましょかいな？

小丹次 いや、どうか、おれに介意はないで。おれは昨夜で懲りたから、けふは十分詰め込んで來た。まだ何も欲しかアない。

義時最期 從者甲 さうか？ では、わしは御厄介になつて來ませう。

ト甲は下手へ入る。此間藤内は、上下を箒で掃いてゐる。小丹次は又一つ欠伸をしながら
小丹次 叔父貴、今夜はほんたうに寝耳に水の大騒ぎだつたなう。それでもまア、思つたよりアお輕
くツて済んで、ようござつたなう。

藤内 うん。おれもなう(ト尙ほ掃きながら)一時は如何なることかと氣を揉んだが、御典藥の行
蓮どのが早速に駈け付けてござつたので、お手當がよう届いて、まづ大事にもならなうだが、何分
一昨年しとしの御大病以來、よかつたり、わるかつたり、二年ごしのお煩ひだ。お齡としも既もう六十二だ。御
自分ぢやもう大概なほ癒つた氣でござらつしやるさうなが、心が弱り切つてござるといふから心配だ。

小丹次 それに、あの、奥さまの御病氣も、此二三日は滅切おわるいと思えて、俺のこの大將や宰
相さまは、きのふも、一昨日おとといも、宵からお本第ほんだへ詰めツ切りだ。昨夜ゆうよなんざア夜明した。

藤内 はてな！ (ト箒を止めて) 此間うち、大分御不加減だとは聞いてゐたが、それほどだとは
知らなんだがなう。……(ト頭を一つ二つ振つて) あゝ、どうも少ちとべい善くないことが續き過ぎる。

(ト獨り言のやうに言つて) それに付けても氣にかゝるのは、あの子供らの歌やアがる唄だ。
小丹次 え？ 唄？ あの、「まざくツと物の怪！ たんだ一字ちがうた！」といふ唄か？

藤内 さうよ。(ト掃き残しを掃き寄せながら) 何となく氣味のわるい唄だ。さうでなくつても、
老公さまの今度の妙なお煩ひは、禁廷さまをお三方までも流し物にさつしやつた罰だの、祟りだの
と、世間で言ひ觸らしてゐる處だからなう。

小丹次 さう言やア、老公さまは、(ト一寸聲をひそめて) 随分若い時から沒義道もぎだうな事をなすつた人
だといふから、何かの報いかも知れないや。とにかく妙なお煩ひだなう。あんな偉い、膽ツ玉の据
わつたお人が、今ぢやア半時とおちついては能う眠らつしやらんばかりでなく、怖ろしく邪推深く
ならつしやつて、夜はあの二人の御老女と小三郎どのゝ外は、だアレもお傍そばへは寄せさつしやらん
と言ふぢやアないか？

ト藤内は、それには答へず、少し間を置いて

藤内 とにかく、氣むづかしくならしやつたには相違ない。何にしろ、困つたもんだ。

ト言ひく、掃きしまふ。

小丹次 それに、あの、御別居以來、奥方とのお間柄も、一段と不味まずいらしいなう。一町半とは隔た
つちや居ないお別第しよだのに、奥方がお見舞なされるの、月に一度か二度だと言ふぢやアないか？

藤内 さア、(ト樟の根がたへ、小丹次と並んで、腰をおろしながら) 大きな聲ぢやア言はれんが、
つい半月ばかり前に、久しぶりて奥方がござつた時にも、何だかいざござがあつたやうだし……
(トいびかけて) あゝ！ あの奥のお庭に、お座禪堂が出来た當座は、大分お加減も、御機嫌もよ
かつたがなア！

ト獨り言のやうに言ふ。

小丹次 若しこゝで、老公さまに萬一の事でもあつたら、跡は如何どうなるだらう？

藤内 さア、それが心配だ。第一、執權職のお跡目からが、あのお惣領の、武藏守泰時さまと、きまつてゐるやうでもあれば、ぬやうでもあるからなう。

小丹次 なるほど。

藤内 ところで、その泰時さまと奥方の伊賀の方さまとは生さぬ仲だ。

小丹次 なるほど。

藤内 だから、泰時さまの世になりやア、御當人はもとより、實のお子の、あの四郎政村さまも、お婿の宰相實雅さまも、おのしのとこの大將も、おのづと今ほどにア幅の利かないことになるからなう。

小丹次 なるほど。

藤内 ゆうべも一昨日も（トいひかけて一寸考へ）お三人で夜深しの相談といふなア、事によると……

トいひかけたが、急に口を噤む。

小丹次 え？

藤内 いや、考へて見りやア、お跡目の事や何やかや、お氣が揉めてならない筈だ。言はゞ、あの牧の方さまと、ちやうど同じやうな廻り合せだ。

14 小丹次 牧の方さまといふのは、御先代時政公の、二度目の奥方のことだらう。たしか謀反か何かた

くらんで、それが露れて、自害をさつしやつた人だらう？

藤内 その方だ。（ト昔を偲ぶやうに）あの時の一味は、お婿の平賀右衛門の佐朝雅さま。實の子の名が政範さま。其時分、相模守さまといつたのが、なさぬ仲の今の老公さまだ。……（トいつて、口の内で）方も方、時も時。……まささま。……全くたつた一字ちがひだ！

小丹次 え？

ト此途端、向う（花道）より醫師紀河の矩秀（四十歳位）旅装束にて、急がしげに出て来り、すぐに中門へ入らうとして、忽ち藤内を見付け、立ちどまる。

矩秀 や！ これは、藤内どの！ 先づ以て御同様に大慶至極の儀でござりましたなア！ 實はなア、われら、薬草採り集めのため、今、日箱根路へと志し、既になア、あの大磯近うまで参つたる處、宿元からの早飛脚によつて、老公さま御容體俄に御變動と承つたのでびつくり仰天、すぐさま取つて返しましたこととてござるが、先づ以て速かなる御回春は、大慶千萬でござる！ や、さまで、御高運な儀で、いやもう、重疊々々！ 御同前に、祝著至極の儀でござつた。……お！ どなたかと存じたら、伊賀さまのお館の、小丹次どのか？……お見舞のお侶でござるな。ではまだ

御主君には、御當邸に御座なされますな？

小丹次 はい。さやうでござる。

矩秀 いや、それは重疊！ 多分さうあらうと存じてまゐつた。上首尾々々々！ どれ、早速お目

にかゝつて参らう。御免下され。

ト矩秀そば／＼と急いで中門へ入る。

小丹次 相かはらず氣ぜはしい男だ。

藤内 肉親の兄弟ちふものは争はれんものだ。おぬしは記えちやアるまいが、あの男の兄は紀河の宗近といつて、よう似たあわて者の醫者であつたが、慾をかはいて牧の方さまの御謀反に一味して、とう／＼命を玉なしにしてしまった。

小丹次 さういや、あの男も、この二三年こつち、頻つて俺のところや伊賀の方さまに取入るやうだが、つまり御典藥にでもならうといふ慾張りからだらう。

藤内 いづれ、そんなこつたらう。……(歎息して) あゝ、なぜ人は身の分限を守らんで又しても又しても慾をかはくか！……が、下々の者が慾で身を誤るのも道理かい。上の上の禁廷さまさへ——じつとしてござれア何の事も無いのに——一昨年あの御謀反。その結局が、あゝしたお氣の毒な、物體もないお身の果だ。唐にも天竺にも例のない空おそろしい事だ！ 禁廷さまを、しかもお三方まで島流し！……あゝ、どうかこれツきりて、何事もなければよいが。……(トいつて、半分口のうちに) まさとまさ。時も時。……全くたつた一字ちがひだ！

小丹次 えー(ト藤内の顔を見返つて) どう？ 何が？

ト此途端、上手の奥にて、又砂王の聲にて

唄へまアさとまアさ、まアさとまアさ。

まさ／＼ツと物の怪！

たんだ一字ちがうた！

物の怪や物の怪ツ！

たんだ一字ちがうた！

藤内 えゝ、いま／＼しい奴だ！ 又あの唄を歌やアがる。……(ト上手に向ひて) これ／＼！

止め、止め、止め！ その唄はやめた／＼！

ト大きな聲にて叫ぶ、唄止む。藤内は溜息をして

あゝ、氣にかゝることだ！

ト此うち上手より砂王、馬柄杓で空の手桶を叩き、拍子を取りつゝ、又歌ひつゝ出て来る。

砂王 唄へ方も方にさふらふよ。

時も時にさふらふよ。

たんだ一字ちがうた！

まアさとまアさ、まアさとまアさ。

まさ／＼ツと物の怪！

たんだ一字ちが……

藤内 えゝ、まだ歌やアがるか？ その唄は止めだちふに……

ト飛びかゝつて砂王の襟上を捕へてこづく。

砂王 (泣面になりて) あゝ、痛い……堪忍してくんな……堪忍してくんな……

小丹次 これさ、叔父貴……そんな手荒なことを。

ト小丹次中へ入り、よろしく止める。藤内と砂王を突き放す。砂王つんのめつて膝を突き、膝頭をすりむいたらしく、ワーツと泣き出す。

第二場 同別第内奥の一室

正面の上手寄り五間の間の中央一間は妻戸。其上下二間宛は壁。折り曲つて上手一帯は蒔格子を下して在り、又、下手へ折り曲つたる奥寄りの二間程は正面と同様の壁、前寄りの二間程は帳(壁代)を垂れ、人物は屢々それを裏へて往來する。

其帳の下手に廊下口。正面の二間程は蒔格子を下し、すつと下手の見切は妻戸。こゝからも折々人物が出入する。

爰に、正面奥の妻戸前に、深見小三郎(十八歳)まだ元服せざる童形の拵へにて、妻戸の掩ひになるやうな態度にて此方向きに端坐し、今奥へ行かうとしてゐる紀河の矩秀を留めてゐる。矩秀は、やゝ斜に後ろ向きに立ち身。二人とも既う大分激昂してゐる體である。

時刻は前の場のすぐ次ぎ。よき處に燈臺一脚。他には何等の調度も見えない。

矩秀 はて、お退きなさい。お通しなさい。光宗さまに是非ともお目にかゝらねばならん急用がござるのだ。お通しなされ！

小三郎 いゝや、老公さま御容體お大切の折柄でござります。お取次ぎを承りをる手前に只一應の御挨拶もなく、御病間へ推參めざるは不躰でござる。お控へなされ！

矩秀 はて、餘人ならば存せんことだが、自分は奥方伊賀の方さまのお引き立てを蒙りをるお抱への醫師でござる。御容體伺ひの爲には、随分御病間へも推參いたす。はて、お通しなされと申すに！

小三郎 いゝや、通されません。其伊賀の御方さへも、御遠慮遊ばされて、お取次ぎなしには、御病間へはお通りなされません。殊に、只今、お傍には天下無双の名醫御典藥の行蓮どのが附添ひをられます。かたゞ、以てお手前などが推參めざるには及びません。御無用でござる！

矩秀 何だと……(ト開き直つて)これは異なことを申される。……成る程、行蓮どのは天下無双の名醫でもござらう。が、それを何の爲に持出すのだ？……ちよこ才な！

小三郎 (くわつとなつて)ちよこ才とは！ 何がちよこ才でござる？

矩秀 はて、それがちよこ才だ。……これ、なんぼ御寵愛を蒙つて、大寺の兒衆並に幅が利けばとて、あんまり増長しめざると、父御三郎次郎どの同様、はじめの榮華は末の零落、みじめな身の果

となりますぞよ。

小三郎 (眞着になつて) ヤア! 大寺の兒衆並に御寵愛を蒙つてとは、聞き棄てにくい。何が兒衆並でござる?

矩秀 はて、兒衆並でなからうか? お手前ことし幾つだ? もう十八よりヤア少くはあるまい。それに何だ? 元服もせず。……えゝ! その生ツ白い面附きを見るたびに胸氣がわるくなる。奥方のお仲たがひも、つまりは、おぬしらから起つたことだ。……ちよこ才な!

トいひすてゝ、つツと通りぬけて、奥へ行かうとする。途端に入れ代つて、小三郎は矩秀の袖を控へる。

小三郎 いゝや、お待ちなさい!……奥方とお仲たがひも、手前から起つたことゝは? さ! 其譯を承りませう。

ト涙聲になつて、せき込んで、身をふるはせてゐる。

矩秀 えゝ! おはなしなさい。

小三郎 其わけを承らんうちは離しません。

矩秀 しつこい! 何のかのと、御用がおくれる。離さつせい。……えゝ、離さつせいといふに!

ト立廻りになる。とゞ、矩秀は手荒く小三郎を突離し、すぐに妻戸を開けて、奥へ行かうとする。

途端に、義時の侍醫、行蓮法師(五十七八)小坊主(十二三)一人を従へ、老女右近(四十五六)垂髪、小袿、に送られて出る、出逢ひがしら。

行蓮 はい! これは紀河どのか!

矩秀 や!……これは行蓮どの! これはく、粗忽千萬! 御免下され。

ト右近は、矩秀へ追ひ縋らうとした小三郎を押し隔てつゝ

右近 (しづかに) 小三郎どの、……此體は?

ト小三郎が何か言はうとするうちに

矩秀 いや、なに、これは物でござる。つい、その、いさゝか取急ぎましたので……いや、心せまにござれば、眞ツ平御免下され。

ト矩秀はそこへ會釋して奥へ入る。行蓮と右近とは、それを見送つて、不審の思入。右

近はやがて小三郎を見返り

右近 小三郎どの、御典藥どのへ、いつもの通り、お茶を。

トわざと席をはづさせる。

小三郎 心得ました。

ト下手へ入る。右近會釋して行蓮を上座に着かせ

右近 改めて伺ひますが、老公さまの御容體はいかゞにわたらせられますか? もはや甚うお氣

づかひ申し上ぐる程でもござりますまいか？

行 蓮 されば、何分にも、近ごろ不思議のお病痾いんたうきでござるゆゑ、かんまへて御油断は相成りませぬが、あゝした御卒倒、御氣絶は、御疲勞の餘りとして、間々あること。さしあたつての處、強ち御懸念にも及びますまい。したが、先頃も聊か申しおいたる通り、病邪およそ六種のうち、とりわけ座禪不調、鬼病、業病の此三つは、醫師の力、藥餌の力ばかりでは覺束なうござる。座禪の不調は専ら座禪によつて治すべく、鬼病は神咒法力を恃むべく、さて又業病には、何よりも先づ奇特の御懺悔こそ肝要でござる。われら、一昨年以來、頻つて禪機の御修行をお勧め申したは、畢竟そこを存じてござつた。お加持、お祈禱の儀は、もとより御如在のあらう筈なし。只心がよりは第三種の業病でござる。前世に餘んの善業あれば庸醫も能く重患を治し、前世に餘んの惡業あれば、如何なる靈藥の力を以ても、かりそめの少病だに、之を治すること甚だ難しとござる。

右 近 では御當症は、あの、お業病ぢやといふお按檢ござりますすよな？

行 蓮 されば、かの不思議なお譚語せんごといひ、いよ／＼募らせらるゝ御不眠といひ……

ト此時、小三郎天目に抹茶を盛り、臺に載せ、捧げて出る。

小三郎 お茶めしあがられませう。

行 蓮 これはかたむけなうござる。……(ト受取りて半分ほど飲み)時に、過日も申しおいたれば、

よもや御病人にお茶を參らせらるゝやうの儀はござるまいな？

小三郎 はい。其後は、いかやうに仰せられましても、決してさし上げませぬ。

行 蓮 (うなづきつゝ、飲み了りて)まことに、此物は、命を養ふの仙藥、齡とほひを延ぶるの妙術。山谷これを生ずれば、其地神靈たり、人倫これを採れば、其人長命なりとさへござれども、御不眠などの爲には大の敵藥。かんまへて御無用でござるぞ。

小三郎 其お言葉に附きまして、甚だ卒爾ながら、手前が聊か承りたい儀がござりますが……

ト言ひさして躊躇する。

行 蓮 何事でござるの？

小三郎 あの、日頃深く酒を嗜みまする者が、茶の毒に中り、頓死いたすなど、申すことがござりますか？

行 蓮 (言下に)さやうな儀はふつに存せん。既に前將軍家實朝公御不例の折、先師榮西禪師が、これは只御宿醒ごしゆくせいの餘りと按檢しまゐらせ、清茶一椀を獻じめされたる處、忽ちに御平癒の先例がござる。すなはち茶は寧ろ酒の毒を解する妙藥。……なにゆゑ然様の儀をたづねめさる？

小三郎 さア、豫て其儀をば承り承りましたものと相見え、亡父三郎次郎事も、生前、大酒の後には、必ずのやうに茶を服用いたしをりましたが、ある朝——即ち臨終の前の事でござりましたさうな——例の通り、一椀の茶を嚥ると間もなく、身心激しく惱亂いたし、わづらふこと僅に半時ほどで相果てました。全く茶毒の爲す所と、其際紀河の矩秀どの申されたやら承りましたが、何とも

以て不審に存じまして……

トいひかける。

行蓮 あゝいや、いかな清茶の妙用も、多年累積の激しい酒毒に對してはな……

トいひかけたが、俄かに思ひ出したといふ風に

おゝ！ すぐさま尼公さま御許へ參上仕るべきお約束であつた。では、御免下され。

ト急に席を起つ。右近も小三郎も席を離れて見送らうとする。

あ、そのまゝ……

トとめて、行蓮は、小坊主を従へて、下手へ入る。

小三郎は一旦起ちかけて又坐り、じつと思案に沈んでゐる。

右近は立つたまゝ、思入あつて

右近 小三郎どの、これへ。

ト上手へ戻りて、座に着き、四下へこなしあつて

ちやうどよい折柄ゆゑ——只今こなたの申されたことを聞くに附けて——ちと折入つて知らせておきたいことがござる。……もそつと近う。

ト小三郎膝を進める。右近思入あつて

これ、こなたも、父御致興どの、最期をば、定業でないと疑うてぢやの？ いや、隠すには及び

ませぬ。疑ふのは道理千萬！

ト更に膝を進めて、更に聲をひそめて

さうして、若し定業でないと定り、下手人が分つたら、父御の敵が討ちたいか？

ト小三郎は、俯向いたまゝ、身を顛はせつゝ、黙つて泣いてゐる。

おゝ、無念なは道理！ 其筈、其筈。で、其下手人に、大抵目星が附いてござるか？

トこれにて小三郎、尙ほ俯向いたまゝ、小聲にて

小三郎 只、あの、紀河の矩秀の振舞を、如何にも不審なと存じまするばかり。……

トいひさして、涙を拭ふ。

右近 はて、あの男なんぞは木偶も同然。どこにどんな木偶つかひが……

トいひさして、「あゝ、ついつつかり言つた」といふ思入あつて、口を嚙む。小三郎よろし

く思入。

右近は歎息して

あゝあ！ 一時は老公さまの御名代とまで時めき、懐ろ刀とも嚙され、世人に怖れられなされた、

あの、三郎次郎どの、嫡男と生れなされたそなたが、ほんにまア夢のやうな落ちぶれやう！ 父御の頓死にかへ加へて、思ひがけないお咎め、一族を擧り、残らずお處刑。たつた一人残つたそなただけが、不思議の幸運。老公さまの御寵愛受け、けふまでは人々にも羨まれてござつたが、こよ

ひのやうな御重體が続くとすると、以後は用心せにやなりますまいぞよ。

トしみ／＼と言ふ。此間も小三郎は、俯向いて泣いてゐたが、此時顔を舉げて

小三郎 と、おつしやるわけは？

右 近 (又あたりへこなしあつて) 卿は、父御三郎次郎どのは、なにゆゑお咎めをお受けなされたか、其仔細をお知りやつてござるか？

ト小三郎漸く涙を収めて

小三郎 くはしい事は存じませぬが、攝津の國の地頭代とかを承りました前後から、次第に私曲の振舞募り、お館を笠に被て、暴威を振ひ、下の者を虐げ、身分不相應の驕りに長じ、剩へ、長江、倉橋二ヶ庄の事について、後鳥羽の院さまの御寵姫龜菊とか申す白拍子をさん／＼に侮り辱め、それが原にて本院さまの御逆鱗甚だしく、遂に去る承久二年の、あの御大亂にも及びましたとやら。それやこれや重ね／＼の、公け私しの曲事が、お咎めの本のやうに承りをりまする。

ト語り了りて、又涙に暮れる。

右 近 いや／＼。まだ其外に謂れがある。

トこれにて小三郎きつと顔を舉げる。右近じつと其顔をながめて

こなたの心根がいぢらしい。打明けて話ませう。…其頃、京都の守護職であつた伊賀の左衛門の尉光季どの、また其弟御の式部の承光宗どのと卿の父御とは、久しい以前から、犬と猿との仲ら

ひ、随つて意趣意恨もかさね／＼。兄御蟲貞の、あの伊賀の御方方が、何かにつけて、老公さまへ、父御をば讒訴三昧。つまりは、御方方がお腰入れ前からの御功臣であるだけに、伊賀家一族の爲には、目の上の瘤。それに、先の奥方吳羽の前——わらはの伯母——の氣に入りてあつたといふのも彼の人達には——わらはも同様——不興の種。なればこそ、まだ何のお咎めもなかつたうちに、父御の、あの奇怪な死方は、たれが目にも非業の最期——毒殺——としか思はれぬ。のみならず、死後には、思ひがけぬ寢耳に水の御成敗。所領地悉く召し上げられ、妻子眷族までも嚴しいお刑罰。それさへあるに、其召し上げられた所領地を、そのまゝ残らず、伊賀家一族へ下されたといふも、不審の至り。

ト此間、小三郎よろしくこなし。次第に激昂する思入とろしく

小三郎 では、父致興の御勘氣は、あの伊賀の方御兄妹の…

トせき込んで問ひかける。

右 近 (上手を見て) あゝ、これ！…

ト此時、上手妻戸口より一條宰相の中將藤原の實雅(二十七八歳)立烏帽子、狩衣、先きに、四郎政村(十六歳)烏帽子、直垂、つゞき、小童蜂王(十三四歳)紙燭を持ち、案内して出る。

右近、小三郎はこれを見て席を退りて迎へる、右近うやく／＼しく手を突きて

これはく！もはや御退出でござりまするか？

ト蜂王は小三郎に向ひて

蜂王 小三郎どの、只今老公さまお目ざめにて、其許をお召しにござりまする。

小三郎 はッ。心得申した。……(ト人々に向ひ)御免下されませう。

ト小三郎は蜂王と共に會釋して、上手の妻戸口へ入る。最前の天目は、臺のまゝ、一隅に残してあること。

右近 (實雅に向つて)其後の御容體は、いかゞにいらせられましたか？

實雅 されば、お目ざめ後の御氣色いかゞにやと、ひそかにお案じ申してをつたが、一向に變はらせられた御模様もない。此上は、ひたすら、御疲勞の募らせられぬやう、心して御介抱めさるゝが肝要でござらうぞ。

政村 あの亘理の婆は、まだ御所から退つてはまゐらんか？

右近 はい。まだでござりますが、もうやがて罷り歸るでござりませう。嘸かし尼御臺さまにも、早速の御平癒を申し召しまして、御安心遊ばしたでござりませう。

實雅 安心と申せば、伊賀の御方にも、折から、お引き籠り中の事とて、御自身にてお見舞の出來ぬだけに、ひとしほお心づかひばしなされておはさうず。いざさらばすぐさま、お本第へ罷り越して、くはしい御模様をばお知らせ申すことゝいたさう。……政村どの、そのもとは？

29 政村 では、それがしも、兄上と御一しよに。

ト二人起ちかける。此時、右近下手を見て

右近 あゝ、もし！ちやうど、亘理どのが退つて見えられました。

ト下手より老女亘理(七十五歳)出る。齡には似ず嬰鏢としてゐる。

政村 おゝ、お婆！今噂をしてをつた處ぢや。尼御臺さまも、定めし御安堵遊ばしたであらうなう。

亘理は下手に着席して、よろしく會釋する。

亘理 はいく。殊の外のおよろこびにて、尙ほ此上とも油斷なう、折角御看護申し上げますやうとの御ン仰せつけにござりました。……つきましては、ちやうどお二方さまお集りの好い折柄——尼公さまの別してのお傳言をば、只今申し上げます。お聴き下されませう。……(ト聲をひそめて)尼公さま内々の御ン仰せに、執權夫婦の仲らひ、近來とかく睦じからぬやに聞き及ぶ。別第とはいへ、滑川たゞ一筋を隔てわづか一町あまりにも足らぬ處に住ひながら、二年ごし病痾に惱む夫を、此中は絶えて看護をだにせぬといふは事實歟？まことならば、けしからぬ事ぢや。さやうの事より、ともすれば、種々の流言の起る習ひ。汝立歸らば、榮子をはじめ實雅、政村へも篤と此旨を申し傳へて、かんまへて不祥の噂ども立てさせぬやうに心させい。承久の大亂このかた、天下は靜謐など、思はゞ、油斷大敵。血族の者内輪にて争ふときは、忽ち外々の侮りを招くといふ格言がある。

北條一家の安危存亡は、取りも直さず、日本全国の安危存亡ぢやといふことを忘るゝな、と此尼が言うたと一同へ申し聞かせい、との、くれんくの御、仰せ附けてござりました。

ト此間、實雅と右近とは、頭を垂れて、只黙然として聴いてゐる。政村は深く感じたる思入。

政村 おゝ！ おつしやりつけの趣き、きつと承つた。ちやうど今、兄上と御一しよに、母上の御、

許へ参らうと思つてゐた處ぢや。……兄上、では、直に参りませう。

實雅 (うなづきて) いかさま。さやういたさう。

ト二人席を起つ。

右近 では、お見送りを。

ト右近は直理へこなしあつて、共に起つ。

實雅 あゝ、それには及ばん。

右近 いえ、せめてお廊下先きまで。

ト二人附いて、四人ともに下手へ入る。暫く空舞臺。天目は尙ほ残されたまゝになつてゐる。

やがて、上手妻戸口より伊賀の式部の丞光宗(四十五六)、烏帽子、直垂、先きに、紀河の矩

秀、片手に硯箱を捧げ持ちて、うそくと従つて出る。

光宗 (四下を見て) むゝ！ だれも居らん。……ちやうど幸ひ。その、料紙、硯を。

ト席に着く。矩秀もよろしく上下へこなしあつて、座に着き、硯箱を光宗の傍らへさしおく。

光宗はすぐに硯箱を開きて、墨を磨りかけながら

矩秀、おのしはあの容體をどう思ふ？

矩秀 お脈體を伺ひませぬゆゑ、しかとしたことは申しあげかねますが、お顔色といひ、お息づ

かひといひ、所謂死相がもう既に現れてをります。逆も此末十五日とはお持ちこたへはむづかし

からうかと存じます。

光宗 (磨つてゐた墨の手元を一すといめて) 先きがさう見え透いてをるとすると、早急にやらね

ばならんかな。……(ト又墨を磨りかけて考へ) おれはこれから本第へ往つて……多分宰相も、も

う参つてをるであらうから——何かと打合せをしておく積りだが、おのしは此——今ちきに認める

から——一通を、急いで弟の朝行と光重へ届けてくれ、さうしてそれが濟み次第に……(トいひさ

して) とはいへ、もう何時だらうの？

矩秀 まだ亥の刻が、やつと廻つたぐらゐでござりませう。

光宗 では、それが濟み次第に、おのしも本第の奥方の居間へ来てくれ、まだいろく頼みたい事

があるから。

矩秀 委細承知仕りました。

ト光宗は筆を執りあげ、二三行書きかけて、又暫く考へ、半分獨り言のやうに、とぎれく

に

光宗 あの時めは……強ち恐るゝにも足らんが……いざとなつて、最も荷厄介なのは、あの尼なのだ。……ことに、手筈のまだ整はんうちに、あの婆さまに出しやばられたが最期、何もかも水の泡どころでなく、軽くツて流し物、重ければ、一同が命の種なし……といつて、荒療治をした日にやア、たとひ事は成つても、第一に、身内、外様、諸大名の思はく……。何にしろ、故二位の以來、源氏三代の動かぬ礎と、此何十年間、築きあげて来た——女に付き物の——あの不思議な人望と勢力とが怖ろしい！

ト半分は矩秀へ、半分は獨り言のやうに言ひ、時々筆を走らせ、書面を書いてゐる。此以前、小三郎、奥より戻り来り、すぐに妻戸を開け、つツと入らうとして、急に身を退り、そつと妻戸を閉め、たゞ細目に少し開け残して、内の様子を窺ふ。之より先き紀河の矩秀は、光宗の獨り言の中頃に、片隅に在る天目に目を附ける。さうして、最初は、何氣なくそれを手に取つて弄つてゐたが、とゞ偶と思ひ附いたといふ風に、膝を進めて、光宗に向ひ、小聲にて

矩秀 もし！もし！式部の丞さま。

光宗 (なほ筆を走らせながら) 何だ？

矩秀 もし！(ト天目を見せて) これをお用ひになりましたは、いかゞにござりませうな。

ト此時、下手より亘理の婆と右近とが連立つて戻り来り、これもすぐに内へ入りかけて、急

に身を退り、互ひにこなしあつて、壁代の蔭から、窺かに内の様子を窺ふ。光宗は、筆を止めて、天目を見て

光宗 といふのは？

ト矩秀よろしくこなしあつて、小聲で

矩秀 あの深見めをやりましたのと、同じ配劑が、一ち手輕さうに存ぜられますがなア。

ト光宗思入あつて

光宗 あの婆アさまをか？

矩秀 さやうで。

光宗 どうして飲ませる？

矩秀 やつぱりお茶に限りませうかな？

トあとは手眞似にて飲む眞似などいろく。三方、三人、同時に、さまさまの思入、こなし。

第三場 伊賀の方の居間

上手には、斜に上段の間。これは伊賀の方の寢所。其前一面に簾が垂れてある。正面奥、中央三間の間は壁代、其うしろには總板敷の、廣々とした入側。壁代の上下には柱、上手の柱から寢所までの間一間餘は壁、其壁際には二階厨子。それから少し下手へ離れて古風

なる鏡櫃。壁代の下手の柱から更に下手へ一間餘は壁、それから斜に折り曲げて、一間半程の間も壁。此壁に添うて三段に設置つたる白木の神棚。式の如く、新薦を敷き垂れ、最上段には白幣と明鏡とを安置し、供物、燈明など、いづれも式の如く、据ゑてある。よき處に、神酒の瓶子二箇、其一には紅色の紙を、其二には藤紫色の紙を、末廣に巻き立て椀の代りに挿してある。

神棚の下手の壁の見切柱からは、更に直角に下手へ折れて、一帶に蔀格子の下りたる次の間。其下手の突當り（見切）は妻戸。

こゝに、上手、上段の間の前に、伊賀の方（四十二三）、垂髪、小袿、假病にて引籠りたる體。假病ではあるが、仔細あつて、つい二三日前まで殆ど斷食ともいふべき難行をつゞけてゐたゆゑ、顔色憔悴して實の病人のやう。髪附などもみだりがはしうなつてゐる。其下手、やゝ奥へさがつて實雅、やゝ前寄りのよき處に政村住ひ、談話なかばの體。時刻は前の場のすぐ後、（午後十一時ごろ。）よき處に燈臺一脚。

34 政村 もう其通り、尼御臺のお耳にさへ入つた程でござりますゆゑ、母上と父上とのお仲たがひの事は、今はもう誰れ一人知らぬ者はござりませぬ。そのみならず其お仲たがひの原因は、當北條家の跡目相續の事について、父上と母上との御意見が合はぬゆゑぢやなぞと、下々まで、頻つて噂いたしをりますげな。それもこれも、所詮は、母上が父上と御別居なされて、こよひのやうな折にさ

へ、お見舞もなされませぬゆゑでござります。北條家の安危は、天下の安危ぢやと、おつしやりました尼御臺のお言葉もござりますゆゑ、明日は、どうぞ、曲げてお父上をお見舞なされて下されませ。

ト政村思ひ入つて言ふ。少し間を置いて

伊賀（しづかに）世上の取沙汰や尼御前の申さるゝことなぞを、さう氣にするには及びませぬ。尼御前も、昔は女將軍とまで唱はれた男優りでもあつたのぢやが、取る齡には勝たれぬと見えて、めつきりと目に立つ此二三年このかたの老惚れやう！ 畢竟、例の泰時が可愛さの依怙蟲風からのお世話焼きぢや。一々取上げるには及びませぬ。……政村、實は、今日までは言ひませなんだが、そなたも既う十六歳。——幸ひ、實雅どのも同席ゆゑ——こよひは、改めて、萬一の時の覺悟をば申し聞けておきます。よう聽いておきめされ。……尼御前の言葉までもなく、當北條家の盛衰が、取りも直さず、日本全國の治亂盛衰の基もあればこそ、わしが此二年ごしの心づくし。いかに、その噂の通り、わしは、あの泰時を跡目といふことが大の不承知でござるのぢや。……こゝをよう合點しておきや。……これが太平無事の世でもあらば、あの泰時のやうな、意地のない、似而非賢人に、家、國の大事を任せてもおかれようけれど、例の先年の、あの禁廷の御謀叛だけは、幸運と、難なく治まつても、兵馬の頭領たる肝腎の將軍家は、あの通りの木偶人同然。それを操る執權職の父御義時どのまでが、以前とは打つて變つたあの容體。さなきだに、武家にも、領家にも、野心を弓のやうに引き絞つて、隙もあらばと覗うてる者の多い折から、今若し再度の御謀叛でも起ら

うものなら、此鎌倉は直にも滅亡。ほんに、今こそは、當北條家の安危存亡の分れ目のござる。生中に、あの、世に後れ、智慧絶れのした尼御なぞの差出口がなく、又あの泰時の仁義立なぞがなくば、三上皇さまをさへ幽謫めまらせた當家の威勢を以て、天が下を一みじきに靡かすのも強ちむづかしいことではなけれど、心がよりは、父御が萬一の曉に、是非とも建直さにやならぬ其新館の造營の最中に、内輪同志の氣込が揃はず、剩へ、肝腎の大黒柱があゝの腰弱どのなぞであつたならば、どうして、四方内外から崩れかゝる大津浪のやうな、天下の動亂が防がれませうぞ？ 泰時なぞの眞似をして似而非仁義立をする時節ではない。父、兄に成り代つて、きつとした覺悟をせにやならぬ時のござるぞ。

トよろしく思入あつて言ふ。政村は始終うつむいたまゝ、じつと黙つて聽いてゐる。

實 雅

(政村へ思入あつて) まことに、母上の仰せらるゝ通り、今の世に人の頭たらんとする者は、先づ威が無うては叶ひませぬ。將は大を誅するを以て威となし、小を賞するを以て明となすとござる。されば一人を殺して三軍震るべくば之を殺し、一人を賞して萬人悦ぶべくば之を賞す。殺は大を貴び、賞は小を貴ぶの道理。彼の先年の大亂の砌りなども、老公が先蹤なき英斷を施しめされたればこそ、朞月ならずして天下靜謐。又、故源二位どのゝ如きも、常に、克く忍びがたきをば忍び克く斷ずべきをば斷ぜられたればこそ、威武忽ちに一天下に光被し、ともかくも前後三代に互る榮華をば閱せられた。即ち、公の霸業は、其人徳と機運とに因るとは申せ、かたはらまた、克く忍び、

克く斷ぜられたが爲でもござる。……政村どの、母上の只今のお言葉は、つまり、此道理をば仰せらるゝのであらう。人を殺すも、人を安んずるが爲ならば可なり、とは古人の金言。慈悲、仁義、温順は、いづれも有りがたき徳行ではござるが、時と場合とを辨へねば、却つて身を誤り家國をも誤る基もてござるぞ。

トわざと遠廻しに説諭する。政村は尙ほ俯向いたまゝ、黙つてゐる。

伊 賀

(政村へ思入あつて) 政村、あれを見やれ。(ト正面下手の神棚へこなしあつて) あれなる正八幡大菩薩は、鶴ヶ岡のを移したのぢや、と他人には言うてゐれど、實は故郷佐伯の郷の氏神。そなたの爲には、祖父上、伊賀の守朝光どのゝ信仰なされたをば縁起に、二年このかた此居間の裡に勸請しまゐらせて、日夜心願を籠むるには、深い理由のあること。……あの神前の瓶子の紙の、紅のは平、藤紫は藤原。いふまでもなく、我が家即ち佐伯氏の姓は藤原。此實雅どのも同じ姓。又、北條は平なれば、そなたは紅。其紅ると藤紫の、色濃かに、末長かれと、とりわけ、此十日あまり四日の間は我が身を責めて、精進潔齋、腥きを絶ち、穀類をも十が一に減じ、毎夜、人の寢しづまる夜半を俟つて、ひそかに庭井戸の水を浴び、一心不亂となつて祈つたところ、ほんに、信あれば驗ありとか、不思議や、きのふけふは、いづこともなく聲あつて、何くれとなう、未來の事共をば告げさせらるゝ。其中にも、もはや源氏の世は亡び果てたり、行く末は、ひとへに藤原と北條平の世の中なるぞ！、と紛ふ方もない、まざんゝとした神のお告げ！

トさながら今現に其聲を聞いてゞもゐるかのやうに、じつと目を瞑ぎ、ちよつと語を絶ちて暫く瞑想に耽るかとも見えた。が、やがて又目を開きて

伊賀 ……そなたの身の務めは、返すくも、重うござるぞ。父御の身には、いつ、どのやうなことがあらうも知れぬ。今から、覺悟してゐねばなりませんぞ。

トじつと思入あつて言ふ。

政村 御教訓は、一々よう會得いたしましたしてござります。かんまへて忘れぬやうにいたします。…(トいつたが、暫くもぢくして)しかしながら、母上さま、わたくしは、まだどうも、先刻聞いたことが氣にかゝつてなりません。御病氣のせいで、父上には、とりわけ此頃中は、何事につけても怖ろしうお憐みなされまするげな。父上に由ない御疑心を起させ、不快な思ひをおさせ申さぬ爲ばかりになりと、母上、どうぞ、明日は、お見舞ひなされて下されませ。

ト思ひ入つて言ふ。これにて伊賀の方漸くうなづき

伊賀 よし／＼。それほどにいやるならば、其中に見舞ひもしませう。氣づかふには及びませぬ。…

ト此時、九つ(十二時)を知らせる鐘の音が聞える。

しかし、いつの間にか、いかう夜が深けました。もう、あれは、九つでもあらう。そなたはもはや寢間へ往んで、お寝みなされ。

38 政村 では、お先さへ寝みまする。御機嫌よろしう!…兄上、御免下されませ。

ト政村會釋して、下手妻戸口より出て行く。

トすぐに正面の壁代を巻けて式部の丞光宗出る。伊賀の方見て

伊賀 おゝ、兄上か!

實雅 これは! (ト席を譲りて) いつの間に?

光宗 とうに参つたが、話なかばの體ゆるゑ、わざと差控へてをつた。(ト席に着きて) 老公の容體は、思つたよりもわるうござるぞ。矩秀は、此末、長うて十五日とは持つまいやうに申してをる。いづれ、あの行運坊からも、委曲の容體を京都の泰時方へ申し遣すでもあらうから、多分、夜を日に繼ぎ、晩くも十數日以内には、彼仁立歸り参るに相違ない。さすれば、たどちに跡目相續の披露沙汰ともなるであらう。此上は、もはや便々としてはをられませんぞ。

實雅 して、御邊の御分別は?

光宗 されば。…昨夜も申した通り、京都表は、亡兄光季の縁故によつて、既に十二分の手配りが致しあれば、たとひ泰時にどのやうな不慮の準備がござつたとした處で、前後内外からの挾撃によつて、難なく取控ぐ所存でござるが、さしあたつて一つの難儀は、あの尼御前。眞先に、しやにむに兵力を以て幽閉めるといふ荒療治が上策歟? 或は例の天目へ抹茶と何との等分の調合役を、あの矩秀めへ再び申し附けたものであらうか? そこはまだ、いづれとも、決しかねてをる。

トこのうち實雅思入あつて

實雅 いや。毒薬をお用ひの儀は御無用になされ。大義には親をも滅するの喻へなれば——つい只今も、あの政村どのへ、それにつき、何かと意見を申し試みたこととござるが——すなはち家國の爲に、撥亂反正を望むときには、随分共に思ひ切つたる殘忍をも餘儀なく忍ばねばならぬ習ひではござれども、苟も利世濟民を口に唱へて、天下の主たらんと志す程の者は、たとひ誤つて殘忍不仁の悪名をば蒙るとも、卑怯臆病の誹りを受けて、人君たるの徳をきずつけ、下萬民をして歸服に迷はしめるやうなことを致しては相成らん。民をして懼れ憚らしむるとも、憎み、危み、又は賤蔑しむるやうなことを致してはなりません。即ち、時機と手段とは、毎に心して擇ばねば相成らん。毒害に至つては、所詮世を恐れ人を憚る所謂賊子奸臣らの隱慝。卑怯な、淺ましい所爲とござる。その儀はかまへて御無用になされ。

トきつぱりといふ。伊賀の方思入あつて、靜かに

伊賀 實雅どの、其見識も道理ぢやが、それよりも、すべて、事は、見事に手際ようとこそ心掛けが第一とござる。手際さへ見事なれば、五逆罪とても、現世では強ち罪とはなりません。氣味のよい程に大膽な、目覺ましい悪人は、却つて世の人に崇められます。……兄上、鳥さへも起つ跡は濁さぬ譬へ。後へ累ひを遺す様な小細工は不手際。あの深見一條以來、ちと内證事に立入らせ過ぎたあの粗忽者の矩秀を、又ぞろ斯うした一大事に使ふのは考へ物。……(トいひさして)それはさうと兄上、夫義時の餘命、もう十五日限りとは、あの矩秀の按檢ばかりではなく、行運坊もまた、

しかとさやう申しましたか?

光宗 いや、行運坊の按檢は、例の如く、只重體とばかり。卒倒氣絶は間々あることゆゑ、それは強ち懸念に及ばぬといひ、別段日限などは申さなんだ。

伊賀 (うなづきつゝ) さもござりませう(ト靜かに言つて) 脊に此知らせを聞きました折、例の一心の祈念によつて、夫の此容體の變動はさしたる事でないと察してゐました。兄上、若し其十五日を過ぎて、夫がなほ存命であつて、あくまで頑なに、泰時を跡目と言ひ張つたならば、何となざるゝ? 病みほうけてゐる父を、恩義はあつても何の科もない舅を、政村なり、實雅どのなりが、理不盡に幽閉めては、何ぼう家國の爲とはいへ、順逆の道理が立ちますまいがな? 尼御前よりも此始末をばいかゞなさるゝ? あの矩秀なんぞの淺はかな按檢が、何の當になりませうぞ?

ト冷かに言ふ。二人ぐつと詰まる。

光宗 いかさま! こりや聊か不覺であつたわい。只管事を擧ぐる手配りにのみ心を奪はれ、既に先刻矩秀に申しつけて、弟どもへ密意を傳へさせ、すなはち、一昨夜の打合せの如く、豫て墨打だけは致しおいたるあの三浦の義村に、いよく一味の臍を固めさせる魂膽までも講せさせ申したが、例の氣短か、先き走り過ぎて、つい其肝腎の事には思ひ及ばなんだ。……(ト一寸眉を擧めたが) なれども、事こゝに及んでは、もはや順逆などを論じてをる所でない。臨終を俟つにも及ばん。速かに事を擧げうぞ。

伊賀 いや、暫く。(トしづかに止めて)あながち然う急かすとも事てござる。夫が直にも落命せばいざ知らず、尙ほ存命である限りは、成るべく事を穩便に取計らふのが此方の得。やつぱり、此間中の申し合せの通り、も一度わらはから、改めて屹度談じて、天下晴れた譲り状を政村へ宛て、此夫に書かすのが最上策。尼御前を幽閉めたり、泰時の下向を妨げたりする事は、其上での手筈なり、軍略なりでござりませうぞ。

トこれにて實雅思入あつて

實雅 母上の其御案は、至極妙策とは存ずれども、既に先頃の御對面さへも、空しくお言葉争ひに終つたとやうに承る。こよひの御變動あつて後の御容體では、ますく老公のお心は僻みませう。随つて、御疑念もますく深く、迎も其お談しは纏りますまい。

伊賀 いや、なう、先日は、夫の心を引いて見るため、わざとあの泰時をば譏り、また、前將軍家時代からの内證事のいろく、——あの深見とわらはとの外には、知る者のない密事——をば言ひ立て、わざと手強う正面からばかり談じて見たのでござつたが……今思へば、柔よく剛を制すの譬へ、涙こそは女の第一の武器であつたを、下手に出なんだのはわらはの誤り。……が、それはまアともかくも。……其折の夫の様子やら、口吻やらから、ふつと思ひ附いたことがあつて、此頃中の勤行で瘦せ衰へてゐるのを幸ひ、其身支度のための此假病。

ト靜かに意味ありげに言ふ。

光宗 ふむ！……われらはまた、言ひ争ひをした不機嫌ゆゑの、假病とばかり存じてをつたが。……して、其思ひ附といふは？

伊賀 (冷靜に)此二三日このかた、しきりに子供らの歌ひあるく奇怪な謠がござりますが、お二人は御存じか？

光宗 さういへば、「何とやらして物の怪」とか、……

實雅 「たんだ一字ちがうた」とか、……

光宗 歌ひあるくのをば、いかさま、聞いたことがある。

伊賀 「方も方、時も時、……まさとまさ、まさとまさ、……まさく」と物の怪、……たんだ一字ちがうた」といふあの謠の心を、こなたは何とお讀みなされましたぞ？

光宗 いや、一向に心附かん。

ト伊賀の方少し容を改めて、心しづかに、おちついて

伊賀 先日、政村へ跡目譲りの事を、立入つて夫に談ずるうち、例の深見の事に及び、やがて其因みであの牧の方母子、其婿右衛門、佐朝雅、稻毛の入道、畠山父子などを、又、それよりも先きに、二代將軍頼家どの、比企、仁田の一族などを、うまく計略を以て陥し入れられたのを手はじめに、あはよく和田の一族をも亡し又前將軍家右大臣どのをも、あの公曉どのをも、同じ手て、上手にかたづけてしまはれた其内證事の一々を、わざと數へ立て、見たところ、面の色が次第に變つて、如

何にも堪へがたさうな苦悶の様子。なれども、それは、事の露顯を怖るゝよりも、ある不思議な心の鬼に責められてをらるゝ苦みと、見て取つてのわらはの案じ。……それゆゑ、一昨日、内々にて、既に取寄せておいたものがござる。

ト徐かに席を起ちて

もし！ 此方へ。

ト燈臺を携へて、先に立ち、正面の壁代を上手へ裏げ排けて、廣い入側とも見るべき總板敷の次の間へ出る。光宗と實雅とは不審げの思入あつて従いて行く。

此板敷の向うには一間の妻戸があつて、其上下には蔀格子、尙其蔀格子の外には式の如き簀の濡縁があつて、一面に欄干を取付け、又妻戸の直前には三段の階子があつて其處から庭へ下りるやうになつてゐる。板敷へ出ると、伊賀の方は、燈臺をよき處に据ゑておいて、膝まづき、光宗と實雅とを見返り

伊賀 上手に秘し隠してをられたゆゑ、わらはさへ、はじめの程は、一向心付きませなんだが、夫が、生れ附いて忌み嫌ふ此一品、……其一品を種に。

トいひつゝ、板敷の一部の板を舉げ、床下から一箇の瓶を取り出し、板敷の上へあげ其蓋を取る。

ト光宗は、すぐに瓶の中を覗いて見て

45 光宗 これは！

ト此途端、實雅聞耳を立て、

實雅 暫く。……何か、床下にて怪しげな物音がいたす！

光宗 なに、床下で？

ト實雅は急に燈臺を引寄せて床下を覗く。同時に光宗は正面の妻戸を開く。これにて庭の一部が見渡される。けれども七日の月は既に疾うに落ちてしまつた後ゆゑ、向うは只植込が黒ずんで見えるばかりである。

ト光宗は、きつと庭上を透しながらめて、何物を見附けたらしく

光宗 曲者ツ！

ト聲大きく叫ぶと共に、忽ち階子を躍り下りて、姿を消す。其曲者を追つかけたのらしい。實雅は妻戸口から庭の方へと燈臺をさし出した。伊賀の方は、これより先、瓶の蓋を元の通りにして、起ち上り、實雅の後ろに立ちて庭の方を見やる。二人とも暫くは後ろ向のまゝで、同じ姿勢を保つてゐる。

幕

第一場 北條家別第の奥庭

小山の裾を天然の委のまゝに取入れて、わざとらしくからぬやうに設置つたる奥庭の一部分で、正面は一段小高くなつてをり、さうして其やゝ下手には、二度ほどなだらかに折れ曲つた緩勾配坂がある。上手にも下手にも、前の方には、小山のだらしない裾が流れ出したやうに出つ張つてをって、そこには大小雑多の立木。それから又、すつと上手寄の松や杉の立木の間には、其奥の谷間への降り口、これも餘り急な勾配にはなつてをらぬらしい、すべて其邊には、雑草にまじる萩、すゝき、その他の秋草。それより下手へかけての一帶は、すぐに深い、廣い凹地に臨んであるのらしく、向うに松杉の繁茂した山々が間近く見え、更に間近には同じく松其他の木の梢だけが見える。

上手の、谷間への降り口の傍には、枝振の面白い大きな松が一本、其根元に茅葺の四阿風の休息所。其あたり一面に、野生の萩や秋草が、今を盛りと咲き亂れてゐる。

前の幕の四日後で、陰曆八月十一日である。時刻は今の午後二時過。やゝ薄曇りの空模様。老女亘理が指圖をして、侍女甲、乙、丙、めい／＼箒を持ち、四阿の界限を掃除してゐる。甲と乙とは今丁度上手の降り口から掃除しつゝ上つて来るところである。

46 亘理 (杖であちこちの叢を叩き廻りながら) やれ／＼！ やれ／＼！ これでもうようござらう。……お大儀お大儀！ これほど念入に掃除しておいたなら、よもや出をることではあるまい。

47

あゝあ！ かしながら、御病氣の故とはいへ、何かとまあ、お嫌ひなさるものが殖えたことぢや。……(ト甲、乙に向ひて) そつちの方は、もう大事ござらぬかな？

侍女甲 はい。もう大丈夫でござります。

侍女乙 たつた一疋、ほんの蚯蚓ツ子のやうなのをりましたが、すぐに彼方の谷の方へ追ひおとしてしまひました。

亘理 だれも長蟲を好く者はないとはいへ、どうしてまあ、昨日けふのやうに、お厭がりなされることやら？ (トつぶやきながら、下手へこなしあつて) もう程なくお越してもあらう。さ、ぬしたちは、揃うてお迎ひに往つてござれ。

三人 はい／＼。かしこまりました。

ト侍女甲、乙、丙は揃つて下手へ入る。亘理は草臥れたといふこなしあつて、四阿の縁端に腰をかける此時、上手の降り口から、加持の藤内と砂王とが登つて来る。藤内は箒を提げて先に立ち、砂王は朱塗りの曲象を脊負つて上つて来る。

亘理 (見て) おゝお！ 藤内どの！ お大儀でござつたなう。又さふらふ、例の、俄のお思ひ立て、さつきふなお庭のお掃除やら、お堂のお掃除やら。さぞ骨が折れましたらうなう。

期最の時義 藤内 何の、何の！……(とつぶやきつゝ、砂王と共に四阿の下手へ廻つて) めつきりとお心よいやうには承つてをりましたが、それにしても、お堂でお座禪をなさるほどの、もうそんなお元氣で

ござりますか？

亘理 いや／＼。お心よいとはいへ、まだ／＼お重體でもあり、つい此間、あゝした御變事のあつた間際でもあり、とりわけ昨日けふは、御典藥の他行中でもあれば、萬一の時、取り返しが付かぬゆゑ一同が強つてお止め申したれど、先だつて行蓮どのが、座禪不調とやらがお煩ひの原ぢやと申されたとかで、此頃のお氣むづかしさ、一旦斯うとお言ひ出しなされては、いつかなお聽入れなさらばこそ、けふは今から夕かたまで、あの谷のお堂内で、お座禪を遊ばす筈。

藤内 はれやれ！ 先度にも懲りさつしやらず。……とにかく、けふは、たんとお歩かせ申してはなりません。そんな事かとも存じましたゆゑ、お堂の曲象を持つて參じました。あれへお乗せ申して、お堂まで、みんなて昇いで行くことにいたしましたせう。(トいひつゝ砂玉の持つて來た曲象を見返り) はい！ つい、お齒を持つて來るのを忘れた。……砂玉どん、もう一度お堂へ往つて、あれを取つて來て下され。

トこれにて砂玉うなづきつゝ、すぐに上手の降り口から降りて行く。亘理は此間何か思ひ出して、ひそかに泣いてゐたが、とう／＼こらへかれたらしく

亘理 なう、藤内どの！ あゝあゝ！ 長命はすまじいものでござる。老公さまの御容體、此頃の内外の御模様、世上の有様、何やかを見るにつけて、思ひ出さるゝは、三十もう九年のむかし。驕る平家はその西海の波濤に沈んで、前の右大將さま御武運めでたく、六十餘州なびかぬ隈もなく、此

鎌倉表に御座所をお定め折のめざましき！ 譬へば、大あらしの其後で——散り残つた斑々雲なんぞは何のその——大空一ぱいに檜扇のやうに金色の後光をおツびろげて、あの和ぎわたる海づらに、ぐん／＼と昇らつしやる大日輪さまのやうなとはあのこと！ 夫平六兵衛どのは、其頃まだお血氣盛りの、若殿小四郎さま、今の老公さまのお傳役。其縁につながる冥利で、伊豆の片田舎から、此鎌倉のお館へ、一足飛びの御奉公。それからはとん／＼拍子。月毎に、年毎に、びつくりしつゝけの御當家の御繁榮。まア、どこまで伸びて行く御威勢やらと、喜んだのはむかし！ 花の眞盛りは、どうやら既う見てしまつたやうに思はれて、あゝあゝ！ 此浮世があぢきなうござる。

ト泣く。藤内もこれを聞き、萎れてゐたが、同感して

藤内 あゝあゝ！ 御道理なお述べござります。今のお言葉を聞くうちに、わしが眼にも遠い昔の有様が、まざ／＼と湧いて出ますわい！ 石橋山の御初陣には、わしも三つ鱗のお旗下に加はつて、お侶に立ち、又壇の浦の合戦では、ともかくも手柄の眞似こと、はじめて大殿さまのお言葉を聞いた時の其うれしさ……あゝ！ 二十臺のあの時分てさへ、その親御さま優り、萬人優り、智慧者よ、勇者よ、どこまで膽ツ玉が太いか、底の知れぬ軍師よ、と評判のお館さまが、御老病の故とはいへ、つい此間、半年ぶりでお見上げ申した其お後ろ姿のみすばらしき！ いや、お姿ばかりぢやない。承れば、夜は時々、女子供のやうに、おびえたり、うなされたりさつしやるとやら。又、物もあらうに、蛇なんぞを怖がらつしやるとは、あゝ、それほどまでに衰へさつしやつたか？

(トいひつゝ、鼻汁をすゝつてゐたが、やがて)こりやいよ／＼只事ぢやアない。(ト獨り言のやうにいつて)あゝそれにつけても氣にかゝるは……(ト一寸四下へこなしあつて、聲をひそめて)わしは、此お第の内て遠からぬうちに、何事か起りさうに思はれてなりませぬ……

亘理 え?

藤内 めんようなは、あのお本第で、此間ぢう、三晩も續けて、何やら夜ふかしの御密談……

亘理 といふのは(ト覺えず乗り出して)あの奥方のお居間に於て?

藤内 はい。光宗さまと宰相さまと、いつも定つてお三方……

亘理 (すつと聲をひそめて)何ぞ聞き出したこともござるか?

藤内 さア、御變動のござりました、あの夜さりの子の刻過ぎ、どうも氣にかゝつて眠られぬゆゑ、お裏門から、ついふら／＼、橋を渡つてお庭つゞきを、行くともなしにお本第の、あの奥庭の枝折戸口、見ると、掛金が脱してある。けふだな、と思ひながら、つい我知らず、二足ほど踏込む途端に奥方のお居間の方で、「曲者ツ！」と呼ばつたけたまふ一瞥! 疵持つ足! うぬが事かとおツたまげて逃出さうとする其脊骨へ、昏闇を駆けて来て、ぶツつかつた一人の曲者! はツとけしとんで此方は平伏る。そいつめは、てつきり此お別第へ、走り込んだに相違ないのが、又一つの不審……

トいひかける途端に、砂王、手に唐錦の大きな茵を捧げながら、上手の降り口から駈け上りつゝ、下手を見やつて

砂王 あゝ／＼! もう老公さまがお越してござりますぞ!

ト呼ぶ。これにて二人は話を止め、起ち上り、出迎への準備をする。藤内は砂王の持つて来た茵を曲糸へ敷く。

此時。下手より右京の權の太夫義時(六十二歳)、長わづらひの上、つい四日以前の一變動のため、又一しほ衰弱したる體にて、半月ほど前に剃つたまふらしい坊主頭の髪の胡摩鹽も鹽の方がすつと多く、髭は殊に白く、共にぢゝ汚く延びたまふの蒼白な顔色。長直垂の上に五條の袈裟を掛けて、右手には杖を携へ、左は小三郎の肩にかゝり、右からは老女右近に腰を支へさせ、一足引きのやうにして、徐かに出て来る。つゞいて小童蜂王、義時が戒刀を捧げて附添ひ、侍女の甲は藥湯を盛つたる天目を臺に載せて持ち、同じく乙、丙もその後に従ふ。

下手のだら／＼坂近く來ると、義時は息切れがしたらしく、術なげに

まで! まで／＼!

ト喘ぎながら言ふ。

義時

小三郎 はツ。

義時

トこれにて一同歩みを止める。
ちよつと休むー ちよつと！

ト尙ほ喘いでゐる。

右近

はい／＼、かしこまりましたござりまする。

ト此時、坂の少し上手に膝まづいて迎へてゐた亘理は、藤内を見返り

亘理

藤内どの、あのお曲衆。

藤内

はい／＼。心得ました。

ト藤内は急ぎだら／＼坂を登つて、四阿の前の曲衆を持つて来て小三郎に渡す。小三郎これを坂下のよき處へ据ゑる。右近、亘理ら介抱して義時をそれへ掛けさせる。

ト義時は、尙ほ幾らか喘ぎながら、あちこちを見渡しつゝ、やがて心地よげに

義時

閉ぢ籠つてばかりゐては、むすぼうれてならぬ心も、斯う蒼う廣々とした空の姿、涯もなう

見渡さるゝ山々谷々の景色をば詠むると、さながら洗ひ去られたやうに心地よい！…あゝ！…まことに、音塵寂爾たり、消息宛然たり。一味蕭條として趣向すべきなし。…あゝ！…つい先刻ま

ては、水の涸れ盡きかけた泥池の水際で、喘いでゐる鮒か鯉かなぞのやうな氣持であつたが、此けしきを見、此松風の音を聞くと、大湖へても出たやうに、暢び暢びするわい！ は／＼／＼！

ト淋しく、併しながら心地よげに笑ふ。

亘理

久かたぶりのお歩行ゆゑ、いかゞにやと、一同お案じ申してをりましたが、一向にお疲れも見えさせられませぬ其御容體。その御様子ならば、程なく御本復遊ばすことゝ、ほんに／＼、お嬉しう存じ上げまする。

義時

(機嫌よげにうなづきつゝ) 時が来て、病魔が漸く離るゝ歟、或は行蓮の調劑が不思議の効

をば見する歟、きのふをとゝひの二夜さは、此二年ごし曾て覺えぬ快眠！ ぐつすり和我れを忘れ、夢も安らかに、全く生き返り、生れ變つたるやうな心持ちや。壯年血氣の昔より、幾たびと知らず、

生死の間を出入し、備に艱難辛苦を嘗め、功名手柄の悦び、計略の合期した氣味よき、或は富貴、榮華の歡樂、皆ほど／＼には得い遂げても來たが、未だ曾て此病來の、眠られぬ苦しさに優る辛さ

は知らず、又きのふけふの此心地よさに優る嬉しさは覺えなんだ。あゝ！ 時あつて三日食はず、破れ薦に互寒を忍ぶ、穴の中、橋の下、あのおさましい乞食非人さへも、しば／＼連夜の熟眠を

ば貪るといふに、一月の中只一夜も、二時と續けては、うなされぬ夢をば結び得ぬ其苦しさ！…トいふ間にも、いかにもまへがたげな苦悶の色が面上に浮ぶ。さうして其不快な追懐に心を奪はれたかのやうに、暫く言葉を斷絶れさせたが、やがて又我れに返つて

あゝしかしながら、けふばかりは、それをば拭ひ去つたやうな心地よさぢや！…天外の青山も其色寡く、耳畔の鳴泉も其聲空し、とは、斯うした氣持でもあらうかい？ は／＼／＼！

ト又淋しく笑ふ。此間、藤内は、下手に膝まづいて、頻りに落涙を拭つてゐる。義時はきつ

とそれに目を付け、不興げに眉を擧めて
やい、藤内！ なぜ泣く？……きさまはなぜ泣くのだ？

トこれにて藤内は涙を収め、じつと義時の顔を見上げて

藤内 お殿さま！ ちやうど半年お見上げ申さなんだうちに、思つたよりは、いかうお褒れなされましたなア！ あの、豊後の國のお野立ては、敵方の夜討の怖ろしさに、其一晩だけは、只の一人だつて寝た者はござりませなんだに、こなたさまばかりは高いびき！ 又、あの和田合戦の晩だつても、若殿さまをはじめ、まんじりともさつしやらなんださうなに、たつた一人平氣で眠つてござつたとかいふお前さまが、長のお煩ひの故とはいへ、只今のお言葉！ あゝあ！ いかくお弱りなされましたなア！ 此の上は御養生が專一でござります。……なアもし！ そのお體で、お座禪なんぞは、とんでもないこととござります。慮外ながら、まアま、お見合せなされたがようござりませうぞ。

ト苦々しげに言ふ。此間に義時の機嫌よげな表情はだん／＼消え、中ごろ憤々としたらしかつたが、さすがにじつとそれを制へて、わざと冷かに

義時 むやくしい事を申す奴だ！ ずつと快いから出て來たのだ。行運といふ醫師が附いてをるわ！……たはけめ！

ト此「たはけめ！」は、半分口の内と言つた積りであつたらしいが、大分手強く言ひ放つた

ので、耳の近くない藤内にも徹へたらしく、少々むつとしたといふ思入で

藤内 もし、殿さま！……成る程、手前は痴人でもござりませう。が、手前は大痴人でも済みまする。日本六十餘州の總元締めをさつしやりますお方は、何かの手ぬかりや間ちがひがあつた時分には、只「たはけ！」では済みますまいぞよ。つい此間も、あんなお間ちがひ！ 生身の、しかも煩うてござるお體であるからには、いつ、どんな事があるかも知れたもんぢやござりませんのに、それなのに……

トいひかける。義時はこらへかれて、しかし静かに

義時 何だと？ ては、きさまは主の身に、何か不祥な事が起るのを望むか？

藤内 何の、お前さま、とんでもない！ 望みなんかはいたしません。けれども、うつかり輕はづみな事をなされて、何事か起つたら、どうなされます？

義時 (冷笑して) 起つたら起つた時だ。

藤内 いや、事が起つてしまつてからでは……

ト藤内は段々興奮して來る。右近と顔を見合せてゐた亘理が口を挿む。

亘理 あ、これ、藤内どの！

藤内 いや、起つてからでは、何にもなりません。何事もないうちの御用心が肝腎でござります。もし！ 何よりも先きに……

亘理 藤内どの！
藤内 お家の跡目を、ちゃんと定めて置かせられませ。さうでないといと……
右近 藤内どの！

ト大きく呼ぶ。これにて藤内口を嚙む。此間義時は、だん／＼剃が高ぶつたらしく、全身を神経的に顫はせてゐたが、やつとそれを制して、せゝら笑つて

義時 きさまらの指圖を俵つおれか！……たはけめ！

ト口だけは冷かに言つたが、顔も身もふる／＼と顫へてゐる。けれど飽迄も平氣を装つて、正面を切つてゐる。

ト藤内は、じつと義時の様子を見つめて、情けなげな愁ひ聲で

藤内 成る程、天下の智慧者と敵方にさへ褒められなされたこなたさままでござります。手前なぞが、かれこれ申すものはござりますまい。なれども、あれほど安心して、御自分の手足のやうに思つて、お使ひなされた、あの、深見の三郎次郎どのでさへ、だん／＼と増長して、ついあゝした不心得を……

ト言ひかけたが、ふつと小三郎のゐるのに氣が付いて、口ごもり

いや、なに、あゝした仁は格別としても、結句、あんまり御自身の智慧袋ばかりを恃みにさつしやらん方がようござりませうぞよ。とにかく……

57 亘理 藤内どの／＼！

藤内 とにかく、お體をも、お家をも、折角お厭ひなされたが、ようござります。

亘理 これさ、藤内どの！

トきつと言ふ。これにて藤内一寸亘理を見返り

藤内 いや／＼、かういふ時にでも申し上げんけれど、お目にかゝる折がござりません。……もし、

殿さま！……

ト又何か言ひかける。義時は、それにかまはず、つと曲象から起たうとしてよろめく。右近、

小三郎あわてゝ抱きとめ

右近 あゝ、もし！ おあぶなうござります。

義時 大分寛いだ。……座、々、座禪堂へ。

ト歩み出さうとする。亘理それを止めて

亘理 あゝ、もし！ お歩行では、ちと御無理でござりませう。まゝ、そのまゝでいらせられませ。わたくしども一同で、そのお曲象もろとも、お昇き上げ申しませう。そのまゝお膝を組ませられませ。……これ、小三郎どの、こなたは、お前へ廻つて、後ろ手でお曲象を、……藤内どの、こなたはお背後から、女中がたは、それ、右と左りを。

トこれにて義時は、曲象の上で胡座をかく。小三郎は前から後ろ向きに、藤内は背から、砂

王をはじめ侍女、甲、乙、丙は左右よりそれを助けて昇き上げる。戒刀持の蜂王は其後に附添ふ。一同だら／＼坂を登りて四阿の前を過ぎ、降り口へ向ふ。右近、亘理も従いて坂を登り

亘理 ようござるかの？…しづかに／＼！

右近 すぐ後から参じまする。

亘理 御機嫌よろしう！

ト會釋する。一同降り口を降りて行く。ト亘理は右近を四阿へ請じつゝ

亘理 それでもまア、案じたよりは、お元氣なので、やつと安堵致しました。それはさうと、(ト聲をひそめて) 昨夜は折わるう人目に妨げられ、承りかけて、つい其まゝになつたあのお話、氣にかゝつてなりません。幸ひに人もなし。あの後をおつしやつて下され。

右近 いづれ、あの小三郎どのからも、直接に御密訴申さるゝでもござりませうが、今日となつては、もはや猶豫のならぬ鼻の先きの一大事。實は、あの變動のあつた晩、お互ひに瞥と見たあの二人の怪しい素振。なれども、言葉が確とは聞えませなんだゆゑに、證據がなく、氣が／＼りながらお互ひに、言はず語らず。然るところ、一昨夜、夜ふけて後、小三郎がひそかに参り、駭き入つたる密告。(ト四下へこなしあつて) もし！ その仔細は…

ト亘理の耳に口。暫くさゝやく。

59 亘理 (驚いて) えゝ！ ではあの夜さり、小三郎どのが、あのお床下に忍び込んで…

右近 あ、もし！ 間違なので、ようは聞えなんだれども…

と又耳こすり

亘理 すりや、あの、やつぱり…毒藥を…

トいひかけるのを右近は手で制して、又暫く耳こすり。亘理はうなづきつゝ聽き了り

亘理 まア、おそろしい！…此上は一刻も猶豫はならん。何よりも先に、京都にござる武藏守さまへ、早飛脚を以て、此事をお知らせにやなるまい。いや／＼、先づそれよりも先に、尼公さまへ此事をば…さうぢや。…それは、わしが此足で、これから直に。…したが、後の事も、あの小三郎どのばかりでは心元ない。藤内どの、律義が祟つて、大分御機嫌を損じた折から、あんまり驚かし申してはなりません。そこはこなたからよい鹽梅に。かういふうちも心が／＼り。ともかくも、まア、早うお傍へ往つてゐて下され。

右近 はい／＼。合點でござります。

ト右近は急ぎ上手の降り口から降りて行く。

亘理 あゝ、心が急ぐ！ 泰時さまへの早飛脚は誰れに吩咐けたものであらうか？…いや／＼、それもこれも、尼公さまへ申し上げた上での指圖。…さうぢや。

ト身づくろひして、杖を忘れ、だら／＼坂を走りおりようとして心付き、取つて返し杖を取

り、再び駆けおりようとする。此途端、上手の降り口より藤内をはじめ、侍女甲、乙、丙及び蜂王、砂王（小三郎だけを除き）皆々戻つて来る。

藤内 あ、もし〜！ 亘理どの〜！

ト呼ぶ。

亘理 お〜！ もうお行がはじまりましたかいかいの？

藤内 いえ、まだでござりますが、お召になるまでは、小三郎どの、外は、退つてをれといふお吩咐でござりました。

亘理 さやうか？ では、こゝで休息めされ。お大儀でござつた。わしはちつと急ぎの御用が出来たによつて……

トいひさして、そのまゝ行かうとする。此時藤内は下手を見て

藤内 お〜、おめづらしいことだ！ あれへ奥方さまがお越しでござりますぞ。

ト亘理も下手を見て

亘理 お〜、成る程。……でもま、折のわるい！

ト口の中で言つて、餘儀なげに立ちどまる。

藤内 （下手を見やりながら）まだお氣色がわるいかして、成る程、お顔色もめつきりとわるく、お寝なされて、お運びも甚うお大儀さうだ。

トつぶやきつゝ、皆と共に、だら〜坂を降りて、出迎への心がまへをする。

ト下手より奥方伊賀の方、下げ髪、小袿、被衣をかぶり、病後の體よろしく、二人の侍女、小柴（二五六）田毎（七七八）に左右から介抱をさせ、尙ほ一人の女の童に錦の茵を持たせて、伴れて、徐かに出て来る。

亘理 （うや〜しく會釋して）これは〜！ まだ御不加減のやうにも承りをりましたに、癒らせられましたか、思ひがけないお渡り。お祝ひ申し上げます。……さ、まづ〜、あれへお越し遊ばされませ。

ト亘理は又先に立ちて坂を登りて、四阿へ伊賀の方を請する。藤内と甲、乙、丙の三侍女及び蜂王、砂王は坂下に残り、他はすべて四阿に集ふ。

伊賀 （四阿の前に立ちどまりて、静かに、おほやうに）館にも、けふは別してお心よいとあつて、久しぶりに御修禪ぢやと聞いたゆゑに、見舞かた〜、氣保養に來ましたが、館には、もはや御上堂なされたかいかいの？

亘理 はい。今暫くは、お人拂ひといふお吩咐でござりまする。

伊賀 お〜、それは！……では、暫くの間、この四阿で待ちませうか？……
トこれにて侍女、女の童心得て、四阿の縁に持參の茵を敷く。伊賀の方はそれに腰をおろしながら

亙理には、其後は久しう逢はなんだが、いつも健勝で、めでたいなう。

亙理 おかたじけなうござります。お庇をもちまして。

伊賀 幾歳になりやつたかなう？

亙理 七十五歳にござります。

伊賀 夫の平六兵衛が存命ぢやと、ことしは幾つであつたかなう？

亙理 ちやうど八十……四歳になりませう歟？……

ト答へつゝも、氣のせく思入よろしくあつて

さて、えゝ、まことに、甚だお慮外ではござりますが……

トいひかける。伊賀の方は、其以前から、とうに亙理のそばへした様子に目を附けてゐたが、わざと氣の附かぬげに、悠長に

伊賀 それも其管敷！あの平六兵衛は、夫義時どのの附人、……まだ江間の小四郎でござつた頃からの無二の腹心、かたへ離すの郎黨。十年一日のやうなといふ古語はあるが、これは五十何年間、ふつに變らぬ奉公振！……

トいひつゞける。亙理はいよゝゝ氣の揉める思入よろしくあつて

62 亙理 えゝ、まことにお慮外ではござりますが、わたくしは、あの、いさゝか、取急ぎまする御用向がござりますゆゑ……

ト又いひかける。これより先、伊賀の方の足元から、二尺あまりの一疋の蛇が這ひ出し、やがて土手から低い地面の方へ、するゝと滑りおり、だんゝ下手へと這つて行き、丁度此時、甲、乙、丙、三侍女の足元へ近づく。

甲 (はじめて氣附いて) あれい！

トけたゝましく叫んで飛び退く。乙、丙も同時に

乙、丙 あれい！

ト叫んで逃げる。砂王、蜂王も

蜂砂 王王 あゝ、蛇だゝ！

ト騒ぐ。皆々驚く。藤内は持つてゐる箒で蛇を逐ふ。此途端、又一疋、伊賀の方の足元から這ひ出す。女の童目早く見附けて

女童 あれ！ こゝにも！

トこれにて小柴、田毎。

小柴 田毎 おゝ！ (トいひつゞ) しつゝ！！

ト逐ふ。皆々驚いて、又そちらを見る。此以前、伊賀の方ぎつくりして懐をおさへる。藤内と亙理と三侍女とは、互ひに顔を見合せて「まアどうして蛇が出て來たらうか？」と不審の思入れ、こなし。

第二場 奥庭谷間座禪堂

天然のまゝでは、浅い、平凡な峽たるに過ぎぬ處を、多少の人工を施して、何さま一かどの深山幽谷らしく設置ひ、兼れて往來、登降の便宜をもよくしたる凹地。上手、下手、正面とも、見える限りの處は、概して松杉の生ひ茂つてある山の腰や山の裾の景色。すつと下手に、此凹地への降り口が、岩組の間に見え、又正面奥の上手寄には一筋の絲のやうな瀧が見える。

此凹地の中央に一棟の座禪堂。唐、宋いづれとも附かぬ支那風、和風折衷の白木造り、茅葺。三間四方。正面の三間は、真中に九尺四枚の疊み扉、これは悉く明け放し、残る左右の四尺五寸づゝは火燈口式の格子窓を取り附けたる板目。側面も、背面も、同じ式。内部は一面の甃。堂の周邊にも、甃。二段の低い石段。此石段も四面一様に取附けてある。前面の軒下には喚び鐘。

堂内の中央、やゝ奥の方に文珠大士を奉安したる龕。其前に、燈明及び供へ物をするための大小二脚の卓子。其脇に香爐臺。更にそれよりも前の方、よき處に、二疊敷ほどの禮盤。小さい方の卓子の上には、侍女と蜂王とが持参した品々——天目の薬湯と戒刀——が載せてある。又、禮盤よりも上手、やゝ前寄には、前の場の曲条、茵を敷いたまゝ。其すぐ傍

に義時。義時は、つい今がたまで曲条に掛けてゐたらしいが、此瞬間には酷く激昂した顔色で、やゝ斜に下手へ向いて、突立ち、右手に高く杖を振上げてゐる。其すぐ下手、義時と扉との間に膝まづいて、頻りにそれを止めてゐるのは、老女の右近である。小三郎は、更に其下手の前寄に、即ち扉の外の甃の上に平伏して、しきりに詫びてゐる體である。

右近 如何やうな不埒な儀を、小三郎が申し上げましたかは存じませぬが、ま、暫く、暫くお待ち下されませ！ どうぞまア！ 暫くお待ち下されませ！

義時 えゝ、とめるな。邪魔するな。……どけ／＼！……無禮至極な奴だ。ぶちのめしてくれ。……えゝ、どけといふに！

右近 あゝ、もし！ お慮外ではござりますが、ともかくも其仔細を、どうかまアわたくしに、一應仰せられて下さりませ。承りました其上では、決してお止めは致しませぬ。……まア／＼！

トこれにて義時は漸く振上げてゐた杖をおろし、しきりに喘ぎながら
義時 此數ヶ月以來、曾て覚えなんだ快眠によつて、めづらしくも頭燃が熄み、心の安靜をば得たるゆゑ、久しぶりにて座禪を試み、けふこそは無念無想の別境に神を遊ばせうと、限りなく樂みにしてをつたものを……あの藤内めが、おのれ！……恩に狎れをつて私意を挿み、……（ト小三郎を睨み）讒訴三昧をいたしをる！ おのれ、親に似た小才覺な、不所存な、無禮な……

ト疊みかけて言はうとしたが、あんまり激昂したゝめ、息を切らせて、頻りに苦しげに喘ぐ

ので、右近はさまざまに介抱し、やつと和めて曲糸に腰をおろさせる。此うち小三郎は泣きながら

小三郎 讒訴三昧とは、お情けないお言葉でござります。只今も申し上げました通り、其折、其場に行き合はせましたは、わたくしばかりではござりませぬ。右近どのも、又あの亘理どのも、たしかに見たと申されます。其言葉の一々は、間遠ゆゑに聞えませなんだが、あの紀河の矩秀が、お天目をば手に取りあげ、それを飲む真似をいたしましたして、「あの深見めをかたづけたと同じ手段で云々」と申しましたことだけは、決して相違ござりませぬ。

義 時 やい！ 病みほうけて、此義時の目が昏んだとても思ひをるか？ 「深見を云々」といふ、其一言にばかり拘泥りをるので、汝の心の底が見え透くわい！ 察するところ、父の所領地を奪られたのが無念さに、伊賀家一族をば敵と怨み、それで讒言を構へをるのであらうが？

小三郎 存じもよりませぬことを仰せられまする！ どうしてわたくしが、假にも其のやうなことを……

義 時 いや、言ふな。かね／＼父三郎次郎の頓死に疑念を抱き、随つて種々の臆測を試み、或は、奥はじめ光宗らが、豫め謀つて陥れたことのやうに、邪推しをりはせぬかと、實は、とうから疑つてゐたが、……さやうな根性では、或は予をさへも怨みかねまい！ 此恩知らずめが！

66 小三郎 (きつと興奮した顔を舉げて) それはあんまりなお言葉でござります！ 御無體なお言葉で

ござります。お怨みに思ひまする程ならば、とうにお怨みを申しします。なれども(トいひかけ

て、泣きながら) 十四歳以來の御高恩を思ひまするゆゑ……

トあとをいひかけて歎歎をする。

義 時

(更に目を険しくして) 何だと？ とうに怨む？……其譯を言へ。……

ト小三郎なほ黙つて泣いてゐる。

いや、其わけを言へ。

ト小三郎泣きながら、少しく顔を舉げて、怨めしげに

小三郎 父一人のお咎めは、是非がないとも存じますが、所領地悉く召し上げられました其上に、随分お館のお爲には、父三郎次郎は、長い年月の間、粉骨碎身して、御奉公仕つたと承りをりまするに、何にも存ぜない妻子眷族の末までも御誅戮……

トいひかける。右近氣を揉み

右 近 あ、これ、小三郎どの！ 小三郎どの！

トきつと叱るやうに言ふ。これにて小三郎黙る。此間、義時はじつと小三郎を見詰めてゐる。右近は更に形を改めて義時に向ひ

小三郎が只今の、聊爾千萬な失言は、何とぞお聞き棄て下されませう。小三郎に限りましては、お讒言を申すとか、お怨みに思ひまするとか、さやうな不所存が、かつふつ、ござりませうとも存じ

ませぬ。又、あの矩秀の申しましたる儀を、どう不行届に言上いたしましたかは存じませぬが、矩秀があつた夜さりの振舞には、何かと不審の事共のござりました事だけは、互理も、わたくしも、たしかに認めましたのでござります。……(トいつて、小三郎を見返り)これ、小三郎どの、あの本第での其折の顛末をも、もう委しくお申し上げなされたか？

小三郎 いえ、まだ中々そこまでは、申し上げませぬのでござります。

右 近 あれを申し上げいでは、お疑ひ遊ばすが御道理。先夜わしに知らせなされた通り、有りのままをお申し上げなされたがようござらう。……御前、お聴き下されませ。あの夜さり、矩秀が手眞似や耳打にて、光宗さまへ密々の話の模様、何とも以て合點參らず、互理も、わたくしも、心元なう存じましたゆゑ、實は、わたくし一存にて、此小三郎に、内々に申し含め、萬一の用心のため、御庭内を竊かに見廻らせましてござります。……さ、その後はこなたから。

ト小三郎へこなし。これにて小三郎は改めて義時を拜して

小三郎 御庭内を見廻りますうち、ふと小耳に挟みました其夜のお本第のお會合のことが、何となく心に掛り、我知らず、お庭を離れ、つい、あの橋を渡り、お本第の裏門口から奥庭づたひ、やがて奥方のお居間に近づき、……もしお咎めを蒙らば、一命棄つるまでと覺悟を定め……竊にお床下に忍び入れば、ちやうどお密談の眞最中。間遠ながら、とぎれ／＼に、漏れて聞えまする奥方のお聲、實雅さま、光宗さまのお言葉。……たしかに近々に、容易ならざるおくはだて。……尙ほもくはしく

聴取りませうと存ずる折から、俄の物音。上から颯と射す火影に、見咎められては一大事と、あわててお庭へ飛んでいで、一さんに逃出しまする其背後に「曲者ツ！」といふ光宗さまのお聲！ あぶない處を暗に紛れ、立歸つてござりまするが、……其折洩れ聞きました断片的の、毒害云々といふお言葉によつて、容易ならぬ御、大事と心得まして、かやうにお訴訟に及びましたのでござります。

ト此間に義時の表情いろ／＼に變り、だん／＼耳を傾ける。けれど尙ほ半信半疑の體で、黙つてゐる。

右 近 つまり、小三郎の曲事は、わたくしの由ない心添へから起りましたこととござりますれば、何とぞお咎めはわたくしに課せ附けられました、彼れが申し上げまする事共をば、尙ほとくとお聴取り遊ばしますやう……

トいひかけるを義時は不快げに手にて制して

義 時 措け／＼！……え、措けといふに！

トきつといふ。

右 近 は。

義 時 おれは座禪をする。二人とも、呼ぶまでは、退つてをれ。……(と険しい聲で言つたが、やがて聲を和げて)今聴きかけた事は後に又訊ねる。……退れ！

ト靜かに言ふ。

右三郎近

はッ。

ト義時は曲糸を離れ、香爐臺の方へ歩み寄らうとしてよろめく。右近急ぎ立寄りて介抱する。

義時は、後ろ向のまゝ、手でそれを制しつゝ、

義時

よし／＼！……構ふな。(トいつたが、急に見返つて)暫くはだれも來ることならんぞ。

右近

は。

ト曲糸に敷いてある茵を取つて禮盤の上に敷き、軒先の喚び鐘の撞木を取りおろして來て其傍に置き、やがて

では、御免下されませう。こゝにお撞木をばおきます。御用の折にはお喚び鐘をお打ち下されませう。

ト會釋して扉の外へ出で、なほ此時までも俯向いてゐた小三郎を促して先に立ち、石段を降り、ちやうど此時香を焚きつゝある堂内の義時へ思入よろしくあつて、徐かに下手へと進み、やがて坂道を登りて、二人ともに姿を消す。

此うちに義時は香を焚き了りて、見返り、一寸堂の外へ思入あつて、やがて禮盤へ上らうとして、既に一足を踏み掛けたが、半分口の内で

義時

不埒な奴だ！ 無禮千萬な奴だ！ 主に對して指圖がましく……下郎の癖に！

ト險しい目附をして、きつと下手を見やつたが、忽ち目を睨り、しづかに禮盤に上り、茵を

二つに折つて尻に敷き、式の如く結跏趺坐することよろしく、手を結んで膝下に安んじ、二三度深呼吸をしてみたが、程なく不動不言となる。

ト見るうちに、そろ／＼顔面神経が働きはじめ。

すると、目を瞑つたまゝ、小聲で

光宗とあの實雅とが……(トいひかけて暫く間を置き)いや、讒言とばかりは思はれん。現に右近があゝ言ふ。……(ト又暫く無言)……繼子の泰時の世となつては、何事も儘にならん。……だから、政村に跡を繼がせて……(これまで小聲でつぶやいてゐたが、急に思ひ當つたことがあるらしく、少しく聲を高めて)さういへば、現に此間、彼女がおれに對つて……

ト俄にぎよつとした思入で、目を開き、急に左右前後を見返り

何時！……

トいひかけると共に膝を崩し、急に起上つて、後ろの小卓子の上の戒刀を劔と取つて引附け決して油斷はならん！

ト小聲で口早に言ひ足したが、やがて又坐に着いて

が親に似て、中々執念ぶかい、僻んだ根性もある奴。……うつかりとは信ぜられん。……氣取つたかも知れん。……(ト手を組んで考へ)まさか俺がさせたとは思ふまいが……

ト言つて、俄に愕然として、我に返つたといふ思入。

あゝ！ 雑念！ 雑念！

ト急に目をふさぎ、膝を組み直し、又二三度深呼吸をして、半分口のうちにて
諸法皆是因縁生、因縁生故無自性、無自性故無去來、無去來故無所得、無所得故畢竟空、畢竟空故
是名般若波羅密、南無一切三寶、無量廣大、發阿耨多羅三藐三菩提、納塞薄伽伐帝、鉢刺壞波羅
多曳、恒躬他、室姪曳、室曬曳、室曬曳、室曬曳……
ト唱へつゞける。

第三場 座禪堂の背後

堂の背面の扉は閉ぢたまゝになつてゐる。こゝにも、前面のと同様の低い石段が取附けて
ある。

正面にも、上手にも、下手にも、ほと前の方の背景と似たりよつたりの、松杉の生ひ茂つ
た山の腰や山の裾が見渡され、すつと上手奥の險阻な岩組の間には、わざと險しく設置つ
たらしい降り口が、大きな木立越しに見えてゐる。此降り口を降り切つた處に、そこに自
然石をころがしたまゝの石橋、其下は細い石清水の流れ。其邊、小笹、雜草、蔓物等が生
ひ茂つてゐる。それから、すつと前寄のやゝ上手にも岩組、そこに自然のまゝの泉があつ
て、浅い井戸の形をなしてゐる。此の泉の末も、前の流れへ落ちて行くらしい。

伊賀の方は、侍女の小柴と田毎とに介抱せられて、上手の險しい降り口を降りて来る。田
毎は伊賀の方の被衣を持つてゐる。やがて石橋を渡り了ると

伊賀 病後に、久しぶりで歩いたせるか、ちつとばかりの此坂路が、けふは、ことの外、大儀なや
うに思はれた。

小柴 そのお筈でござりませうとも。こちらのお道路は、あちらの御本路とは異ひまして、わざと
深山とやらのやうに、險しうおしつらひ遊ばしたのでござりますもの。御病後の事ゆゑ、嘸お疲れ
てござりませう。ちつとまアお休息遊ばしませ。お館さまには、まだくお座禪の最中でもござり
ませうほどに。

田毎 ほんに、さう遊ばしませ。おからだに障りましては、おわるうござります。

伊賀 いや、それには及ばん。すぐに行きませう。……したが、お氣むづかしい折から、そな
たゝちが附いてゐてはわるい。用があらば呼びませう。今の、あの二本松の邊に控へてゐや。

二人 はい。かしこまりました。

ト伊賀の方、田毎へ「かつぎをこちらへ」とこなし、これにて田毎は被衣を伊賀の方へ渡
し、小柴と共に會釋して、元來た坂路を登りて、姿を消す。

ト伊賀の方は徐かに左右を見廻し、やがて懐ろへ手を入れて、何物かを探る思入。

ト其嚙元から大小三疋の蛇がによろ／＼と鎌首を出す。それを見て一寸思入、すぐに指の先

で軽く其頭を叩いて引込ませ、同時に下手前の桌に目を附けて、徐かにそれへ立寄り、おのが顔、姿を水鏡に映して見ることにありて、うなづき、やがてもう大分斜になりかけた午後の日光を厭ふらしく、かつぎを被りつゝ、そろ／＼堂に近づき、石段を上り、堂の側面に出て、火燈口式の窓口から、そつと内部の様子を窺ふ。

第四場 以前の堂内

前の場の通り、義時は、瞑目して、禮盤の上に結跏趺坐してゐる。が、顔面神経は絶間なくふる／＼と顫動してゐて、心の中は落ちついてゐないらしい。その顫動も、はじめは顔面だけであつたが、見てゐるうちに、それが全身に及ぶ。次の獨語は、或部分は只の自問自答であるが、或部分は辯疏のやうでもあり、叱咤のやうでもあり、或部分は疑惑の歎息でもあり、或部分は懊惱の呻きでもあり、或部分は夢の裡でうなされてゐるが如くである。恐怖、悔恨、猜疑、憂悶、心の苦み、肉の疼み、種々雑多の感情が混淆になつて其心中に洶湧し、往來し、衝突してゐるらしいのが、じつと瞑目はしてゐるが、其顔面表情に、歴史と見えてゐる。で、其言葉の調子も、はじめは低くもあり、ねことのやうでもあるが、やがて、それが高くもなり、急にもなる。

74 義時

それは是非に及ばなんだのだ。……天下は天下の天下だ。天下の安危には易へられんわい！

……馬鹿ツ！……けれども、あの折、××みづから出陣せられなかつたのが、此方の幸福だつた。怖しいのは、人心の微妙な作用だ。……決して侮れん。……だから、泰時が——餘計な事に！——途中から引返して来て、「若し御親征に逢つたら、如何しよう？」と聴きに來た時……其時、おれがさう言つた。「まさか變興に向つて弓を引くわけにはいかん、……けれども……」

トいひかけたが、俄に愕然と我に返つて

あゝ？

トいふと共に、急に崩れかけてゐた形を直して、半分口のうちに

内空、外空、内外空、空々、大空、勝義空、有爲空、無爲空、畢竟空、散空、無變異空、本性空、自想空、一切法空、不可得空……

ト唱へ／＼、次第に沈黙し、二三分間は不動不言であつたが、やがて又我知らず、半眼に目を開いて、苦悶の表情をして、情けなげな聲で

あゝ！ あゝ！ 隱岐の小島！……××このかた××として××××ついで來た……天子だ！

ト思はず此末の一語を大きく手強く言つた自分の聲に駭いて、我知らず目も口もくわつと開けて、正面を切り、いはゞ物におびえたやうな表情をしたが、やがて又我に返つて、怖い貌をして

何を馬鹿な！……××などは有らう筈はない。同じく人間だ！ おれでなくて、どうして此亂世が

治まる？……馬鹿なツ！

ト言つて、居丈高になりかけたが、やがて其怒らせた肩をおろして、又じつと目を瞑つた。が、一分と経たぬうちに

が必ずそれを口實に、吊ひ合戦なんぞと言ひたて……

ト又暫く間をおいて、目を瞑つたまゝで

今こそ勢ひに怕れて螫してはゐるが……いや、たしかに恨んでゐる。……まさか、あの一族だけは……大丈夫だらう。……あいつをあれだけ手なづけておいたから。……よもや？

トまでは小聲で穩かにつぶやいてゐたが、やがて堪へがたげな苦悶の表情をして、頭をぶるぶると顛はせたかと思ふと、又目をもくわつと開いて

あゝ！ あゝ！ 此四十年來、心血を絞り、骨々を碎きみじいてまで、やつと築きあげて來た北條の地盤も、おれが目を瞑ると一しよに、忽ちぐわらぐわらと崩れてしまふのか？……あゝ千仞の功も！……あゝ！

ト顛に手を加へて暫くは無言で、苦悶してゐたが、やがて如何にも草臥れたらしく、歎息してあゝ！ 疲れた！……あゝ、あゝ、おれも疲れた！……あゝ、あゝ、あゝ果しもない心づかひ！ それなのに、一人として役に立つ奴はない！ 一人として此苦みを知つて、片腕となつてくれる奴がない！ あゝ！ あゝ！ あの深見……三郎次郎！

トふと言ひかけたが、忽ち苦い顔をして口を嚙み、やがて又太い溜息をしてあの泰時は……あゝ！ あれはまたあんまり！……

トいひさして又力なげに歎息して

あゝ！ 疲れた！ 疲れた！

ト如何にも意氣地なく、ぐたりとなり、やがて暫く術なげに喘いでゐたが、漸くにして

いや〜、いや〜！ (といふと共にきつとなつて) 何をいつてゐるのだ！ 何を考へてゐたのだ！ あゝ！ 又しても怠隙！ 妄念！ (ト目を瞑つて) 生死苦樂！……大無常！……大無常！

トいひ〜、取り亂してゐた形を改め、後ろの龜の方へ向き直る。さうして恭しく合掌禮拜して、極小聲で

南無文殊大菩薩！ 南無文殊大菩薩！ わが此昏蒙何の時にか醒めん！ 願はくば、あゝ、大慈悲を垂れ、大般若を頒ち下したまひて、わが此昏蒙の苦を抜かせたまへ！ 救はせたまへ！ 南無文殊大菩薩！ 南無文殊大菩薩！……

トだん〜聲を低め、とゞ無言になつて祈り、やがて向き直り、更に結跏趺坐し、瞑目したが、二三分すると、こんどはこくり〜と居眠をはじめ、幾度も禮盤から轉げ落ちさうにしては驚き醒め、又何事か口の内で唱へ〜してじつとなる。かと思ふうちに、又もこくり〜、やがて又驚き醒めて、唱へ言を繰返す。そのうちに又もや顔面神経が顛へ出して來る。する

と、小聲で、斷續的に

頼家の死んだのは、いふまでもなく……實朝も……公曉も……（ト暫く間を置き）うま〜繼母をおとし入れた上に、現在の實父をも幽めたなんぞと……

トいひかけて又暫く黙つてゐたが、急に何か不安を感じたらしく

いや〜、義村とても——手なづけてはおいたが——油断はならん。……それにあの……實雅！

家柄が家柄だけに……（トきつと何か思ひ當つたことがあるらしく）どうも本當らしい！ 光宗と彼れと……紀河の矩秀……紀河の……（トいひさして溜息を吐く）さうだ！ あの時、圖らずも、

あの宗近めの毒藥を奪ひ取つたのを幸ひに……牧の方の陰謀の裏を搔くため……（トいひかけたが）可哀さうだつたのは弟……政範！

トいふと同時に、一種名狀しがたい苦悶の表情をして、目を開き、情けなげに

あゝ！ 政範！

トいつて、悲しげに首をうなだれ、暫くの間無言でゐたが、又急に何か思ひ出したらしく、眉をひそめて

此間、あの蜂王めが、庭を歌つて歩いてゐた奇怪な唄……それから、此頃中二度まで續けて見た、あの厭な夢……まさとまさ……雅と雅、政と政……方……時……全くたつた一字ちがひだ……まさ〜と物の怪……あゝ物の怪……祟り……死靈！

ト忽ち悚然としたる思入。

ト座禪の膝は、もうとうに崩れてしまつてゐる。

これより先き義時が頻りに「南無文殊菩薩！」を繰返してゐた時分に、堂の背面の扉が音もなく開けられて、伊賀の方が、脱いだ被衣を小脇に抱へて、そろ〜と龕の下手へと廻り出で、じつと義時の様子を窺つてゐたが、此時しづかに前の方へ歩み出る。

時刻はまだ午後の四時過なのだが、こゝは樹木が繁茂してゐる上に谷間であるから、傾きかゝつた日光は、もう殆ど直接には映してゐない。随つて、堂内の如きは、もう大分うす昏い。で、一週間以上の難行で、今だに衰へてゐる伊賀の方の相貌は、如何にも重病らしく、蒼白くも見られる。

さて、義時は、我知らず後ろが見られるやうに感じたらしく、先づ窺と上手の奥を見やり、やがて背後を窺ひ、次第に下手へと其目を轉じた。ちやうど其途端に、伊賀の方が、下手の奥から廻り出でたので、義時の臆病げな其目は、はたと伊賀の方の顔と出逢つた。義時は眼球が飛出すかと思ふほどに目を睜つて、覺えず禮盤の上に突立つたが、忽ちよろめいて踏みはづし、よろ〜と二足三足、上手の前寄へとたぢろぎ、そのまゝのめるかと思ふうちに、ちやうど手に觸る曲糸を力杖にして、やつと踏み止まつた。さうして進みもせず、退きもせず、石の像のやうになつて、じつと伊賀の方の顔を見詰めてゐる。

伊賀

ト伊賀の方は、如何にも病んで疲れてゐるらしい力ない聲で、しづかに、とぎれ／＼に
わが夫、御免下されませ。……もうお行は果てましたか？

トいひつゝ、禮盤の下手へ進み出で、一寸膝まづいて
思つたより早いお快氣……ほんに悦ばしう存じまする。

ト此間に、義時は、だん／＼我に返り、もう既に恐怖の表情だけは跡もなくなつたが、なほ
頻りに焦々するらしい心を、じつと自ら制して、辛うじて落ちつき、曲糸に腰をおろし、む
づかしい顔をして、不興げに黙つてゐる。

ト暫く間をおいて、伊賀の方は又言葉を繼ぐ、やつぱり力なげな聲で、時々術なげに息を吐
いて、とぎれ／＼に言ふ。

お行の妨げをせまいたため、わざと案内をばさせませいで、卒爾にお見舞申しました。若し御機嫌に
叶はなんたら、どうぞ慮外をばおゆるされませい。わらはも、あの翌る日から、持病が起つて、
此間中は、枕に就いてばかりをりましたが……けふは、餘儀なく申さねばならぬ事があつて……
お見舞かたがた参りました。

ト義時は心が落ちついたらしいが、尙ほむづかしい顔をしたまゝで

義時

ふむ！ 餘儀ない大事？ といふのは？

伊賀

餘の儀でもござりません、我家の跡目相續の事について……

義時

トいひかける。義時はぎつくりして、また忽ち沈着が破れかけて
え？ 又あの、此間の相談か？

トいひつゝ不興げに顔を背ける。

伊賀

（苦しげに、静かに）いかにも、あの事に就きまして、家國の爲には、申しにくい事も申さ
ねばなりません。……幸ひ一旦は御平癒あつたとは言へ、もはやお年の上の、かうした御容體であ
るからには、現に四五日前のやうな不慮の事もあつて見れば、——かんまへて安心はなりません。

家のため、また天が下のためをおぼしめすなら、今の間にこそ後々の事をも、とくと指圖しておか
せらるべきでござります。これはもう既に先日も、一わたりは申し上げましたことなれども、けふ
は取りわけ、曲げても申さねばならぬ仔細あつて——

義時

ト息苦しげにいひかける。これより先、義時の面上に、次第に猜疑、憎悪、憤怒なども解
釋せられる表情が交代したり、混淆したりして現れ、其都度、義時は目をけはしくして伊賀
の方の顔をきつと見詰めてゐたが、此時もう堪へかねたらしく、はらだ／＼しげに

それで、……どう指圖しろといふのだ？

ト聲の調子は低い、手強く、口早に、むしろ反撥けるやうに言ふ。けれども伊賀の方は、
やつぱり前と同じ調子で

伊賀

さア、先日申した通り、和田の一族が亡びて後は、由緒なり、權勢なりの、直に我家に次

ぐものは、先づあの三浦の一黨ばかり。彼等を巧妙に用ふれば、末長う無二の身方、我家國の柱石ともなるべきなれども、若し野心を抱かせたら、我夫亡き後には片時も安心はなりません。豫て我夫にも其處に御用心あつたればこそ、あの義村をば政村の烏帽子親とはなされたのでござりませう。わらはが世の思はくをも顧みず、政村を是非お跡目にと望みまするも、畢竟は、あの義村の心をば攪らんため。これぞすなはち我北條家安泰長久の大計にござります。或は、わが實の子可愛さの女心、身勝手とおぼしめすまいものでもなければ……

トいひかける。

義時 (皮肉に) では、さうでないといふのか?

伊賀 はて、おほせまでもないこと!

義時 (手強く) 嘘言を吐け!

伊賀 え?

義時 剛愎をかはきをるな!

伊賀 え! 我夫? 何といはせられます?

義時 (向き直つて) おれを欺すことが出来ると思ふか?

伊賀 え!

82 義時 (睨みつけて) やい! おれが目を瞑るのを俟つて、あの實雅を將軍とし、政村をば表に立

て、兄の光宗に執權の實を握らせ、自分は尼御臺の役をしようといふ陰謀であらうが!

トきつと言つて、ふつと手に觸る戒刀を、半無意識に左手に擱んで、禮盤の上に居丈高になる。

伊賀 まア、思ひがけない! 疑ひにも事を缺いて、てもまア! あんまりな、あさましい、その……

トいひさして、後は言へないといふ風に、泣く。

義時 (トそれをじつと睨みつけて) いや、それに相違ない。此四十年來、おれの……(ト喘ぎながら) 密事を悉く知つた者と言つては、あの深見三郎次郎たつた一人の外にはなかつたが、その深見めがああ公曉の事からして、おれの手にも負へぬ程に増長しをつて……

トいひかけると、むら／＼と過去の事を思ひ出されて來たらしく、じつと向うを見詰めながら

すて、おけば、何を爲いだしをるか圖られんので、手早く彼奴をかたづけけるために……(いつたが太い息を吐いて) あゝ! 女と小人! ……つい何もかも知らせてしまつたのが俺の誤りであつた!

……

ト急に伊賀の方を見返つて

そこへ附け込んで、強もて、跡目を取らうといふのだな!

伊賀

トきつといふ。
何といふ……情けない……そのわるずる！

トいひさして、わざと取亂して泣く。之より先き、義時「どう指圖しろといふのだ？」と叫んだ頃に下手の降り口へ深見小三郎がそろ／＼と降りて来る。さうして伊賀の方の「先日も申した通り、云々」の白の間に、堂の下手側面の石段を上つてよろしく思入、その火燈口式の窓に寄りそつて、内の様子を窺つて居り、此時、義時の此言葉を聞いて、大いに驚く思入あり。なほ息を殺して聴いて居る。

義時

いゝや、さうだ。きつとさうだ。やい！ それを俺が怖れると思ふか？ おのれ！ 俺の密事の有りつたけを、えい、何處へなりと、だれになりと、披露しをれ！ 吹聴しをれ！ うぬ……
……一×××××をも物ともせぬ義時だ！ 三×××××をも鳥流しにした義時だぞ！ 天上天下、此義時に刃向ふ者があるか？ うじむしめが！

ト戒刀を左手に掴んだまゝ、まるで病苦などは忘れてしまつたやうに、猛然として禮盤の上に立つ。此間伊賀の方は、如何にも弱々しく力なげに、整の上に突伏して、泣きながら。

伊賀

(ますます苦しげな息づかひで) あさましい其疑ひを晴らすため、……所詮、いはいては叶はぬことゆゑ、……今いうた表立つた仔細（じさい）の外の、餘儀ない理由（こゝろ）を言ひませう。……(ト喘ぎながら) 政村をば跡目にと願ふのは……ゆめさら生きぬ仲の子を疎み、生みの子を世に立てたいなんぞ

といふ、さうしたさもしい慾心でない證據は……

ト苦しげに息を繼ぎながら

此間からのわらはのわづらひ。……その原は……さる怖ろしい……死靈の祟り！

トこれにて義時はぎつくりしたる思入。

義時

え！

トいふと共に、突立つてゐる威嚴のある姿勢が、又淺ましく崩れかける。伊賀の方はきつとそれに目を附けたが、又忽ち病苦を装ひ、なやましげに喘ぎつゝ、

伊賀

これ、御覽なされ、わらはの此五體の衰へを！ わらはも我が夫と同じ様に、とりわけ此十日このかたは、夜毎のやうに、其死靈に祟らるゝ、身の惱み、心の惱みに、眠られねばこそ此衰へ……(ト苦しげに息を繼ぎて) 政村を跡目にと願うたは、ひたすら其死靈をば和めうため……なれども、はじめは、心の迷ひかとも疑ひ、中頃は父や兄の名に恥ぢて、有りのまゝには言ひ出しかね、今も今とてわざとこしらへて申したゆゑ、御不興の上にその疑ひ……

ト又泣く。義時はまだ突立つたまゝであるが、前の居丈高の擬勢は脱けて

義時

死靈とは？……死靈とは、何の死靈？……

ト半信半疑の體で、伊賀の方をきつと見下しつゝ言ふ。

ト伊賀の方は、なほ俯向いたまゝ、はじめは泣聲で、低く、とぎれ／＼に物を言ふ。其中に、

それが、だん／＼と調子高になり、モノトナスな、しやがれた、物すごい聲に變つて行く。
 伊賀 淺まじや！ 悲しや？ 怨めしや！ かけし年ごろの大望の、人の爲に謀られて、うたかたの、跡もなく消えしだにも怨めしいに……何の科もない可愛し子をば、あの花のやうなわく子をば、人手にかけて、非業に失うたる其怨み！ いつの世にかは忘らるべき！ 魂魄永く此土に留まり……
 トだん／＼言ふことが物すごいとなると共に、伊賀の方の表情もそれにつれて變化し、とど、すつくと起つ。これにて義時棟とした思入。思はずたち／＼となる、ト伊賀の方は、又忽ちばたりと倒れ、如何にも苦しげに身を悶え、我手で胸元をおさへながら、聲だけはやはり物すごい幽霊聲にて

只一字のみ異なつたる、同じ呼び名の縁に牽かれ、無慚に破れし前生の、その妄執を晴らさんため……

トこゝまではしやがれたモノトナスな聲で言つたが、又急に持前の伊賀の方の泣き聲に戻つて、苦しげに喘ぎながら

夜毎にわらはの夢枕に、あさましい姿を現し、政村と生れ換つた政範に……此家の跡目を譲らばよし、若しそれをさへ拒むならば……

ト苦しげに喘ぎつゝ言ひさして、又頻りに身悶えし、忽ち又前のしやがれ聲に戻つてもしそれをだに拒むならば、見よ／＼今に、おのれ、怨めしい極重悪人！

ト伊賀の方又すつくと立ち、義時をきつと睨みて

今に其報いを見せてくれん！ まづおのれが後添ひの……此女めを！ 此女めを！ これを見よ！
 ト伊賀の方又ばたりと倒れ、はげしく身悶えし、甃の上を轉げ廻つて苦む。義時我知らず其そばへ寄らうとする。此うち伊賀の方の小桂は脱げ落ちる。夏衣裳の肌薄なので、轉げ廻るうちに、袖口、襟元のみだりがはしくなるにつれて、腕、胸元など折々あらはになる。ト一疋の蛇が二つの腕に巻き附いてゐるのが見える。さうしてそれが、突然鎌首を立て、義時に向ふ。義時はびつくりして、小聲で

義時 あゝ！

ト叫んで後へ退る。これと同時に、伊賀の方の頸にも一疋蛇が纏ひ附いてゐるのが目に附く。途端に、伊賀の方の裾からも、又小さい奴が一疋這ひ出し、義時の足元へ近寄る。で、義時はうろたへて避ける拍子に、それを踏む。トすぐに其足首に巻附く。これにて義時は、身悶えして、とど、そこへ卒倒する。

ト蛇は悉くいづこへか逃げてしまふ。此間、伊賀の方は、氣絶したやうにもてなして、じつとしてをり、脱げた小桂の蔭から、そつと頭だけ擡げて、義時の様子を窺つて、よろしく思入。

此以前、小三郎は、窓の外にて、始終の模様を見てをり、驚く思入よろしく、此時さすがに

捨ておきかねたといふよりも寧ろ本能的にといつたやうな風に、傍の扉を開けて走り入り、先づ義時を抱き起し、よろしくこなしあつて、ふつと直後ろの卓子の上の薬湯に目を付け、それを取り、やがて義時に飲ませ、介抱することよろしく、小聲にて

小三郎 御前！ 御前！

と呼ぶ。義時やう／＼息を吹返す。けれども一寸目を開いて見て又閉ぎ、術なげに喘いでゐる。

此うち小三郎は、卓子の撞木に目を付け、手早くそれを取り、軒先へ走り出で、喚び鐘を打鳴らす。伊賀の方は、尙ほもとの通り、突伏したまゝである。

程なく、堂の背後から、小柴と田毎、又下手の降り口からは右近が、共に急ぎ足で駆けて来る。

幕

第三幕

第一場 義時の寢所

正面の上手寄五間程の間は上段の間風に設置つたる義時の寢所。(こちらから見ると、舞臺面全體がやゝ漏斗状に見渡さるゝ装置。)其奥の見切、四間の間には一面の壁代を垂れ、

其壁代の兩端の柱から上手へかけて、すつと斜に三間程の間は、同じく壁代。又下手へ斜に、同じ間敷の間は壁。

上段の間の直前は、一帯に落ち間、上段の間と此落ち間との間には簾が降るやうになつてゐる。(漏斗状の装置ゆゑ、此落ち間は、上段の間の框の邊では五間程だが、舞臺端では、六七間になつてゐる。)

此落ち間の上手には、上段の間の壁代と準へに、斜に簾が降されてゐる。其の簾の上手に板敷の長廊下の一端が見える。其長廊下の正面は板羽目。

又、落ち間の下手には、上段の間の壁と準へに斜に降されてゐる簾を隔て、奥へ細長くなつてゐる次の間。其奥の突き當りには妻戸。それから下手の奥寄の方の見切は板羽目、前寄りの半分は蔀格子。

上段の間の中央に、義時、幾枚か重ねて敷きたる敷蒲團の上に疊み上げたる寢具よるものにもたれて、苦しげに肩で息をしてゐる。右近、其下手に坐りて薬湯の準備をしてゐる。

よき處に屏風、脇息、厨子、薬餌の調度、燈臺など。

落ち間のやゝ下手に、加持の藤内、斜に義時の方へ向いて、膝に両手を置き、頭を垂れたまゝ、思案に暮れてゐる體。それよりも更に下手の前寄りに、小三郎、これも頭を垂れ両手を膝に突いて、澁面を作つてゐる。此落ち間にも一脚の燈臺。

次の間には、蜂王と砂王とが、双六盤すうろくばんを間に置いて、双六をしてなり、侍女の甲、乙、丙が其周圍に坐つて、それを観てゐる。いづれも夜伽の體なのである。こゝにも一脚の燈臺。時刻は前の幕と同日の午後九時頃。

義時 (靠れて、俯向いたまゝで、力の無い聲で) 右近! 右近!

右近 はッ!

ト傍へ進む。

義時 (同じ態度のまゝで) まだ、婆は、歸つて來んか?

右近 はい。……まだ、退つて参りません。

義時 御所へ往つたにしては、手間が取れる。どうしたのだらう?

右近 ほんに、どういたしましたことやら! しかし、もう程なく、立歸りますでござりませう。

……お白湯おしろでもさし上げませうか!

義時 不要! 不要!

トいひつゝ呻く。右近は摺り寄つて介抱する。

此うち、落ち間にじつと控へてゐた藤内、少しく頭を舉げて、義時を仰ぎ見て、一寸思入あつて、聊か膝を進めて

90 藤内 押し返して、お願ひを申し上げますは、お慮外ではござりますが、どうかその、せめてお

次の間で、お夜話をいたしますることだけなりと、許してお遣し下されませ。何がまア御機嫌にさほりましたやら存じませんが、十四の年から十八の今年まで、人幾倍の御寵愛を受けてをられた仁だけに俄の御勘當が、一段といぢらしうござります。どうかまア、お次でお夜話をいたしますことだけは……

トいひかける。これより先、義時は煩げに、頭をぶる／＼させて、小聲で、「黙れ! 黙れ!」と俯向いたまゝで、二度ばかり命令したが、耳の近くない藤内には聞えぬかして、尙ほも喋舌りつゞけるので、きつと頭を舉げて

義時 えゝ、うるさい!……黙れ!

ト一喝した義時の顔の色は、前の場のそれよりすつとわるい。殆ど血の氣のないやうにも見える。藤内は口を噤む。同時に、義時は下手にある小三郎に目を附けて、不快げに

あゝ! まだ! (トこはい顔をして右近に) なぜ小三郎めを退げん?……目通りは叶はん。……

退げッちまへ!

ト焦立たしげにいふ。

期最の時義
右近 はッ。……これ、藤内どの、かうしたお不加減の折に、しつこうお願ひ申すのは、な、却つて不爲になります。いづれ、機を見て、わたしらからも。まゝ、ともかくも、小三郎どのを。(トいつて特に小三郎にも) な、小三郎どの!

ト呑み込ませる。これにて藤内は思入あつて、小三郎はよろしくこなし。小三郎は、無言にて、義時はじめ右近、藤内へ會釋して起ち、徐かに次の間へ出で、何か沈思しつゝ、突當りの妻戸を開けて出て行く。後に藤内は、手を組み、頭を垂れ、考へ込んである。

義時 小三郎めは退つたか？

ト俯向いたまゝでいふ。

右近 はい。退出いたしてござります。

義時 (同じ態度のまゝで) 藤内はをるか？

右近 はい。あれに控へてをります。

義時 (少しく顔をあげて、下手を見て) 藤内！

藤内 へいへい！ (ト膝を進めて) 何か御用でござりますか？

義時 若黨共によく吩咐けて(ト嚴格な聲で)あの小三郎めの振舞に氣を付けさせる。

藤内 へいへい。かしこまりましたござります。

ト義時は、此命令をした爲に、息を切らせて喘ぐ。右近は介抱しながら

右近 どうやら甚うお術なさうな。やつぱりお横のはうがよろしうはござりませぬか？

ト義時無言にてうなづく。右近かひぞへして、仰向に臥かし、寝具を被せかける。

93 義時 (仰向けになつてゐて) 右近、奥は、あれから、どうした？

右近 はい。あの……あれからあの、何でござりました。全くお正氣があらせられませんかやうでござりましたので、早速紀河の矩秀を呼びに遣はしまして……

義時 (不快さうに) あゝ、矩秀！

右近 種々と御介抱申上げましたところ……次第にお心確かにならせられました……

義時 あゝ、もうよし！ もうよし……措けへい！……今は……聞きたうない！ 聞きたうない！

ト口早にいつて顔を背ける。これにて右近口を嚙む。

一同暫く無言。次の間では尙ほ双六の勝負を續けてゐる。

ト義時又苦しげに呻く。右近は急ぎ介抱しようとする、義時は喘ぎながら

婆は、まだ、歸つて來んか？

右近 はい。まだ……退つて參りません。

ト義時は本意なさうに

義時 あゝ！……

ト太い溜息をしたが、又暫く無言。やゝあつて又

右近！

右近 はいへい。

義時 暫時眠りたい、簾をおろしてくれ！ その簾を！

右近 かしこまりました。

ト徐かに上段から落ち間へおりて、次の間の方へ向いて、小聲で

侍女たち！ 侍女たち！

ト呼ぶ、これにて侍女、甲、乙、丙

侍女 はア。

ト小聲で答へて、落ち間へ入り来る。

右近 しばらく御寝なるほどのにの……

トよろしくこなし。これにて甲、乙、丙は徐かに上段の間にあがり、右近の指圖に従つて、調度をかたづくることありて、と正面の簾をおろし、右近と共に落ち間へおりる。右近はでは、御機嫌よろしうお寝み遊ばされませ。

ト會釋して起つ。侍女らは元の次の間へ退る。

此間、藤内は、手を組んだまゝ、何か心配げに考へこんでゐたが、右近が落ち間の上手に住ふと同時に膝を進める。

藤内 でもまア、こんなことで済んで、ようござりましたなア。つい此間の今夜といひ、肝腎の力綱の行蓮どのは他行中といひ、ま、どうなることかと案じ抜きました。……

トいつて、あたりへこなしあつて、聲をひそめて一體まア、けふは、どうなされたのでござりませう？ あの通り甚いお元氣でござらつしやつたのに。何かまた奥さまと、争論でもさつしやつたのでござりませうかな？

右近 さア、眞先きに其場へ駆け附けたあの小三郎どのさへ……何にも知らぬ……といふのが不審。藤内 されば、……(ト考へて) 思ひ餘つて、つい、とんだお慮外を申しあげて、御機嫌を損ねたは此藤内。それなのに、其藤内にはお咎めがなくつて、あのお氣に入りの小三郎どのを、御勘氣(ト又考へて)といふのも不審。

右近 小三郎どの、目の色が例になく……(ト考へて) 血走つてゐるのも……一つの不審。

藤内 掃除のよう届いた筈の、あのお庭の、しかも四阿の中から……(ト考へて) 蛇が這ひ出して來たのも不審。

右近 それに、あの小三郎の御密訴のやうにもなく、何氣なげに取りすました、あの奥方の、いつにないお見舞ぶりも不審の一つ。

トいつたが、きつと向うを見て

それにつけても、あの眞理どのは、なぜ遅いか？ 一刻も早く御所のお模様が聞きたいのぢやに。……あゝ、何かと氣の揉めることばかり！……

トいつたが、藤内の方へ向き直つて

藤内どの、とにかく、こよひは、油断がなりませんぞ。さしづめ、若黨衆に吩咐けて、四方の御門をば固めさせて下され。

藤内 心得ました。手前もさう思つてをつた所でござります。では、早速に手配りをいたしませう。御免下されませ。

ト藤内は、右近に會釋して、次の間へ出で、妻戸口から出て行く。やがて右近も起ち上つて、上段の簾際に立寄り、内を窺ふ思入あつて、うなづき、すぐに次の間へ出で、侍女らに

右近 どうやら御安眠遊ばしたやうぢや。急にはお目ざめにもなるまい。わしは、ちよとお表へ往つて來ます。その間、暫時、おぬしたちに頼みましたぞや。

皆々 はい。かしこまりました。ござります。

ト右近は妻戸口から出て行く。侍女らはよろしくこなしあつて、又双六をば始める。こんどは、砂王、蜂王は觀る方へ廻り、甲と乙とが双六盤に相對する。

四つ（午後十時）の鐘が鳴り渡る

燈臺の火形が、——三ヶ所とも、——段々暗くなりはじめ、上段の間のが眞先に、次の落之間のが、其次に次の間のが消える。

第二場 夢の裡の幻景

燈火が昏くなりはじめると同時に、四方が朦朧となつて來て、遂に眞ッ昏闇となる。

其うちに、奥の方にて、遠く陣貝、陣太鼓の音が聞え、関の聲が聞え、それが次第に近くなるにつれて正面の簾の中が夜が明けてゆく時のやうに、だん／＼明るくなり、とゞ月夜ほどの明るさになる。

トそれと同時に、以前の簾のうち、と思はれるあたり一ばいに、一の幻景が展開される。それは、京都の法皇の御所の正門前の景であるらしい。

中央よりはやゝ下手寄りの、すつと奥に、遙かに院の御所の檜皮葺きの正門が、たかゞ五尺ぐらゐの高さになつて見えてゐる。其上手、下手は、式の如き築地のだが、こちらから見ると、それが正門を頂點にして漏斗狀に左右へ、ぐつと斜に開いてゐるので、前面に大きな空間が出來てゐる。其廣々とした空地にもまた築地の内外にも、樹木などは、只の一本も見えてゐない。

此景が、まるで幻燈畫のやうに眞ッ正面に現れると同時に、上手で、男女老若の哭き叫ぶ聲々が、陣鉦、矢叫び、関の聲などと混淆になつて聞える。

ト上手から大勢の男女老若が、こけつまるびつして、逃げて來る。（それは、以前落ち間のあつたあたりで、上段の間の直前が、いつの間にか、都大路に變つてゐるのらしい。）其老若の多くは殿上人である。衣冠のものもあれば、束帯姿の者もある。緋の僧衣の老僧も

あれば、五つ衣きよぎの官女もあり、立烏帽子、風折もあり、尼もあり、童もある。地下も、雑式もある。

これらが、こげつまるびつして逃げて来る後からは、夥しい鎧武者が、武器えものく々々を揮り翳して追っかけて来る。

で、一同は、右往左往に逃げ惑ふ。ころぶ、突倒される、踏みにじられる。切殺される者も妙くない。見る／＼、其多數は血みどろになる。早い話が、土佐、住吉の古い軍繪巻中の内裡攻めか何かの一枚に魂が入って、生きて働くのかと思ふやうな、惨いたましい活畫である。

暫くして群衆も、鎧武者も、追ひつ追はれつして、左右に散つてしまふ。

ト遠くの御所の門内から、一群の鎧武者が練り出して来る。馬上の立烏帽子の武者は其大將らしい。遠いから、いづれも二三尺ぐらゐの身長たけに見える。

つゞいて四方の坂さか與——例の屋形なばつしたの——を雜式が昇いで出る、其脇には、殿上人らしいのが二人、僧が一人附添つてゐる。其後からは、又も鎧武者の一群。此行列は、門からすつと斜に、上手の前へと徐々と練つて行き、やがて見えなくなる。

トだん／＼四下が昏くなりはじめ、遂にはまた眞ッ昏になる。

ト思ふうちに、又だん／＼明るくなりはじめ。

見ると、いつの間にか、すぐ前の處——以前落ち間のおつた邊は——杉並木の景に變つてしまつた。さうして其杉並木は、大抵梢が見えない程に丈が高く、随つて幹も——上手寄のなぞは——中々太いのであるが、それが、中央から上手へかけては段々密接して立ちならび、下手の方は、すつと疎らに生えてゐるので、奥の方が透いて見える。で、御所の正門や上下の築地が、尙ほ先刻のまゝ、残つてゐるのが見える。

ト男女の悲しげに泣く聲が下手の方で聞えて、やがて女御らしい貴婦人と女房一人、女童一人、立烏帽子の公家一人、品のよい尼一人、都合五人が、泣く／＼下手から出て来る。さうして、上手を見て、急ぎ並木の蔭へ隠れ、共に上手を指さしなどして泣いてゐる。

ト上手の奥で、いかにも哀しげな雅樂の音色が聞え、それにつれて、立烏帽子や風折をかぶつた鎧武者共が、多くは長巻を携へて、列を正して練り出して来る。其うち、馬に乗つてゐるのは大將分らしい。其後から雜式が四方の坂與を昇いで来る。殿上人らしい二人と一人の僧とが、泣く／＼附き添つて出る。さうして其後には、第二の鎧武者の群が續く。ト前の五人づれが、こらへかれたといふ風に、並木の蔭から駈け出して来て、輿へ縋る。武者らが驚き怒り、こはい目附をして、これを逐ふ。

此騒ぎの末ごろ、輿はもう下手へ入つてしまひ、第二群の、殿しんがの武者共も既もう殆ど下手へ

消えかけるといふ時分に、又も向うの御門内から第二の同じやうな行列が練り出して来るのが、並木ごしに見える。さうして、それもまた、前のごとく斜に上手の方へと練つて行つてやがて見えなくなつてしまふ。

ト又も並木の上手で、前と同じやうな哀しげな雅樂が聞えて、そこから前のごとく同じやうに歩いてよい一群の行列が練り出して来る。眞先が四五人の鎧武者、其中の一人は騎馬。そのあとから四方の坂輿。又そのあとからも鎧武者の群。

輿が並木の中央まで来ると、下手から、又も最前の五人が駆け出して来て、前と同じやうに輿に取籠らうとする。又無慚にも逐ひ散らされる。

ト又も輿の正面の御所から、第三の、同種、同形式の行列が練り出して来る。やがて前景に於ても、前々のごとく全く同一様の現象が展開される。それが又、同一様の手續で、無慚に逐ひ散らされる。

ト見るうちに、又も眼界が少しづつ昏くなりはじめ。遠景の御所の門や築地が模糊となつてしまふ。

トどよよよ、と凄しく打寄せる高浪の音が聞えて来て、並木の奥に、遙かに一の離れ島を浮べた荒海の景が現れ、並木のすぐ後ろの荒磯から先刻の坂輿らしいのを三臺までも載せた船が、今ちやうど漕ぎ出でつゝ、其島の方へと進んで行かうとしてゐる。

ト次第に浪の音は薄れて行つて、絶えて、古風の神樂の鳴り物が聞える。見ると、いつの間にか下手寄りの杉並木は跡形もなく消えてしまつて、そこに小山の裾らしい小高い芝生が見え、又中央から上手へかけての並木も、最も太い三四本の幹だけを残して、其他はなくなり、その代りに、大きな、高い、幅廣な石段の裾の三分の一ばかりが見えてゐる。

ト下手の小山の蔭から二人の鎧武者がうそくと出て来て、何か囁き合つて、あたりを見廻し、人待ち貌である。すると、太い幹の間から、烏帽子、直垂の、四十年輩の、一癖ありげな武士が、前後に氣を配りながら出て来て、何か前の二人へ合圖らしいことをする。

ト二人は忽ち見返り、すぐに其傍へ行く。武士は二人へ何か言ひ含める。二人はすぐ上手へ入る。武士は一人残つて、手を組み、何か考へてゐる。

ト上手の石段の上からだれやら降りて来る。はじめは、沓を穿いた足と奴袴だけが、妙に目立つて見える。實際、一二分間は、其足が石段の上の方に生え附いたやうになつてゐる。其うちに徐り／＼動き出す。降りて来るにつれて、それは衣冠姿の立派な殿上人だといふことが分る。いよ／＼地上に降り立つのを見るとそれは八九年前の——即ち全盛時代の

——義時なのである。右手には儀式用の、黄金造りの御劍を捧げてゐる。

前の武士は、義時を見ると、すぐに駆け寄つて、何事かを報告するらしい。義時は大やうにうなづいて捧げてゐた劍を、竹片でも棄てるやうに、路傍に抛げすてる。

ト此途端に、ちら／＼と雪が降り出して、見る／＼大ぶりになる。其間に、いつの間にか、下手へ大きな石の鳥居が出来る。

ト上手の奥から又も神樂の音色が聞えて来る。すると、義時は、きつと上手へ思入あつて、武士へ何事をか耳打して、やがて二人とも鳥居の下手へ身を隠す。

程なく、上手から、石段の前を横切つて、一人の年若い、緋の僧衣を被た端麗な僧が出て来る。やつと十八九でもあらう。それが鳥居近くへ来ると、義時と武士とは急いで出迎へ、

武士は如何にも恭しく、義時はにこやかに、敬禮する。僧はそれを喜んでゐるらしい。

そのうちに、義時は、何か武士に耳こすりをして、自分は例の幹かげに入つてしまふ。ト武士は居残つて、僧の袖を引張つて、石段の下まで連れて行き、上の方を指さし、頻りに何か囁くらしい。ト僧は切齒扼腕して、くやしがる。武士は四下を見廻し、義時が棄て、行つた先刻の劍を拾つて、それを僧に渡す。僧はそれを受けとり、うなづいて、武士と共に、例の太い幹の蔭へ隠れる。

ト雅樂の、何となく悒鬱な音色が、上手の奥から聞えて来る。さうして、それにつれて、石段の上から、又たれか降りて来る。義時が降りて来た時と同じく、最初は杳と袴の裾とだけが、暫時固着したやうになつて石段の上の方に見えてゐる。其うちにそれが動き出す。降りて来るにつれて、それは東帶姿の人と衣冠姿の人であることが分る。よく見ると、それ

は前將軍實朝と文章博士の仲章なのである。仲章は手に御劍を捧げてゐる。二人が地上に降り立つた其途端に、前の僧が——いつの間にか、白装束の下に腹巻といふ公曉禪師の打扮になつて躍り出で、只一刀に實朝を斬り斃し、返す刀で仲章をも刺し殺し、すぐに實朝の首を打落し、それを刀の先きに貫いて、高く捧げ舉げ、嬉しげに何か叫ぶらしく、天を仰いで大きく口を開く。

ト最前の武士が、拔足して、其うしろから忍び寄つて、只一刀に其腹を背から前へと貫く。其切先が下腹の前へ三四寸がた突き出たのが、まさ／＼と見える。公曉はすぐ斃れてしまふ。

此間、雪はますます降りしきつてゐる。

武士は、公曉の斃れたのを見て、にったりと思入して、つか／＼と下手へ行かうとしたが、どうしたか俄に苦み出して、雪の中へ倒れ、七顛八倒するうちに、口から夥しく韓紅からうれなの血を吐く。

此うちに雪は全く降り止み、あたりがだん／＼昏くなりはじめ。ト何處ともなく、平家琵琶の撥音が聞えて来る。

やがて四方がまた次第々に明るくなる。三本の太い幹だけは元の通りに残つてゐるが、

鳥居はいつの間にか無くなり、其代りに、そこに池の水際らしいものが現はれて其邊一ぱいに眞菰だか葛蒲だかゝ生えてゐる。悶え苦む武士と公曉のらしい死骸とだけは、元の處に残つてゐるが、他には人の影もない。勿論、雪の跡形もない。

それから、上手の石段がなくなつてしまつて、そこには池に臨んでゐる釣殿めいた建物が見え、燈火があか／＼としてゐるので、その簾越しに、琵琶法師の影が透いて見える。

「平家」の撥音は尙ほ續いてゐる。明月が中天に冴えてゐる。

ト太い幹の蔭から、義時が——立烏帽子に水干、附け太刀といふ打扮で——出て来る。此時、血を吐いてゐる武士は苦しさに堪へぬらしく、水でも飲まうとするのか、這つて池の方へ行く。義時は徐かに其後に附いて行く。ト武士は、苦みながら、ふとそれを見附けて、怨めしげに見上げる。義時は、すぐに片脚を舉げて、武士を池の中へ蹴込んでしまふ。ばつと水煙が立つ。

途端に撥音が止んで、ホーンといふ梵鐘の音が聞える。

義時は又徐かに上手へ歩み戻つて、公曉の死骸らしいものを抱き起す。見ると、それは公曉ではない。直垂を被た十四五歳の美少年の死骸なのであるが、これも口元から襟へかけて、韓紅の血が夥しく流れてゐる。毒でも飲んだのらしい。じつとそれを見詰める義時

の貌には、一種の苦悶の色が浮んでゐる。やがて抱いてゐる手を離し、死骸を元の通りに倒しておいて、そのまゝ下手へ行きかけたが、さすがに忍びかれるといふ風に、又戻つて来て、再び死骸を抱き起す。

釣殿の燈火は之れより先きに消えてしまつてゐるが、此時その眞昏な釣殿の中で、悲しげにワーツと哭く女の聲が聞える。義時はそれを聞くと、ぎよつとした思入で、急いで例の幹の蔭へかくれる。

ト上手から四十六七とも見える一人の女房が、被たる衣裳もみだりがはしく、黒髪を振りみだし、全く狂氣の體で駈けて来て、少年の死骸を見るとそのまゝ、ひしと抱きついて、天を仰ぎ、地に伏しまるびて、慟哭するらしい。不思議に其聲は聞えない。或は頬摺をしたり、抱きあげたり、或は抱いたまゝ、駈け廻つたり、暫くは前後不覺の有様であつたが、とゞ奮然として突立ち上り、懐劍を抜き放つて逆手に持ち、目をいからせて、あちこちを見廻すは、わが子の敵を捜すのであるらしい。其うちに、此狂女の目が、幹の蔭に隠れて、じつと様子を窺つてゐる義時の目と、びたり出逢ふ。ト狂女はすぐに懐劍を振り閃めかして、まるで夜叉のやうな勢ひで、其幹蔭へと突進する。義時は駭きあわて、三本の幹の周邊を、幾たびも廻つて逃げる。狂女は其後を追ひ廻る。

此うちに、空には黒雲がはびこつて来て、月は隠れ、あたりが又昏くなる。やがてピカッ

ピカリと電光がして、雷が段々近く鳴り渡る。

どこへ隠れたか、義時の姿は見えない。狂女はますます、猛り立って、物凄いい形相をしてあつちこつちと捜し廻つてゐる。見ると、狂女の相貌は、いつの間にか、真正正銘の、怖ろしい夜叉のそれに變つて、其振亂した黒髪は、毛が數十本づゝもつれ固まつて、太い針金のやうに波を打ちつゝ逆立つてゐる。よく見るとそれがいづれも蛇となつて鎌首を擡げ、紅の舌を吐いてゐるのである。のみならず、今は懐劍を持ってゐない左右の手の、其十本の指も、それも悉く長々と延びて、蛇のやうに、うね／＼と波を打つて、さうして其先きの方は、やはり鎌首を擡げて、赤い舌を閃めかしてゐる。

上手の釣殿も、いつの間にか、薄昏い山蔭の、物凄いい卵塔場に變つてしまつた。樟だか樺だかの大きな枝々が掩ひかぶさり、小笹や雑草や蔓物やが彌が上に生ひ茂つてゐる中に、幾つも／＼五輪が立並んでゐるが、中にも一際目立つ中央のは、高さが五尺程もある。尙ほよく見ると、此卵塔場は怖ろしく廣く、例の三本幹の背後の方までも續いてゐる。そのあたりすつと一面に同じ陰森な山かげで、さうして小笹や茅が生ひ茂つてゐる中に、殆ど無数と言つてよい程の多数の五輪が、其頭だけを見せてゐる。さて鬼女は、義時を捜しあぐんで、又も三本幹の背後へと廻り入つたが、そのまゝ姿が隠れて、暫くは出て來ない。ト上手の卵塔場の最も大きな五輪のうしろへ、義時が突然その姿を現す。顔色が俄に甚し

く憔悴して、急に六つ七つも齡を取つたらしく見える。もう酷く疲れ果て、足元がよろよろしてゐる。大きな五輪につかまつてやつと其前へ廻つて出る、トもう息が切れて堪へられぬらしく、そこに在る竹の花筒を抜いて、其水を飲まうとする。ト其花筒から、だしぬけに青い火がひら／＼と燃上る。驚いてそれを投げ出すと大五輪が音もなく壊れ倒れて、そこに白衣、亂髪、一個の、氣高い、併しながら何ともいへぬ怖ろしい顔色をした貴人の姿が髮髻として立現れ、きつと義時を睨みつけた。其十本の指はやつぱり悉く蛇と化して鎌首を擡げ、くれなるの舌を閃かし、駭いて逃げかける義時の首筋元を目がけて飛びかかるのである。

義時は、こげつまるびつして、三本幹のうしろへ逃げようとする、無数の五輪の頂點が、いつの間には、悉く個體に變つてをり、さうして其の中で最も大きい三つ四つは、その空洞の目の穴や鼻の穴から、ひら／＼とひら／＼と青い鬼火を吹き出してゐる。全體の数は實に無数で、見渡す限り、みんな個體で、實際どこまで續いてゐるのか分らない程である。で、義時は、又取つて返し、こんどは下手の池の方へと逃げたが、やがて息が切れて、いよいよ一步もあるかれぬらしく、やつとの事で池の端へ這ひ寄り、眞菰がくれの水を辛うじて手で掬つて飲まうとする。

ト池の中からも青い火が陰々と燃え出し、義時が愕いて逃げ退かうとすると、其鼻の先き

へ、同じく池の眞菰の中から、凡そ十疋ほどの蛇が同時に鎌首を振立てつゝ飛びかゝる。ト見るうちに白衣亂髪（まじまじ）の怖ろしい顔色の男が、眞菰の中から、半身を現す。前の蛇は其男の指の先きなのであり、また其男は、先刻血を吐いて死んだ武士なのである。これと同時に、例の三本幹の間からは、鬼女が姿を又あらはす。數十疋の蛇に化して蠢く黒髪を逆立てつゝ、また左右の手を高く擧げて働かせて、十疋の蛇を躍らせつゝ、耳際までも裂けてゐる紅ゐの口を開き、今にも此方へ駈けて来さう。上手の卵塔場の方からも、先刻の貴人の怨靈らしいのが追つ掛けて来る。義時は、怖れ戦いて、一生懸命に逃げようとするらしいが、どうしても腰が立たぬらしく、只いたづらに身悶えして、腕き苦しむ。此途端、風とも雷とも地震ともつかぬ一種のおどろくしい物音がして、忽ちに見る限りの處が眞昏になつてしまふ。其昏闇の中で物すごい呻き聲が聞える。

第三場 元の義時の寢所

其昏闇が又だん／＼明るくなると、元の寢所なのである。

簾は依然として下されてあつて、落ち間のやゝ上手には、老女の亘理が、侍女の甲を敵手に、つい今がたまで双六をしてゐたらしく、甲は双六盤の脇に突伏して眠つてをり、亘理

も盤に片腕を突いて、こくりこくり居眠つてゐる。次ぎの間には人影が無い。上段の間の中で、義時がうなされて呻く聲が聞える。其聲に驚いて、亘理ははつと目を覺す。トすぐに侍女の甲をもゆり起しておいて、自分は急ぎ簾を襲げて内に入り、義時を介抱する。侍女の甲も續いて上段の間に近寄り、先づ悉く簾を捲き上げる。

亘理 もし！もし！ お夢でござります。お夢でござります。お目をお覺しなされませ。

ト起す。義時は尙ほ夢中の體で、跳ね起き、四肢（てし）を跳き、五體をふるはせて聞える。亘理はそれを背（せ）ろからじつと抱き止めて

亘理 お夢でござります、お氣をたしかになされませ。もし／＼！ お夢ぢや！ お夢ぢや！

ト子供を諭すやうにいふ。義時はやつと目を開き、亘理の顔をじつと見て、情けない聲で

義時 おゝ！ 婆か！……婆！ あゝ！

ト子供に還つたやうな聲で言つたが、やがて太い地聲に戻つて、喘ぎ／＼呻いてゐる。

亘理 おゝ！ では又、お術ないお夢をば御らうじましたか？

トいひ／＼、脇息によりかゝらせて脊を擦りつゝ、「それ、お薬湯を！」と侍女の甲へこなし。心得て、甲は傍らの厨子に備へてある薬瓶より薬湯を天目へ注ぎ、それを亘理へ渡す。

さ、お薬湯をば、さ、お一口めしあがります。

ト義時に飲ませる。これにて義時やつとおちつき、目を開き、あたりを見廻し、やがて侍女を見て、亘理を見返り、「彼女を彼方へ！」とこなし。亘理心得て、その通り、甲へこなし、甲はすぐに落ち間へ降り、次ぎの間へ出て、やがて突當りの妻戸口より出て行く。此間、亘理は始終義時の脊を擦つてゐる。

義時 (脇息に俯伏したまゝで) まだ誰れかをるか?

亘理 いゝえ、もうだアれもをりません。

トこれにて義時は溜息をして、太い聲で

義時 あゝ! : : : くるしかつた! : : : ! (ト喘ぎながら) 此二年このかた! : : : 随分たびく厭アな夢も見たが! : : : 。

トいひかけたが、だしぬけに

あ!

ト叫んで、抱いてゐる亘理の手を振拂つて、居ながら二尺ほども跳び退つた。で、亘理は臍を潰して

亘理 ま! どうなされましたぞ? : : : もし!

ト追ひすがつて義時の貌を覗く。ト少し落ちついて

110 義時 それは何だ!

ト氣味わるげに下手を指さす。亘理はそれを見て、すつと下手へ膝を進め、やがて簾の紐の切れて落ちてゐるのを見附けて取りあげ

亘理 これのござりですか? : : : (ト義時うなづく) これは、お籠の紐の切れて落ちたのでござります。

トいつたが、一寸思入あつて、やがてこれを懐中へなさめる。

此間に、義時は自身で脇息を引寄せて、靠れる。ト亘理は寝具を其脊へ被せ掛ける。

亘理 これでよろしうござりますか? : : : (ト坐に着きて) 最前は、よつほどお術なさうにござりましたが、どんなお夢をごらうじましたのでござります?

トこれにて義時は、靠れて俯伏したまゝ、溜息をして

義時 此間も、同じ夢を、二度見た。 : : : それと、不思議にも、八九分がたまでは同じであつたが、 : : : 只此間と異つてゐるのは : : : (ト一つ喘いで) 今夜は、予の大嫌ひの、蛇めが出て來をつた! : : : 髪の毛も、指の先きも、何もかも蛇になつて : : : さうして死んだ奴らが出て來て : : : 。

亘理 え! ?

ト義時は溜息をして、亘理を見返り、靜かに、とぎれくゝに

義時 伊豆の北條にをつた時分 : : : あれはたしか、予の六歳の時だ。 : : : 蛭が小鳥で蛇に脚を巻かれた! あれから予は、蛇が嫌ひになつた! : : : おのしは、女に似合はず、氣丈で、その蛇を鎌で

切つて離してくれた。……あゝ！あの時分は！……

ト遠い昔をなつかしむらしく、低く静かに語る其聲は、例になく、一種のやさしみを帯んで聞えた。

亘理 ほんに、あの時分は、まだもう、ねつから、おいたいけていらせられましたつけが……

トまでは言つたが、つい一度に、いろ／＼の記憶が込みあげて来て、胸が一ぱいになつたらしく、亘理は急に口を嚙み、顔を背け、澁面を作つて、無言で、しきりに義時の脊中ばかり擦つてゐる。

トやゝ暫くして

義時 婆！

亘理は、やつと涙を隠して

亘理 はい／＼！

ト義時は黙つて喘いでゐる。

もし！何か御用でござりますか？

義時 婆！物の報いとか、祟りとかいふことは……あるものかなう？

亘理 え！

ト我知らずぎよつとした體で、すぐには答へかれたが、やつと氣を鎮め、分別して、物しづ

かに

さア、随分あるものでござりませうけれど、それはその、御身分柄にもよります。何の！夢は五臓のお疲れぢやとやら申します。お氣になされるには及びませぬ。……ちと又お脊中を擦りませう。

ト義時のうしろへ廻り、又脊中を擦る。二人とも暫く無言。

此時、落ち間の上手の簾の彼方——長廊下口——へ深見の小三郎が姿をあらはす。目に殺氣を帯んで、腰に小さき刀を佩び、拔足して近づき、簾際にひたと身を寄せて、内の様子を窺つてゐる。

義時は、尙ほ脇息に俯伏したまゝで

義時 婆！

亘理 はい／＼！

義時 おれが死んだ後は、……どうなるだらう？……此鎌倉は、どうなるだらう？

トいひ了ると、息苦しげに微かに呻く。

亘理 まア！何をおつしやられます！そんな滅相なことがござりまして、どうなりませうぞいな！

な！よしんば、萬々の事がござりましたにせい、泰時さまがいらせられます。尼公さまがお息災でいらせられます。何のお氣づかひなさることがござりませうぞいな！

義時

いや／＼！……姉も既う六十八だ。先達て見舞に來てくれた時に、さう思つた。あゝ、姉も衰へたと！……ひどく涙脆くなつて、さうして愚痴つぽくもなつた。……もう長くはあるまい！……

トいつて、苦しげに二つ三つ喘いだが、急にびくりとして、顔を擧げ、不安らしく口早に、太い聲で

婆！ あの小三郎めの事を、藤内によく吩咐けたか？

亘理 はい。右近から確と申し附けおきましたげにござります。……（トいつたが、不審さうに）が、どうしてまアあのお氣に入りの小三郎が、俄に御勘氣を蒙りましたことやら！ どうかまア、かうした御不加減の折も折、お手不足でもござります、——日頃の忠勤にめんぜさせられまして、——明日にもなりましたら、どうかまア御勘當をば……。

トいひかけるを面貌で遮つて

義時 （やゝ性急げに）おのしまでが、そんな迂濶な！……（トまでは口早にいつて、一つ喘ぎ、太い溜息をして、しづかに）あいつは油断がならん。決して油断がならん。……深見三郎次郎の倅だ。

ト呻くやうに言ふ。

114 亘理 （不審さうに）でござりますればこそ、あれは、常不斷のやうに、父子二代御恩をば受けましたに、父三郎次郎があゝしたお咎めを蒙るやうな不埒を働き、まことに濟まぬことゝ申してをり

まする。

義時 婆！ おのしは知らんでもあらうが、（トきつと亘理の顔を見て）その三郎次郎は、……實は、おれが殺させた。

亘理 えッ！

ト驚く。小三郎も、きつとこなし、覺えず小き刀の櫛に手をかける。

ト義時は、いはゞ、以心傳心的に、それを感じたかの如くに

義時 や！

トいつて、體をびくりと躍らせる。

亘理 （驚いて）もし！ どうなされました？

義時 （きよと／＼して）だれか、そこらへ、來たやうだ。怪しい物音がした。

亘理 （こなしあつて）はて、だアレも……何事も……ござりませんが……

義時 いや／＼。……どうも何か來たやうだ。……見て來てくれ。

亘理 はい／＼。かしこまりました。

ト亘理落ち間へおる。小三郎あわてゝ姿を隠す。亘理は、上手の簾の蔭をも、次ぎの間をも、とくと見廻つて、戻つて來て

なアんにも、仔細ござりません。……御安心なされませ。

トうしろへ廻りて脊を擦る。これにて義時安心の思入。うとくと眠る體。二人とも暫く無言。

ト義時は又忽ち苦しげに呻き、譫語のやうに

義時 あゝ！ あゝ！ 重い！……あゝ！ 苦しい！ あゝ 重い！

ト呻きつゞける。

亘理 何がさう重うござります？

義時 何だか、おそろしく重いものが、脊中や胸の上に載つてゐるやうで……術ない！ 術なうてならん！ あゝ、重い！

トやつぱり譫語のやうに呻きながら言ふ。

亘理 その重い物をば、みいんな、おろしておしまひなされませ。婆が戴きますほどに。(トやさしくいつて) さア、おろしておしまひなされませ。

トうしろからじつと抱きかゝへて、子供をあやすやうに言ふ。

義時 (力の無い聲で) 婆！

亘理 はい。何でござります？

116 義時 今になつて考へると……(と微かに喘ぎながら) あんまり酷いことをした。……おれはあんまり……酷いことをした！

トこれにて亘理はじつと思入あつて、返事を躊躇したが、やゝあつて

亘理 なアんの！ お前さま！ そりやみいんな、お家のため、御政道のために、なされましたこと

とでござりますもの！ 何の、そんなこと、お前さま！

ト慰めつゝ脊中を擦る。

義時 もうちやうど……五十六年になる。一日もかはらず、同じやうに、眞實を盡して奉公してくれるのは、おのしばかりだ！ 婆！ 全くおのしばかりだ！

亘理 ま、お冥加もないお言葉でござります！ 物體なうござります！……

トばかり言つて、涙聲になる。途端に義時は又急にびくりとして、きつと身を起しかけて

義時 や！ だれか来たやうだ！

トきよとつくのな、亘理は和めて、しづかに

亘理 いえ。だアれも参りはいたしません。だアれも……また些とお横におなりなされませ。

お横に。

トやがて義時を臥かす。二人とも又暫く無言。

ト義時は又うとくと眠るらしい。亘理は、其寢貌をつくくと見おろしてゐたが、とど、こらへかれて泣く。途端に、義時は、一寸目を開いたらしかつたが、すぐに臥返りして、ぐつと顔を背けてしまふ。

ト亘理は、もう居たゝまらなくなつたか、少し下手へ退り、袖を口にくはへて、聲を忍びつ
つ泣く。

暫くすると、義時は、又急に半身を起しかけて

義時 婆！ 婆！

ト事ありげに呼ぶ。

亘理 はい〜。

ト急ぎ涙を隠し、あわてゝ傍へ行く。

義時 (しやがれた聲で、やゝ口早に) 右近も、藤内も、こゝへ呼んでおいてくれ。

亘理 はい〜。かしこまりました。

義時 (力ない聲で) 女でも、右近は、力がある。……武藝にも長けてゐる。……早く呼んで来て
くれ。

亘理 はい〜。

ト起つて、すぐに落ち間へ降りる。

義時 まで〜！

亘理 はい〜。

ト落ち間でかしくまる。

119 義時 すぐ戻つて来てくれ。(ト心細げな聲で言つて) それまでは、あの女共を、爰へ呼んでおい
てくれ。

亘理 はい〜。

ト亘理は次ぎの間へ出て、妻戸口より出て行く。すぐに入り代りて、侍女乙、丙出て来り

乙 お殿さま、お簾をおろしませうか？

義時 (仰向に臥たまゝで) 擧げとけ！ 擧げとけ！

乙 はい〜。

ト乙、丙は落ち間の下手よき處に住ひ、やかて双六盤を引寄せて、對ひ向ひ、双六をはじめ
る。

九つ(午後十二時)の鐘が聞える。

双六をしつゝ乙、丙は居眠る。

ト上手の廊下口——簾の彼方——へ、小三郎が、前と同じ態度で、再び窺ひ出で、侍女らの
眠つてゐるのを見すまして、そつと落ち間へ踏込む。やがて先づ、すぐそこに在る燈臺の火
を吹き消し、拔足して上段の間の方へと進み、じつと義時の寢息を窺ふ。やがて、小さき刀の
鞘を拂つて、上段の間の框へ右の足を踏みかける。

第四場 伊賀の方の居間

すべて第三場の通り。時は前の場とほゞ同刻。

中央のやゝ上手寄に宰相實雅。其下手に式部丞光宗。更に其下手の前寄に紀河の矩秀。伊賀の方は、下手の奥の神棚の前に、春を此方へ向けて坐り、身動きもせず、じつと黙禱してゐる。

實雅 (矩秀に) では、政村は、再度義村どの方へ罷り越したに相違ないと申すのか？

矩秀 で、ござりませうかと心得ます。お別第をお出ましになりましたのは、まだ暮れ果てません頃とやら承りました。それからすぐさま、尼公さま御許へ御参入と承りましたゆゑ、早速御所へ参上仕りまして、伺ひましたところ、とうに御退出にて、三浦さまお第への仰せてござりましたので、すぐさま三浦さまお第へ駆け附けますと、再度御所へとのお答へ。又ぞろ御所へ取つて返しますと、ちやうど只今退出めされた、多分お別第か、さもなければ、再度三浦さま方へのお言葉に附きまして、そのまゝ又お別第へ伺ひましたところ、お見えになりませぬ。さすれば、一定、三浦さまお第に、とは存じましたが、あまりお知らせが遅なはりましたとはと、一先づ立歸りましてござります。

光宗 はて、合點のゆかんことだ。何故さうあつちこつちを廻り歩いてをるか？ 察するところ、

右京兆の容態を心配のあまり、例の尼御前の取越苦勞から、世話焼が嵩じての奔走沙汰でもあらうかい！ しかし、義村方と居どころが定れば、もはや尋ねるには及ばん。身共自身これから参る。：實雅どの、此上は寸刻の猶豫も無用でござる。既に妹に於ても、異議は無いと申す。短兵急に事を發し、眞先に御所を圍んで、こよひのうちに、しやにむに尼公と將軍家とを人質に取つてしまふのが肝要でござる。身共は、これより直様、義村方へ罷り越し、否應なしに出陣の致さす。貴殿にも、時を移さず、御出陣下され。さしづめ、あの廣元入道の第をばお取巻き下され。

實雅 げに機會は逸すべからず。しからば立歸つて、すみやかに其手配りを致すでござらう。しかしながら、御邊只ひとり、不用意にて、義村方へお出向あらんこといかゞあるべき？ 先日以来、ほゞ同意らしい返答でもござつたれば、よもやとは存じ申すものゝ、從來も、彼仁の去就に就いては、やゝもすれば、いかゞはしい噂もござつた。彼の同族たる和田一黨の謀反の際にも、又彼の公曉どの、一條に就いても、——よしそれは、變心、裏切ではないにもせよ、——言はゞ、二股、鼠色、どちら附かずの疑ひもあつたる仁。しかれば、うかと單身にてお出向あらんは……。

トいひかけるを光宗とゞめて

光宗 いや、その懸念ならば御無用。實は先刻、此矩秀から、かの奥庭にての一部始終を聞くとそのまゝ、多分かやうな段取にもならぬかと存じて、屈竟の家の子供——いづれも場數の剛の者——十餘人に、内々申含め、直垂の下に物の具して、後より窺に、當本第の裏手の杜まで参り居るやう

申し附けおいてござる。多分、もはや參着しをらうと存ずる。彼等を引連れて參る上は、大丈夫でござる。何よりも、時がおくれては事の破れ。すぐさま御用意なされ。

實雅 さほどのお手配りがござらば、……ではそれがしは、これよりすぐさま。

ト起ちかける。此時、伊賀の方黙禱を了り、坐つたまゝにて、此方に向ひ、

伊賀 あ、もし！ 暫く。……かりそめならぬ大事の出陣。幸ひの此神酒。

トいひつゝ、例の紅ると藤紫の巻紙を挿した瓶子二箇を、白木の三寶に載せたるまゝ、神棚より取りおろしつゝ、

さらぬだに、武門の守り本尊であらせらるゝ正八幡大菩薩は、とりわけ、我家の氏神にておはしませば、其御冥護を祈りまゐらせて、互ひに酒盃を取りかはし、こよひの門出をば祝ひませう。

光宗 おゝ、それは、時に取つてのよい思ひ附だ！ それ、早く〜！

トこれにて伊賀の方、神前の供物の中より洗米を盛りたる土器を取りて、其洗米を他の器へ移し、それを別の白木の三寶に載せ、前の瓶子のそれと共に、左右の手に捧げ持ちて、徐かに實雅の上手へ廻りて、前寄の自分の例の席に着きて

伊賀 さ、めでたう祝うて、實雅どのから。

トこれより實雅を主座として、光宗、伊賀の方、三人の間に土器を取交すこと。伊賀の方、紅るの巻紙を挿したる瓶子を取りあげて、酌をする。三人の間の取交せが済むと、伊賀の方

は、下手を離れて控へてゐる矩秀へ思入あつて、光宗に向ひ

兄上、あの矩秀は、例の深見の一條以來、引きつゞき、何かと骨折。いはゞ、家の子も同様のもの。ちやうど此席に居合せましたのを冥利に、あれへも其神酒のお流れをば。

ト光宗うなづき

光宗 やい、矩秀！ 進め。酒盃をくれる。

矩秀 はッ。はッ。……これは恐れ入ります。……ありがたく頂戴つかまつります。

ト席を進む。伊賀の方、藤紫の巻紙を挿したる瓶子を取りて、矩秀が受けたる土器へ神酒を注ぐ。矩秀それを飲むこと。それが済むと、伊賀の方は光宗に向ひ

伊賀 兄上、大切の御出陣に、そのお姿のまゝでは、どうやら御不覺のやうでもある。幸ひ、あそこにお父上のお形見の、あの腹巻。

ト上手の壁際の鎧櫃へこなし。

光宗 おゝ！ いかさま。……定めし父尊靈にも、喜んでお許しなさらう。……矩秀あれを。

矩秀 はッ。はッ。心得ました。

ト矩秀、鎧櫃を光宗の傍へ運ぶ。光宗すぐに蓋を開け、腹巻を取りだし、同時に直垂を脱ぎ、着用の支度にかゝる。矩秀手傳ふ。此うち實雅は

實雅 では、それがしは、一足先きへ。……御免下され。

ト會釋して席を起ち、下手へ廻る。

伊賀 實雅どの！

ト呼ぶ。

實雅 (立ちどまりて)は。何か御用でござるか？

伊賀 めでたい凱陣を……(トいひさして、じつと實雅の貌を見て)待ちまするぞ。

トしんみりといふ。實雅は、只元氣よく

實雅 やがて程なく。……御免下され。

トすぐに下手の妻戸を開けて出て行く。伊賀の方は、そのまゝ其後ろ影を見送つてゐる。

此うち、光宗は腹巻を着し了り、其上へ元の如く直垂を被て、太刀を佩くことなどあつて、

伊賀の方に

光宗 なう、おこと……大丈夫、政村は、義村が第やまたには存するが、萬一にも行違つて立歸らば、

尙なほとくと教訓めされ。又、如才はござるまいが、早速郎黨共に吩咐やわたけて、當第やまたは、上下ともに、き

つと嚴重にお固めなされ。……では、われらは、これよりすぐに義村かたへ。

トつか／＼と下手へ行きかける。伊賀の方留めて

伊賀 あ、もし！月夜なれば、表門からは人目の憚り。殊に、家の子たちは裏門口にこの今のお

話。すぐ此庭口から。

光宗 ト正面の奥へこなし。

トうなづきて戻る。

伊賀 矩秀、それ、御案内。

矩秀 はッ。

トいつたが、彼れば、どうしたか、此少し前から、切りに胸苦しげにしてゐたのであつたが、

此時それを忍んで、辛うじて起たうとして、忽ちよろ／＼とよろめく。けれども辛やっと踏みこ

たへて、正面の壁代を上手へ裏げ掛け、板敷の次の間へ出て、眞向うの妻戸に手を掛け、そ

れを左右へ開かうとしたが、もういよく堪へられなくなつたらしく、其手を離し、たぢた

ぢとうしろへよろめき、ばたりと壁代の傍へ倒れて身を跳き、苦み悶えてゐたが、それはほ

んの暫時で、やがておとなしくなつてしまふ。息が絶えたのらしい。

之より先き、光宗は、すぐ矩秀の後に附いて、壁代の傍まで進んだのであつたが、此體を見

て驚き、覺えず駆け寄つて介抱しようとした。が、伊賀の方が、急に手を舉げて之を制め、

意味ありげに目まぜをしたので、何か仔細のあること、呑み込み、息が絶えてしまつたまで

は、たゞじつと突立つて、見おろしてゐた。

伊賀の方も、同じく立つて、斜に見おろしてゐた。

光宗

矩秀が全く動かなくなつてしまふと

(伊賀の方を見返りて) これは!?

ト説明を求め貌に言ふ。けれども伊賀の方は其間ひには答へないで、しづかに

伊賀 兄上、事は……(トいひかけて、じつと光宗の顔を見つめて) 成就するとおぼしめすか?

光宗 (いよゝいぶかしげに) え? 事とは?……今夜の、この、旗擧げの事か?

伊賀 (しづかに) いかにも。……おそらく、事は破れましたぞ。

光秀 え?……とは又なにゆゑ?

伊賀 さア……

トいひながら、徐かに元の席へと歩み戻る。光宗も餘儀なく、共に、二三歩歩み戻つたが、やがて立ちどまつて、伊賀の方の座に着いたのを、けんな貌をして見おろしてゐる。伊賀の方は坐つたまゝ、それを見あげて

實は、此事の成否の心元なさに、最前も、いつもの通りに、一心不亂となつて、大菩薩に祈念を籠めましたところ、例の如く、夢現に、夫義時は餘命翌をも俟たず、また、此企は今宵の中に露顯し、破るゝ、と何處ともなく微かな御聲は疑ひもなく神のお告げ!……兄上、此上は、豫めお覺悟なされて、事いよゝ破れたらば、父上のお名に恥ぢぬやうに、——我家の名折れにならぬやうに、——見事な、お手際の御最期をなされませ。どの道、潔いお覺悟が肝腎でございますぞ。(トいつ

て、じつと思入あつて) 今の矩秀の言葉で察すれば、政村は、もうとうに、敵方の人質となつたに相違ない。

ト靜かに、しかし肅然と獨り言のやうに言つて目を瞑ぐ。光宗は、此間、其貌を、不審さうに見詰めてゐるが、此時

光宗 さては、……政村の行くへをば氣に病んで、……心配の餘り……

トいひかけて、覺えず歎息して

あゝ! 日頃の男まさりも、大膽な肝魂ひも、……あゝ、さすがは女氣! 一大事の際に臨んで、こりや、妹!……どうかしめされたな?

ト伊賀の方は尙ほ黙つて瞑目してゐる。で、光宗は、又も矩秀の死骸の傍へ歩み戻りそれにつけても、合點のゆかぬは、……この矩秀の爲體!

ト又きつと伊賀の方を見返りて

若しやおことが……

ト探るやうに言ふ。

ト伊賀の方は目を開きて

伊賀 さア、……

期最の時義
トいひながら徐かに席を離れ

内證事を知り過ぎた其うつけ者。

トいひつゝ、徐かに光宗の居る方へ歩み進みて

事が成就しても、行く／＼は邪魔物。破れたら尙ほの事。たれ憚らず、有る事、無い事に尾鱒をつけて、あしざまに言ひ觸らしあるくは必定ゆる……

トいひさして、矩秀の死骸に指さし

ま、ごらんなされ、ほんにまア、不思議な、この、薬の效能！十九年のむかし、左馬ノ介政範が飲んだのは、すなはち此薬ぢやと夫の話。只少しの苦みにて汚くるしい血も吐かず、すや／＼と眠るが如き此死に様！

トじつと矩秀の死貌を、會心げに、見つめてゐる。で、いよ／＼光宗は、これは氣が狂つたのかと思つたらしく、太い溜息を吐いて、情けなげに

光宗 妹！

ト一語言つたが、あとは言ひかれて悵然としてゐる。これにて伊賀の方は振返り、光宗の情けなげな貌を見ると、これも

伊賀 兄上！

ト只一語、沈痛な聲で呼んだつきり、互に一二分間じつと無言で、貌を見合せてゐる。やがて、光宗は手早く厨子の上の驛路を取つて激しく振鳴らす。

光宗

ト程なく侍女の田毎が、急ぎ足に、下手から入つて来る。

(それを見るや否や) それ！奥方を介抱せい！身共は心が急ぐ。後を頼むぞ！

トいふや否や、妻戸を押開いて、庭上へ躍り降りる。

扉が左右へ開くと、十一日の、落ち方の月の冴え渡つてゐる庭の面の一部が見える。但し光宗の姿は、すぐに見えなくなる。

ト伊賀の方は、駭いてげん顔をしてかしまる田毎を、しづかに制して

伊賀 はて、わしが如何したのでもない。急病で、矩秀が頓死したのぢや。……あの死骸をあらへ。

ト壁代かけの死骸へこなし。

田毎

は。

ト起ちかける。

伊賀

あ、これ！……まだ其外に、大切な用事がある。……こゝへ。

ト傍近く呼び寄せて、小聲で

別第の事が氣にかゝる。人目にかゝらぬやうにして、そつと、あの奥庭づたひに。……な。……

ト正面の奥へこなしあつて、何事かを、更に聞えぬ程の小聲にて吩咐ける。

田毎

はい／＼。……はい／＼。……はい。心得ましてござります。

ト呑込み
では、御免遊ばしませ。

トいふや否や、急ぎ甲斐々々しく身支度して起ち、先づ手早く矩秀の死骸を板敷の下手へ運び了り、すぐに戻つて来て、開けはなしてあつた妻戸口より庭へ降り、これも忽ち姿を消す。此以前、伊賀の方は、二階厨子の傍らに坐して、錠の下りてゐる部分を開けて、何やら書類を幾通りか取り出すことあつて、此時、それを一纏めにして手にし、起ちあがる。

途端に、やゝ遠くにて、頻りに陣貝を吹鳴らす音が聞えはじめ。伊賀の方、きつと聞き耳を立てる。其陣貝の音がだん／＼殺氣を帯んで来る。ト何處ともなく閩の聲のやうな夥しい人聲が——これもやゝ遠くにて——聞える。其中に陣太鼓の音も聞えて来る。

ト下手の方俄に騒がしく、侍女の小柴が、血相を變へて、妻戸を開きもあへず、駈け入り、膝まづいて

小柴 申し上げます。大變でござりまする。

伊賀 (おちついて、しづかに) 何事ぢや?

小柴 式部の丞さまには、先刻お庭口からお立歸り遊ばしまする處を、豫て、あのお裏門口に待ち受けをられました御所がたのお討手のために、ちやうどあの杜の傍で、激しいお働きの後、お囚人におなりなされましたさうにござります。つい只今がた承りますれば、豫てあそこには、御家來衆

がお待ち受けの筈でござりましたげなが、其人達は、其前に、途中でお召捕になつたとやら申しませぬ。そればかりではござりませぬ。御謀叛露顯とござりまして、中將さまにも、最前こなたよりお歸りのお途中、大江さまのお手にて、やつぱりお召捕になりましたさうにござります。

ト息つぎあへず語る。

伊賀 (やはり静かに、しかし緊張した調子で) 政村は?

小柴 四郎さまには、將軍さまや尼公さまと御一しよに、亥の刻頃に、大江の入道さまお第へ、窺かにお移り遊ばし、其後、三浦さまをはじめ大名がた御一同、おひ／＼御陣立をなされて、かなたへお詰め切のやうに承りをりまする。

ト伊賀の方これを聞き了りて、しづかにうなづき

伊賀 よし／＼。……小柴、わしは少し頭が重うてならぬによつて、ちつとの間寝みたい。大儀ながら寢床をしつらうてたもれ。

小柴 はい／＼。……かしこまりました。

ト言つたものゝ、合點がゆかぬといふ思入。やがて起つて、上手の簾の内——上段の間——へ入る。

此間に、伊賀の方は、下手の神棚の前に座を占めて、先刻の書類を燈明の火にて焼くこと。燒きじまふと、起つて厨子の方へ行きかける。途端に、此時まで明けはなしてあつた正面奥

の妻戸口へ、侍女の田毎が半身を現はしたのが、なほ冴えてゐる月の光で見える。ト見るうちに、もう板敷へ駆け上つて

田 毎 御方さま！ 御方さま！ 大變でござります！ 大變でござります！

トけたまはしく呼びながら、駆入つて来て、今ちやうど厨子の前に立ちどまつた伊賀の方の前に膝まづいたが、二の匂を繼ぎかれる程に息を切らせてゐる。

伊賀の方は、きつとそれを見おろして

伊 賀 (しづかに、低く、併し緊張した調子で) 御臨終か？

田 毎 (なほ喘ぎながら) はい。……(といつたが、又一つ息を呑んで) 今日、御勘當の上、お目通りをお遠ざけになりましたあの深見の小三郎が、どうして、いつの間に、御寢所へ忍び入りましたやら、お寢息を窺うて、短刀にてお胸元を刺し貫き、すぐに御落命でござりました。

トこれにて伊賀の方も、さすがにびつくりした思入にて、思はず坐り

伊 賀 して、その小三郎は？

田 毎 たつた一足おくれて立戻られました亘理どの、右近どのが、それと見るより走り入つて、すぐさま其場にお取押へに相成り、御誅戮なされましてござります。

伊 賀 では、わが夫をば、父三郎次郎の仇敵と怨んでの爲業ぢやな？

132 田 毎 はい、御意の通り、最初はさやう申し立てましたげにござりますが、御老女がたが、科あつ

て御成敗になつた親の爲に、大恩ある御主君を仇敵と怨むとは道理知らず、とお叱りになりましたところ、「朝廷の爲に、天に代つて、逆臣を誅するのぢや」とやら、最期に申し立て、絶息れましたさうにござります。

ト此間、伊賀の方は、じつと瞑目して聽いてゐたが、やがて

伊 賀 硯箱を。

トこれにて田毎は立ちて、上手の厨子の方へ行く。其間に、伊賀の方は、しづかに、併しながら、手早く、傍らの三寶に載せてある瓶子——藤紫の巻紙を挿したる方のと土器とを取りあげて、神酒を注ぎ、すぐに飲乾して、元の通り三寶に載せて遠くへ押し遣ること。此うち

に田毎は厨子から硯箱を取りおろして、持つて来る。

之より先き、小柴は上段の間の簾を悉く捲き上げる。寢具其他よろしくしつらひあること。

小 柴 お寢床をしつらひましてござりまする。

ト此間に、伊賀の方は、ほんの七八行宛らしい書面をさら／＼と二通認め了り

伊 賀 おゝ！ 大儀であつた。……(書面を巻きて、結び封にして)ほんの暫時寝みたい。半時も経つて醒めなんだから、遠慮なう起してたもれ。……

トいひつゝ徐かに起ち、すぐに上段の間へ上る。田毎と小柴とは貌を見合せて、不審と不安

とを混交ごうごにしたといふ思入。
小柴！ この簾を。

トこれにて、二人とも起ちあがりて、簾をおろすこと。

やがて二人は、すつと下手へ来て、貌を見合はせ、殆ど同時に

小柴 田毎どの！

田毎 小柴どの！

ト小聲で言つたが、上段の間へ思入あつて、すつと寄り、互ひに聞えぬ程の聲にて何か語り合ひ、そのたびに驚く思入よろしく、更に上段の間へ思入、こなし。とど、うなづきあひ、再び上段の間の方へ行かうとする。

途端に、下手の方又俄に騒がしく、やがて四郎政村を先きに、老女亘理、急ぎ足にて妻戸を開きつゝ駈け入る。

政村 (急いだる調子で) これ、母上は何處どこにおいでぢや？

ト小柴、田毎は、あわてゝ膝まづき、敬禮して

小柴 これはくゝ！ いらせられませ。只今あの、一寸御寢ごしんなつてとござります。

政村 なに？ 此一大事の折からに、御寢なつて？……

134 亘理 では、まだ何事も御存じないのでござりますか？

135 小柴 いえくゝ。何もかもようござんじでござりまする。

亘理 あの、ようござんじで？ (トいつたが一寸聲をひそめ) あの、老公さま御他界——御變死

——の御事をも？

田毎 はい。つい只今、申し上げましたばかりでござりまする。

亘理 えゝ！ それでは若しや？……(トあわてゝ) 四郎さま、それ！ ともかくもお寢間の様子を！

トこれにて政村、血相を變へて、簾を褰げ、上段の間へ駈け上る。亘理もつゞく。トすぐに簾のうちに

政村 母上！ 母上！……や！ 母上には！

亘理 やゝ、こりやもうとうに！……これ、おもとたち！ おもとたち！ お簾を！ お簾を！

トこれにて小柴、田毎、急ぎ上段の間に駈け寄りて、簾を捲きあげること。

ト伊賀の方は、寢具の上に、仰向に、安らかに、横になりて、きながら眠つてゐるやうにして、死んでゐる。少しも悶え苦んだ跡はなく、聊かも取亂した體もない。枕元に、先刻の結び文が二通置いてある。

政村 (泣きながら) 尼御臺にお縋り申した效たげあつて、母上のお命乞ひが叶うたゆゑ、取るものも

取りあへず、駈け附けて参りましたに、母上！……母上さま！ 早まつたことをなされましたな

ア！

ト泣く。互理も泣きながら

互理 お髪かみの毛の、たゞの一筋でも亂れてはをりませぬ。まるでまア、すや／＼と、お眠り遊ばされていらせられるやうな此お貌附！……おゝ！ こゝに何やらお書置かき置きらしいものがござります。

ト二通の遺書を取りあげて

もし！

トいひつゝ政村に渡す。政村は、泣く／＼、先づ一通の結びを解いて、読むことありて

政村 たつた十行にも足らぬ此短いお書置かき置きのうちに、残る隈もないお言ひ残し！……何もかも御自分ひとりでお引受けなされての此お覺悟！

トいつて、片手で目をおさへて、又暫く泣いてゐたが、やがて別の一通の結びをも解いて、一寸読んで見て

おもと、これはそちらへ。

ト互理に渡す。互理はすぐにそれを読んで見て

互理 おゝこれは侍女つうにょたちへの……

トいひさして、すぐ上段の框の下で泣いてゐる小柴、田毎へ渡ししながら

年ごろの御奉公をお美ほめなされての、お慈悲のお言葉。

ト此時、政村は、前の書置をも互理へ渡し、又死骸に縋りて泣く。

此うち小柴、田毎は、渡された一通を、互ひに取り交しつゝ読んで、泣きながら

小柴 數なりませんわたくしどもにまで……

田毎 このやうなお情けぶかいお言葉！

小柴 お遺物かたがらのことまでも……

トあとをいひかかれて、聲を合せて泣く。此間に、互理は涙を拭き／＼、書置かき置きを読み了りて

互理 あゝあ！ お立派な、お手際な、お見事な御臨終！

といひ終つて又涙を拭ふ。

幕

北條義時の死は自然か、人爲か？

私は、「義時の最期」といふ脚本を最近に書いた。其因縁上、斯ういふ問題を提出して見る。但し私の立場は、主として藝術上の餘業としてある。歴史家、傳記家、考證家としてではない。

純粹の藝術上の要求からいふと、義時といふ人物も、其死といふ事件も、言はゞ、ほんの一時の方便も同様の借り物たるに過ぎない。或は、私でない他の作家であつたならば、殆ど同じやうな藝術的要求を具體化するに當つても、私とは全く別の題材を採つたかも知れない。いや、或は、私とても、若しそれが今ならば、又、若し他の過去の、又は現在の、又は空想の、人物乃至事件中に、更に一層よく私の内的要求を藝術化するに適當な題材を見出したならば、むしろこれを捨て、それを使はうとするかも知れない。けれども、私が、最初史劇を書かうと思ひ立つたのは、今からざつと廿何年も前の事で、其頃は、仔細あつて、特に保元、平治から承久、貞應へかけての史的因縁果報の理に深い感興を覺えて、其時代の人物、事件を題材にして、三部又は五部續きの、所謂循環史劇を作つて見たいと思つてゐた時であつたから、そこで特に其最終編として「義時の死」を選んだのであつた。もとより、その時から、今日までは、二十幾年といふ随分長い間隙が挟まつたがため、私の人生觀や藝術觀の推移するにつれて、同じ史實に對する見解も、作意（腹案）の枝葉も、著しく變改せられざるを得

なかつたけれども、義時の死を以て公武——皇室對武家——開闢史の一大段落としようといふ豫定案だけは動かかなかつたのである。

すなはち、最初の腹案によると、第一部が崇徳院と悪左府頼長と爲朝とを三本尊とした悲劇。第二部は義朝か、頼朝か、頼家かを主人公とした悲劇又は准悲劇。第三部は時政の後妻牧の方を主人公にした悲劇。第四部は實朝の悲劇。第五部即ち最終編は義時の死、といふ豫定であつた。さうして、見事、此五編によつて保元から承久、貞應に至るまでの、あの複雑な、深刻な史的因果律を具體化して見よう、といふのが私の其頃の抱負であつた。

ところで、いよ／＼着手する段になつて見ると、いろ／＼の理由から、史實しらべの等閑に附しがたいのを感じはじめた。もとより藝術は藝術であり、歴史は歴史であるべきである。藝術は決して歴史の従隷ではない。それは言ふまでもない事である。が、それにも係らず、藝術品と其題材との關係は、——其製作の實際上からいふと——全くの局外者や理論一偏の美學者などの考へてゐるやうに單純ではないといふことに心附いた。少くとも私だけは、自分の氣持が殆ど全く其題材と同化してしまふほどにならなければ、仕事が進も眞剣にやれないやうに感じた。さうして、その爲には出来るだけ、又特に文化的又心理的に、史實を稽査して見たいと思つた。それから、第二には、總て事件の論理的聯鎖も、性格の心理的脉絡も——殊に數百年以前の史蹟や史人物に關するものは——作者一個の比較的狹隘な主觀を主にして結構するよりも、寧ろ其當時の記録や——よしそれが捏造にもせよ、若しく

は眞偽相半にもせよ——比較的其當時の人情、風俗、理想、信仰に接近してゐた時代の傳説や記録や批判や評論を參酌して結構した方が、一層自然に近いものが出来るらしく考へたからであつた。「事實は傳奇よりも奇だ」といふ諺にも幾分の眞理はあるが、「事實は自然主義の小説よりも自然だ」といひ換へて見ると、それには更に一段の眞理があるといへる。殊に、四五百年以上も信ぜられ來つた傳説なぞに至つては、少くとも其國の民性史上から觀て、自然らしい要素に富んでゐるものと見做さるべきだと考へた。彼の明治、大正の特殊の主觀によつて、徳川、織豊、足利、鎌倉乃至王朝時代の人物の性格描寫も、うまく行つた場合（殊に地の文として書いてある場合には）其心理的解剖の穿細な點などに妙味があるが、出來損なつた時分には、馬琴の『弓張月』や『巡島記』や『八犬傳』などよりも以下の、史的とは全く名のみ、變な、不調和な、書かれた當座かぎりの、藝術品となつてしまふ。生中史的といふ假面なり外套なりがかぶせてあるだけに、往々落着のわるい、不具な物になる。もとより、あの馬琴の歴史物とても一種のまやかし物である。時代の人物を其時代の思想や感情に同化し得て描寫したものといふよりも、作者の時代、即ち文化、文政時代の常識道徳の理想を具體化したものたるに過ぎないと言ふべきが、彼の八犬士である。爲朝でも、義秀でも、彼れのは、決して保元時代や和田合戦時代の爲朝や義秀ではない。無論、折衷派の論孟ぐらゐを聽講してゐた人物になつてゐる。けれども、さすがに馬琴の主觀には、まだしも武家氣質とか、封建思想とか、武士道精神とか、とにかく今日のとは全く別種の——比較的爲朝や義秀や八犬士に縁故のある——一種の

時代精神が、即ち武士だましひといつたやうなものが、衰殘しながらも、尙ほ脈々として通つてゐた。で、まさかには、今の或作家らの歴史物のやうではない。今の或作は、餘りに主觀的で、餘りに空想的で、史的と稱するには餘りに杜撰である。蓋し明治も三十年代以後に世に出た作家連には、黒船渡來以前の國民精神と今の時代精神との相違が容易に明細には分らぬらしく、随つて鎌倉時代の武士や戰國時代の豪傑の心理解剖をするにさへ、どうかすると、世紀末の思想感情を其儘に、甚しいのになると、殆ど異國情調を其まゝに移植してゐるのがある。假に畫や彫刻に喩へていふと、彼れらは極めて暢氣であるべき王朝時代の大宮人や農夫や、極めて豪放であるべき戰國時代の勇士の相貌なんぞをも自意識の強さうな、神經の尖銳さうな今人をモデルにして製作する。作者と同趣味の者歟、全く歴史に通じない鑑賞者ならば、或はさういふのを見ても、何等かの史的幻影を起し得るであらうが、私などは、さういふのを見ると、いつもどういふわけ、名義だけを過去の物にするの歟と疑つて、生中史的といふ外套や假面の添へてある爲に興を覺されることが多い。殊に、新作家の手に成つた史劇などには、とかく其類が多い。彼等は、史的題材を只ほんの方便だとして度外にしてゐる歟、てなくば心理作用は古今共通であり、不易であると思つてゐるのであらうか、現代人の心理作用は、之を其儘に維新以前の人物、殊に戰國時代の人物へ移植するには、餘りに其自意識が強烈であり、餘りに自己批判や自己解剖が穿細である。又、餘りに智慧走り過ぎて意志が弱い。で、もし之を古人に適しようといふには、どうしても其人物を幾分か病的にでも仕立てなければ、自然の心理状態だとは思はれ

かねる。古人は、殊に戰國時代や鎌倉時代の人物は、其強健である限りは——神經衰弱症にでも罹らぬ限りは——如何な智的な、思慮の周密な、神經過敏な人物も、今人に比べれば、ずつと簡放でもあり、粗大でもあつたらう。假令自意識は強著であつたにもせよ。今の文學者なぞのやうに、一々明細に且つ具體的に、それを分析批判するなぞといふやうなことはなかつたに相違ない。種々に煩悶し、種々に臆測する場合とても、脳作用が、言はゞ、甚だ不分明であつて、頗る溷濁したものであつたらう。自他に對する自意識がさほど明瞭ではなかつたらう。随つて常に自ら欺いて、虚榮の爲にしてゐることをも全くの忠義の爲と思ひ、利己の爲にしてゐることをも犠牲的と思つたこともあらう。又、常に、事に臨んでは、概して今人よりも本能的でもあり、情意的でもあり、實際的でもあり、功利的でもあつたらう。現に、今の人に就いて見ても、文學者と政治家とでは其心理作用の細情には著しい差があるではないか？

之を要するに、やゝ似つこらしく——即ち史的幻影を呼び起すに足るやうに——古への人物を寫さうと思ふと、先づ姑く今の我を離れる必要がある。自分の狭い主觀を捨て、成るべく多く、成るべく廣く、過去の主觀を参照して見る必要がある。それは獨り史劇を作るために必要なばかりではない、人生を知る上にも必要なことである、と其當時も思ひ、今も尙ほさう信じてゐる。

私が、過去の記録や傳説に重きを置くと同時に、特に義時の死因といふことに感興を持つて、多少の穿鑿を試みようとしたのは、つまり、斯ういふ動機からであつた。

尙ほ歴史畫や歴史劇に就いては、私は、嘗て故高山氏と大分念入に論争をした。同氏のは其の全集に、私のは『文藝と教育』に收められてある。

ところで、義時の死に關して、『吾妻鏡』には斯うある。曰く。

十一日(貞應三年六月)辰ノ刻、前ノ奥州義時、病惱。日者御心神違亂セシムルト雖モ、又殊ナル事ナシ、而ルニ今度已に危急ニ及ブ、仍テ陰陽師國道、知輔、親職、忠業、泰貞等ヲ招請セラル。卜筮アリ、大事有ルベカラズト。戌ノ刻、滅氣ニ屬セシメ給フベキノ由一同ニ占ヒ申ス。然レドモ御祈禱ヲ始行セラル。天地災變ノ祭二座國道、三萬六千ノ神祭輔、屬星祭國、如法泰山府君ノ祭親、此祭ノ具ヘ物等、殊ニ刷フ法儀ノ如キノ上、十二種ノ重寶、五種ノ身代リ馬牛男女悉ク其沙汰アリ。此外、泰山府君、天胃地府ノ祭等數座ナリ。是レ懇志ヲ存スルノ人面々ニ修セシメラル。但シ時ヲ移スニ隨ツテ彌々危急ナリ。云々。

十三日、前ノ奥州ノ病病已ニ獲麟ニ及ブノ間、駿河守ヲ以テ使ト爲シ、此由ヲ若君ノ御方ニ申サレ、恩許ニ就イテ、今日寅ノ刻ニ飾ヲ落サシメ給フ。巳ノ刻、遂ニ以テ御卒去アリ。十二年六月。日者脚氣ノ上、霍亂計會云々。昨朝ヨリ相續イテ彌陀ノ寶號ヲ唱ヘラレ、終焉ノ期ニ迄ルマテ更ニ緩リナシ。丹後ノ律師善知識トシテ之ヲ勸メ奉ル。外縛印ヲ結ビ、念佛十反ノ後ニ寂滅セラル。誠ニ是レ順次ノ往生ト謂フベキ歟。云々。午ノ刻。飛脚ヲ京都ニ遣ハサル。又、後室飾ヲ落ス、莊殿房律師行勇戒師タリ。云々。

『北條九代記』のも大同小異である。曰く

同月(六月)十二日、前の陸奥の守北條義時、心地殊の外に惱みたまふ。日ごろ病氣のことありしかどもさして殊なる色にも覺えたまはざりし所に、俄に危急悶亂し、人事をも省みたまはず。二位の禪尼をばじて、子息一族、内外の人々手を握り、汗を流し、上を下に返したまふ。陰陽師國道、泰貞らを召して、御祈禱仰せ付けられ、天地災變の祭り、二座三萬六千の神祭、屬星如法の太山府君の祭りを行ふ。供物其式を守り、十二種の重寶、五種の身代り、悉く其沙汰あり。其他、天胃地府、八字文珠、訶利帝母、七佛藥師、金輪の法、おのゝ修せらるといへども、時移るに隨ひて、いよゝゝ危急に迫りたまふ。翌日十三日の巳の刻に、遂にはかなくなりたまふ。行年六十二歳なり。同十八日、故右大將家の法華堂の東の山上に葬りて、一堆の墳墓にぞ埋みける。人生の浮生、水面の泡、石火電光、一夢の中、すべて無常の有様、たれかは當に遁るべきなれども、榮貴今盛んなる時節に方つて、家門是れ當に至り、武威輝く最中ぞかし。天下の事いかゞあらんと危む人もありけり。

其病症に關しては、只の一言の説明もない。

畢竟、藝術上に利用すべき史的題材としては、斯ういふ曖昧なのが最も都合がよい。揣摩臆測の餘地の在る處にこそ想像の自由が在るからである。假令史家の間には、義時の死因に關する何等の疑問が無かつたにしても、作家は斯ういふ記事に對しては、自然に其空想を働かせる自由を有する。況ん

や史家の間にすら、既に多少の疑問のある場合に於てをやである。

て、先づ手近な史籍に就いて、「義時の死は自然か、人爲か？」と尋ねかけて見た。公然「人爲だ」と明記してあるものには、『大日本史』がある。附註して、其横死たるべきを暗示してあるものには『本朝通鑑』がある。其非業たることを論斷してあるものに『讀史餘論』や『日本外史』のたぐひがある。けれどもこれらは皆、徳川時代のといふ一種の色目鏡で見た見解であるといふ點に注意することを忘れてはならぬ。徳川時代以前には、もしくは足利時代、もしくは其當時には、どう見做されてゐたか？ 明治大正の、最も進んだ歴史的考證は、之に對して、どういつてゐるか？

『鎌倉時代史』の著者、三浦周行博士の説は斯うである。

戦亂(承久の)戡定後、銳意戦後の經綸に當りつゝありし義時は、元仁元年五月(六月?)病を獲たりしが、同十二日、病勢頓に革まり、翌日頼經の許可を得て、出家し、即日逝去せり。時に年六十二。十八日、頼朝の法華堂の東なる山上に葬れり。(これを新法華堂と稱す。)吾妻鏡には、日者脚氣之上霍亂計會と見え、百練抄にも、去十二日頓病、翌日死去と見えれば、恐らく脚氣衝心の爲に、其死期を早めたりしならん。世には、彼れが近習の爲に殺されしとの説あり。(保曆間記)然れども何等の確據あることなし。思ふに、是れ彼れが承久亂の巨魁たりしより、其終りを全くせざらんことを希ふ一部の希望に伴うて捏造せられたる一小説に過ぎざるべし。

三浦博士の冷靜な、理智的批評に對照すると、新井白石の論斷は明かに感情的である。曰く

承久の亂後、二年を隔て、元仁元年六月十三日、義時死す。東鑑に、日比脚氣の上霍亂にていよく、危急なりしかば、若君に申して今朝寅の時に出家して死す。昨朝より彌陀を唱へて怠らず、外縛の印を結び、念佛十遍の後終る。順次往生といふべし。保曆間記には、近習の小侍の爲に刺し殺されしと見ゆ。(中略)按ずるに、本朝古今第一等の小人、義時にしくばなし、三帝、二王子を流し、一帝を廢しまゐらせ、頼家並びに其子二人、又頼朝の子一人、頼朝の弟一人、姪一人、それが中、公曉をして實朝を殺させし有様、其奸計おそるべし。景時、義盛を殺せし事前に論じき。彼れいかでか其死を得べき。東鑑の記せし所信すべからず。順次往生の類、皆是れ文飾の言葉たること明かなり。保曆の記さもあるべくや。

頼襄に至りては、更に一層感情的である。

北條氏の源氏に於けるは、則ち藤原氏の王家に於けるなり、皆寸兵尺鐵を用ひずして、其國を権席の上に篡へりき。何ぞ其れ易かりしぞ。(中略)北條氏の陰謀狡智は、乃ち藤原氏の及ぶ所にあらざるなり。其骨肉を開かせ、其手足を剪り、其權を潜收默竊して、己れ未だ嘗て手を措かざるが如くせり。其權を得るに及びても、亦た翼戴する所ありて、敢て自ら居らず、其名を辭して其實を取り、其利を捨て、其柄を操り、天下をして己れを議する能はざらしめ、子孫其遺謀を守りて、加ふるに周密を以てし、終に帝王の廢立、攝録の進退をも悉く決を己れに

取らしめ、而して已れば關する所なく、已むを得ずして之れが措置を爲すが如くにせり。是れ北條氏の家法にして、能く長く天下の權衡を持せし所以なり。而して心を民事に盡すに至りては、前後の武族、罕に觀る所なり。蓋し自ら其悖逆の、人神の容れざる所なるを知りて憐々焉として此れを以て之れを贖はんと計りしなり。而して泰時は其最なる者なり。世の論者「泰時に於ては、問然する所なきのみ」とす。余謂へらく、承久の事、泰時は其罪の魁なりと。(中略)……然れども北條氏七世、其人理を以て論すべき者は、獨り泰時あるのみ。其他義時輩の如きは、皆蛇虺鬼蜮なり。又曷んぞ責むるに足らんや。或は傳ふ、義時は深見某といふ者を誅して其子を近づけ、卒に殺す所となりぬと。噫、是れ其れ或は然らん。むかし平の清盛、源の義仲、並びに兵を稱へて上皇に抗したるが、皆讒人をば除かんとせしのみ、敢て其幽囚の計を遂げざりしなり。然れども猶誅滅をば免れざりき。義時の如きは、眞に無前逆賊なるに、而も叛名を世に脱るゝを得たり。天、手を臣僕に假りて、之れを斃したるか。其子孫に及びて、新田氏の斧鉞に遇ひ、其巢穴を抉られ、其醜類を殲されたり。天網は恢々疎にして漏さずとは豈に信ならずや。(日本外史)。

彈劾演説の一節か、檢事の論告の一部分かのやうである。將門や清盛の同感者は、光秀、三成の辯護者と共に次第に殖え、尊氏や家康や頼朝を、感情本位の批判から離れて、政治家、經世家として歎美推讃する史論家の増加する今日に在つても、義時だけは、まだ國張後援者を得ないくらゐであるか

ら、其維新以前の不人氣は推して知るべしである。ところが、其天の聲とか、天の手ともしてはやされてゐる『保曆間記』の記事其物は極めて簡練な、零碎なものである。

爰に元仁元年六月十三日、右京大夫義時、思ひの外に、近習に召使はれける小侍に突き殺されたり。さしも十善帝王だに居ながら打勝ちまゐらせしかども、業因遁れがたきこと、都て疑ふべからず。承久の合戦に、尾張、美濃より始めて宇治、勢多、京都の合戦に、死者幾千萬と云ふことを知らず。院、宮、遠島へ下らせたまふ。公卿、殿上人、誅せらるゝ人々の歎き勝けて計ふべからず。此くの如きの報いと覺えておそろし。此頃、義時嫡子武藏守泰時、彼の伯父相模守時房、折ふし六波羅にて、在京したりけり。此事を聞きて馳せ下る。云々。

『本朝通鑑』及び『讀史餘論』には、此近習の名をも、又其父の事をも明記してあるが、二書共に其出所に關しては何の言ふ所もない。『通鑑』の方が、先出らしく、一層くはしいから、原文のまゝを左に抄出する。

一説に曰く、義時の近侍に深見三郎といふ者あり、其父嘗て數邑の宰たり、色を好み、驕を極め、淫樂を以て業と爲し、飲宴を常となす。故に私に公税を斂め、家に千金を累ぬ。義時之を聞き、其罪を糾して之を誅し、其三子を放流す。三郎は其長なり。年を歴て之を赦し、三郎を擧げて近侍となす。三郎父の罪を贖うて弟の赦を乞はんと欲して、義時に仕へ、太だ勤む。日夜之に侍して怠らず。此くの如きこと五年。然れども義時一邑をも與へざりき。初め其弟を

赦さんことを請うて未だ果さず、三郎之を恨み、義時の疾むに及んで、其隙を窺うて之を刺し、以て讐を報いぬと稱す。亙理の平太、年七十餘、傍に在り、之を隔てんと欲して能はず、三郎遂に義時を弑す。亙理進んで三郎を殺す。北條氏之を忌みて、疾みて卒すと稱す。(原漢文)。一體、此「深見云々」といふ細情は、どこから出たのであるか？ 又いつ頃から言ひ傳へられたことであるか？ 義時の不臣を憎む餘りの捏造傳説と假定することに賛成するにしても、何等徳川以前の相應の記録中に據りどころがなくては、まさか春齋、白石程度の學者がさう輕々しく採録しようとは信ぜられかねる。で、嘗て此事に就いて、間接に、特に鎌倉史に精通してをられる八代國治君に質問したところ、同君の答へに

『本朝通鑑』の記事は何によつたか、深見三郎といふ名は曾て他書に見當らない。但し十數年以前、偶然「荒川系圖」によつて、『通鑑』のに類似の文を發見した故、其際寫し取つておいたのだがどうしてか紛失した。その後再び「荒川系圖」を見たが見附からない。多分越後の「荒川系圖」であつたかと思ふ。大學史料の「荒川系圖」にはない。しかし記憶に残つてゐる處によると、其人——即ち深見三郎——に當る者が父の所領を義時に沒收されたのを遺恨に思つて、義時に親近し、寵愛せられ、遂に之を弑して仇を報ずるを得た、といふ筋であつた。云々。尙ほ『若狭國志』にも『通鑑』のと同じい、但しほんの二三行の饒疎な記事があるとの事だが、それは『通鑑』よりも後の刊行だから、出典にはならぬといふことである。

「荒川系圖」は、史的典據として果してどれ程の價值のあるものか知らないが、義時横死の件は、其記事と『保曆間記』のそれとの外には、更に所見がないとすると、史家が此事實を肯定せられないのは尤もなことである。併しながら、局外者の、殊に作者の立場からは、尙ほ幾らも疑議を挾んだり、勝手な空想の翼を擴げたりする餘地がある。私の近作『義時の最期』は、つまり、此餘地から芽を出し、生長し、ともかくも花を發き、實を結んだのである。



昭和七年九月廿三日印刷
昭和七年本月廿三日發行

春陽堂文庫 六十四

〔義時の最期〕

定價金拾五錢

印 檢



著 者 坪 内 逍 遙

發 行 者 和 田 利 彦
東京市日本橋區通三丁目八

印 刷 者 木 呂 子 斗 鬼 次
東京市日本橋區通三丁目八

印 刷 所 東京市小石川區久堅町一〇八
共同印刷株式會社

發 行 所

東京・日本橋・通三丁目
振替東京一六一七番

春 陽 堂

電話日本橋 五一番

79	77	71	70	69	68
犀 星 隨 筆	伽 羅 枕	思 ひ 出 す 人 々	小 説 神 髓	影 燈 籠	チ ロ ル の 秋
室 生 犀 星	尾 崎 紅 葉	内 田 魯 庵	坪 内 逍 遙	芥 川 龍 之 介	岸 田 國 士
近 刊	近 刊	近 刊	近 刊	近 刊	近 刊

春陽堂文庫新刊書目

70	64	63	62	45	44	34
小説	義時の最期	名残の星月夜	牧の方	杏手鳥孤城落月	大いに笑ふ淀葉君	史劇論
坪内逍遙	坪内逍遙	坪内逍遙	坪内逍遙	坪内逍遙	坪内逍遙	坪内逍遙
一五錢	一五錢	一五錢	一〇錢	一〇錢	二〇錢	二〇錢

東京 春陽堂 發兌

終